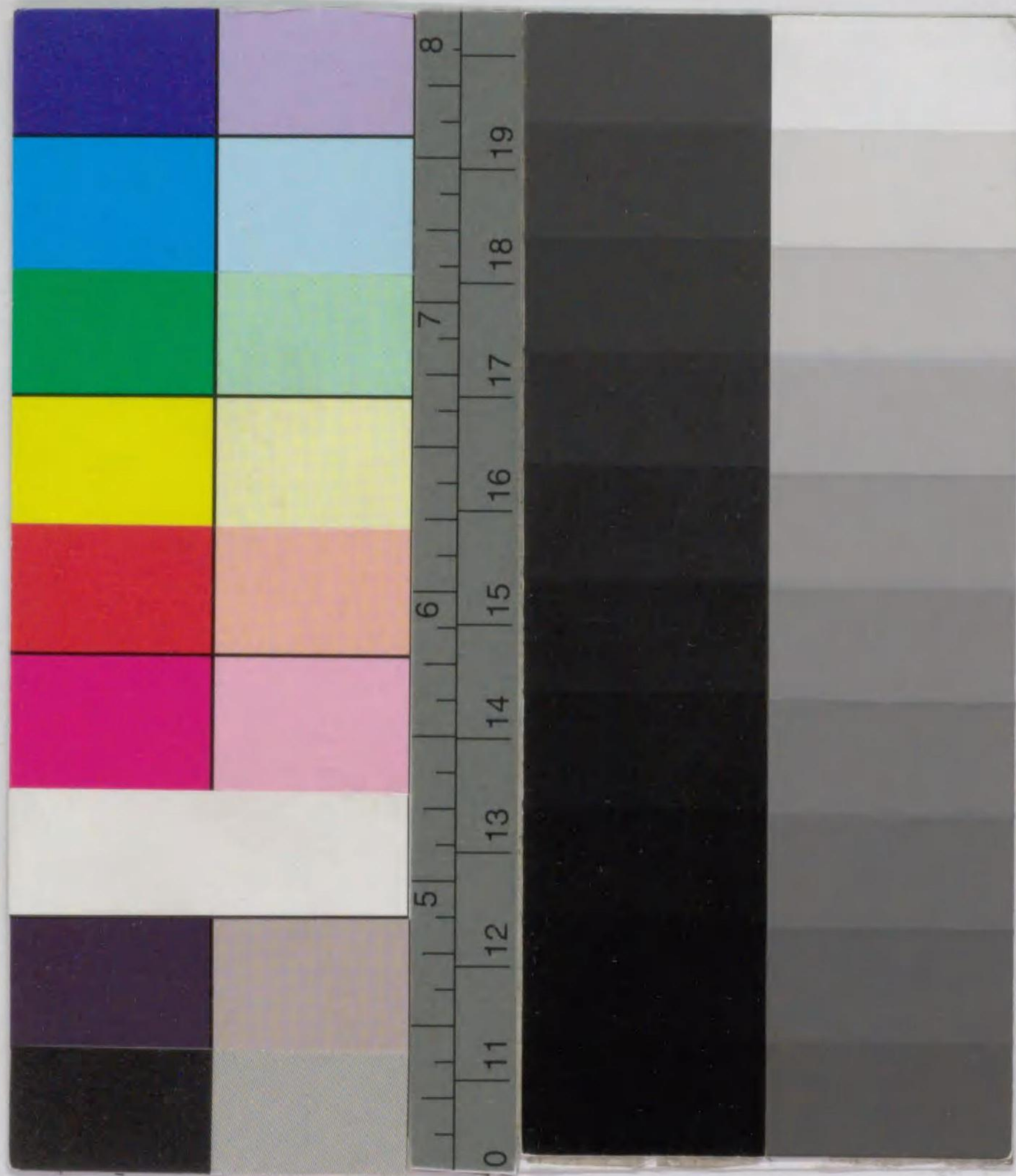


569-61



1200501298522





世界大衆文學全集

オソウルク・ンソンビロ
篇一他 年少五十

—
白石實三



改造社



に舵舵るすとやれは波に浪激、てつなと死必と子の人黒の人一、か年少の人三、はに板甲の號ウロスなれ家
(照参頁五九二).....るかていつりと

569

61

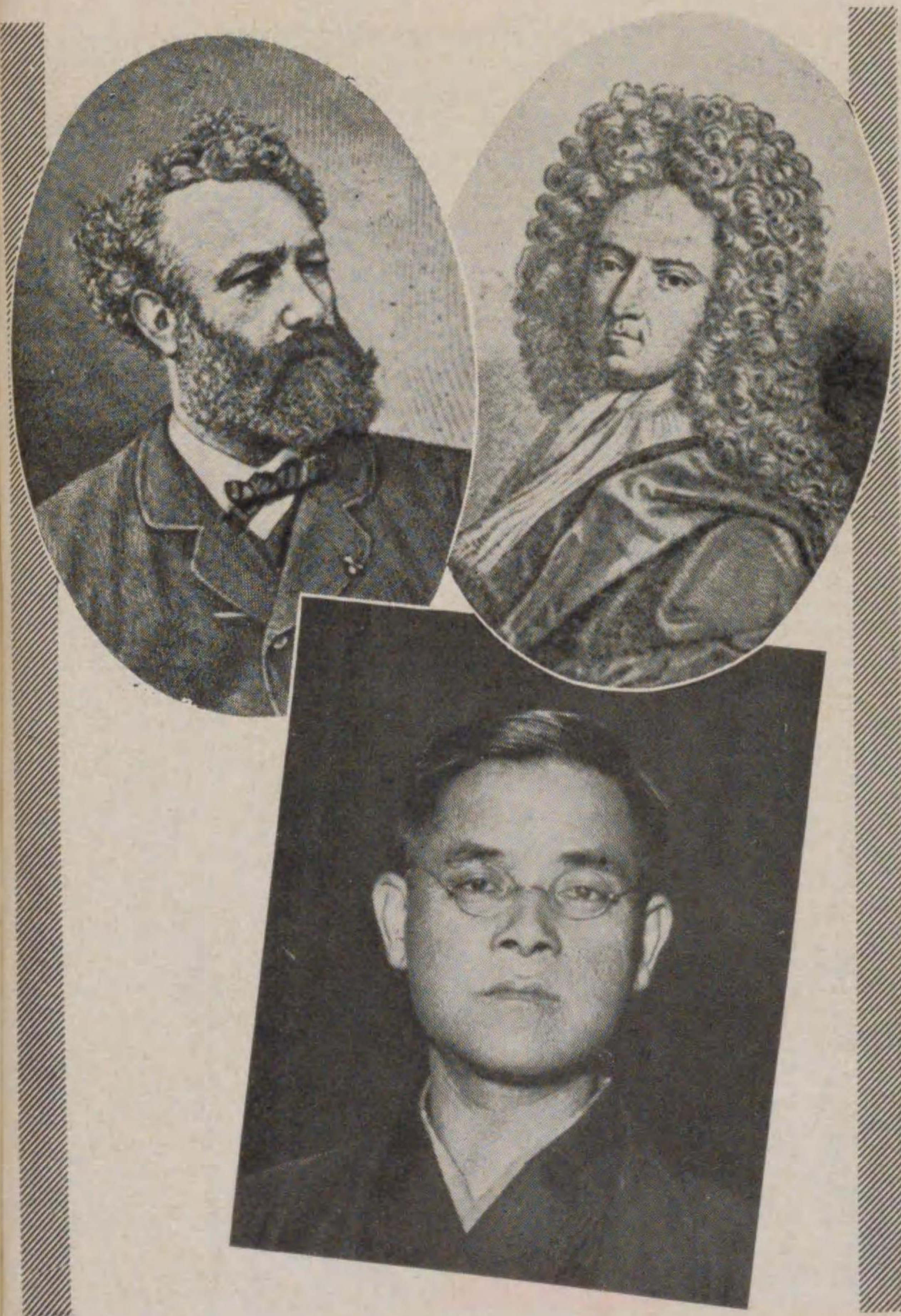


I 種

W



1200501298522



者譯 下 ヌルエヴ 左段上 - オフデ 右段上

はし が き

稚ない頃親んだ「ロビンソン漂流記」は、なぜか、私には長く忘れられなかつた。「なぜだらう？ 筋からいへば至つて単純な物語だけれど」さういふ私の疑問は、それから十年後、ルソーやトルストイを読むに至つて、容易く解けた。

ルソーは、彼が名著「エミール」において、若き主人公エミールをして讀ませたい書が、唯一冊ある、それはロビンソン漂流記であると言つてゐるが、一たび人間社會を離れたロビンソンが、もう一度新しく人間を視、自然を視、神を視てゆく徑路は、特にルソーに喜ばれたに相違ない。同様にトルストイもこの物語に傾倒してゐたが、さういふ偉人を通じて「ロビンソン漂流記」一巻が、いかに近代文明に深い關係をもつてゐるかが、想像されるのである。

ロビンソンは、普通、英國人の完全な典型だと言はれてゐる。植民の先驅者であり、海王だと言はれてゐる。しかし、彼はそれ以上に、人類の眞のヒーローではあるまいか。すくなくとも彼は、独自の力を以て、独自の人生を創造した唯一人である。孤島におけるロビンソンの生き方をたどると、私はさながら、幾千年にわたる人類文化史の活縮圖

を見るやうな気がした。水夫、木工、獵師、農夫、羊飼ひ、乳搾り、陶器師、仕立屋、バ
ン屋、籠作り、それを一身にかねたのが、彼だつた。その上に、彼は發明家だ、牧師だ、
兵卒だ、そして島の總督でもあつたのである。最後には、忠實な神の使徒として、彼の全
生活を完全に活きとほしたのであつた。

たゞ一切のパンを得るために、彼はまづ穀物の種を蒔かねばならなかつた。いな、地を
耕すための鋤から作つてかゝらねばならなかつた。その間の艱苦、忍耐、憂悶、空想、そ
れから明るい信仰へ、眞理へ、幸福へと、歩一歩たどりつく心理の経過も、的確に、むし
ろ冗いほど詳細に描き出されてゐる。

描寫の眞實味。それがこの物語をして不自然に感ぜしめない所以で、名高い作家スコッ
トのごときも、口を極めてその點を推稱してゐる。それといふのもモデルがあつたから
で、且つ、旅行家でもあつた作者デフォーの閱歷の反映たとも言はれてゐる。

「ロビンソンの島の住人は、作者デフォーに他ならない」さう言はれるデフォーは、一六
五九年ロンドンに生れ、一七一九年、この意義ふかい不朽の名作を公けにした。小説とし
て英國文壇に深甚の感化を與へたこの作は、一面、たしかに人間必讀、不磨の經典に近い
ものと思はれる。

ジュウル・ヴェルヌ原作「十五少年」は、故森田思軒の翻譯によつて、當年の讀書界を
風靡しつくしたものである。そして、今日なほ、少年文學は「十五少年」以上に出ないと
言はれるほど、典型的なものである。

この作には「ロビンソン漂流記」の感化がいちゞるしく認められる。たゞ原作者が、科
學冒險作家だけに、記述の最も科學的なのを、特色とする。的確なる自然描寫、豊富な空
想力、推理と觀察。それを彩るものは、可憐な美しい友情であり、愛と涙の熱情である。
科學とロマンスとは、この作において、まことによい調和を保つてゐる。人物の個性を躍
動させてゐる以上に、民族性に觸れてゐる點、一種の社會觀をほめかしてゐる點、いか
にも規模の大きな作である。

故黒岩涙香氏に對して、ボアゴベの翻譯をすゝめたものは、思軒だと言はれてゐる。さ
ういふ行きが、りもあつて、兩先輩に緣故をもつ私は、こゝにボアゴベ原作の「假面の騎
士」一篇を、本冊に添へることにした。これは少年の讀物として、涙香譯の面影を傳へよ
うと試みたもの、本冊の興味を助けるに役立てば、幸ひである。

昭和五年八月

代々木にて

白石實三

目次

ロビンソン・クルウソオ 七
(デフォー作)

假面の騎士 二五
(ホアゴベ作)

十五少年 三九三
(ヴェルヌ作)

ロビンソン・クルソー

ロビンソン・クルソー

目次

ロビンソン・クルソー 1

島の発見 10

島の生活 20

島の発見 30

島の生活 40

島の発見 50

島の生活 60

島の発見 70

島の生活 80

島の発見 90

島の生活 100

ロビンソン・クルウソー

海への憧れ

私は、一六三二年、英國のヨオク市に生れた。父は素と獨逸の商人で、貿易で身代を作つてからヨオク市に移つて來、そこで私の母と結婚したのであつた。

母の生家はロビンソン家といつて、土地での名家であつた。私の名をロビンソン・クルウソーといふのは、そんなところから來てゐるのであつた。

私は三男で、兄二人のうち、長兄は陸軍の中佐だつたが、スペインとの戦争に出征して死んだ。次の兄は家出をして、今以てその行方がわからない。

かうした家庭に生れた私は、やはり變つたところがあつた。商賣のことは、何一つ習はない。ただ、一つ、

「俺も大きくなつたら世界を股にかけて放浪してやらうか」

などと、空想してゐる。

ところが昔氣質の父は夙くから私を法律家にしようと思論んでゐる。だが、私はきかない。母をはじめ、周囲のものが、どう止めようとしても、海に對する私の憧れは消さるべくもない。持つて生れた性分とはいひながら、それが後に、身の破滅にならうとは夢にも知らなかつたのだつた……。

聰明で實着な私の父は、早くも私の心を見ぬいてゐて、しみんと意見するのであつた。

「お前にしても、生れ故郷にあればこそ、安樂な生涯を送ることもできやうが、親の手許を離れ、他郷に出てはなかく思ふやうになるものではない。宅の暮しは中産階級で、何不自由もなければ、氣兼ねといふものがない。いはゞ帝王も及ばない自由な暮し、人も羨む楽しい境遇なのだ。それをお前は何を物ずきに、そんな苦しいどん底生活に飛び込まうといふのぢや？　ね、お止め！　いや、せひ止めてもらひたい」

と、しんみりと説かれた父は、言葉をつゞけて、

「早い話が、お前は生活難に苦しむ身分でもなければ、奴隸となつてその日／＼のパンのために稼がねばならぬ身の上ではない。大それた望みさへ抱かなければ、平穩無事に樂しいその日が送れるのだ。一體、外國なぞへ飛び出さうといふものに、確なものはない、故郷で仕方のないヤクザ者か、でなければ、金がうんとあつてヤマを張る者のする事ぢや。その好い手本がお前の兄ぢや、あれほど私

が止めたのも聴かず、スペインの戦争に出たればこそ、たうとう戦死してしまつたではないか。お前
とてもそのとほり、私の言葉を用ひないで、冒険をするといふのなら、私はもう断じて、お前のため
に神かけて祈りもせねば、神様とても幸福は下したまはぬだらう。相談相手の親がなくなつてから、
きつと後悔する日が来るだらう」

さう言ふ父は、ほろ／＼と老の眼から涙をこぼされて、しんみりと意見されるのであつた。さすが
の私も親の慈悲にはほだされて、もう家出はすまいと、決心した。

が、二三日経つと、またもや素の考がふらく／＼と湧いて来て、押へようとしても抑へることが出
来ない。そこで、今度は手を代へて、母の機嫌のよい時を見計ひ、父を説いて貰はうと思つた。

「ねえ母さん、僕だつてもう十八歳です、丁稚奉公するにも、辯護士の許へ書生に住み込むにしても
年をとりすぎて居ります。たとひ、奉公したところが、結局は家を逃げ出して、好きな航海に出るに
きまつてゐます。第一、男が一旦思ひ込んだことを成就しない中は、落着いてゐられるものぢやあり
ません。だから、母さんから父さんに願つて、たゞ一度だけ船乗になることを許して下さい。決して
二度とは出ませんから」

すると母は非常に驚いて、

「飛んでもない、この子はなんといふ不心得なのでせう、お父様がいけないとおつしやるものを、な

んで私が許せるものでせう」

で、それから一年といふものは、母も、父も、私の日常の様子にばかり眼をつけてゐて、自由に外
出も許さない。さうなると、私も頑固だ、仕事もせず、不平ばかり言つて、面白くもないその日／＼
を送つた。

さういふある日のことだつた、私が偶然、ハルといふ處に行くと、そこで一人の友達に出會つた。

その友達は、父の持船に乗つて、ロンドンに出帆しようとするところだつたが、私に向つて、

「どうだ、船賃はいらないから、ぜひ同行しないか」
と、すゝめたものだ。

すゝめられた私も、ついふらく／＼と行く氣になり、両親に一本の手紙も書かず、消息はいづれ後の
噂で知れもしやうと、たうとうロンドン行きの帆前船に乗り込んでしまつた。

時に、一六五一年九月一日。

海へ！

後で思へば、この日は、私にとって世にも稀れな悪日だつた。少年冒険者の不幸に遭つた者は數あ

るが、私のやうにのつけから酷い目にあつて、それが長く／＼續いた試しはすくないのだ。

船がハンバア港を出るか出ないのに、もう風が吹き出して、海はすさまじく暴れ出した。でなくとも海には慣れない私、船暈の苦しみは烈しく、恐ろしく、今更に両親の訓戒、わけても父の涙をためた眼や、母の泣いて止めた言葉が、ひし／＼と思ひ出されるのであつた。

親と神とに背いた自分を烈しく悔いるのであつた。

だが、今はどんなに悔いてもおよばない、風はますます／＼吹き荒れ、海は暴れるばかり、船は今にも大波に飲まれ、波と波との間に沈むかと思はれるたびに、私は、思はず聲を立てるのであつた。

「神様、神様、もしお蔭で助かつて、二度と陸の土を踏むことが出来ましたら、私はすぐと父の許に歸ります。もう／＼決して、生涯船に乗るやうなことはしませぬ！」

苦しい時の神頼みで、そんな弱音も吐いたのであつた。

が、さういふ實着な考へも長續きはしなかつた。やがて夜に入つて、風落ち、満天水のごとく晴れわたるにつけ、さらに夜があけて、日が美しく、曙の空に燃え、餘光麗しく波を染めるのを見ると、私は、さしもの船暈もけろりと忘れた。海の變化の面白さが、いかにも愉快で、魅せられて、その夜は楽しく熟睡した。

そこへ例の友達が来て、

「どうだ、クルウソオ君、大丈夫かね？ 昨夜はあれぼちの風で参つたやうだね」

言つて、ぼんと後から肩を叩いた。

「あれぼちの風だつて？ ひどい嵐だつたぢやないか」

「嵐？ 馬鹿言つてら！ 船さへよければ、あれぼちの風、なんでもないさ。けど、なんしろ君は新参だからなあ。まあ来たまへ、氣晴しに一ぱいやらう。どうだい、今日の風は素敵ぢやないか」

で、誘はれて、水夫等の仲間に入り、一緒に酒を飲みはじめると、私もいつか微酔機嫌になつた。

酔ふと共に、昨夜の苦しみなぞは、すっかり忘れ、あれほど神に祈つた殊勝な氣持などは、さらりと何處かへ行つてしまつて、性來の冒險心は、またむらく／＼と湧いて起る。

あゝ我ながら不心得な奴、神様は、容赦なくまた一つの罰を下し給うた。

暴風…難波

さて、船出してから六日目に、ヤアマスの淀泊所に着いた。

そこで風さへ衰へれば、すぐにも出帆する筈だつたが、生憎四五日といふもの西南の逆風が吹きつのである、船出もならなかつたが、幸ひそこは淀泊所として安全なところだつたので、われ／＼は港

同様に心得、且つは避難船の仲間も多かつたので、例により愉快な船中生活をした。

すると、八日目の朝から風が俄かに増して来た。私達は、急にあわて出した。總が、りで前橋を切り倒したり、物品を取片づけて船を安静にしたが、晝頃になると海はますます荒れはじめ、山のやうな大波は、ど、ど、どつと前甲板におつ被さり、船は木の葉のやうに揺れ漂つた。そこで、船長の命令で控への錨が下され、二つの錨の綱が延ばされた。

この時の風濤の恐ろしさ、海に慣れた水夫等でさへおどくして、さしもの船長ですら、神を祈つた。

「あ、神様、もう駄目です、もう一人も助からない」

さういふ祈りをきくと、たかをくつてゐた私も、もうちつとしてはゐられない。いきなり船室を飛び出して海を見渡すと、あ、何といふ物凄さだらう！山なす怒濤は引つきりなしに襲つて来る。その慘澹たる状況、言葉もない。すぐ近くにゐた二隻の船は、帆柱を折られて、さらに向うの一隻はむざんにも沈没したと取沙汰される。その他の二隻は、沖合に吹き流され、帆柱は折れ、帆はめちやめちやに吹き破られてゐる。

しかも、日暮に従つて、風はますます吹きつゝのる。水夫と水夫長とは、たうとう船長に迫つて、前橋を切り倒した。それでもいけないので、大柱も切り倒した。

船の甲板はすつかり裸、もう帆柱一本もない。

それでも、その恐ろしい嵐を防ぐことは出来ないとも見え、水夫等は、

「難破だ！難破だ！」と叫び廻るのであつた。

幸か不幸か、その時の私は、まだ「難破」の意味を知らないで、何の恐れも感じなかつたのである。

さういふ間も、船長や水夫等は、神を祈りつけ、今にも船は沈没するかに見えた。夜中になると誰かあわて、叫んだ。

「大變だ、船底に穴があいた」

「あ、もう水が四尺も浸水して来た！」

「それ、急いでポンプにか、れ！」

總掛りでポンプにかゝる有様を見ると、私はもう生きた空はない。自分の室の寢臺へ、どうと倒れてしまつた。

それを、

「やい、どうしたんだ、ポンプなら、君だつて使へるぢやないか」さう言つて、皆が私を引き起す。で、私もむつくり跳ね起きて、ポンプに取りついた。

そこへ、向うから二三隻の石炭船が、風のまに／＼吹き寄せられて来る。と見た船長は、「それ！」とばかりに、合圖の鐵砲を一發打たせた。ずどん！と鳴る一發の銃聲。それは救ひを求め合圖なのであつたが、さうとは知らない私は、すは船が壊れたと早合點して、ばたりとそこへ倒れてしまつた。そして、氣絶してしまつた。

避けがたい宿運

けれど、一同も必死の場合。倒れた私が死なうが生きやうが見向きもしない。ふと、私の傍を通りかゝつた一人が、死んだものと思つたか、ぼんと足で蹴つた。

蹴られて、私は、はつと氣がついて、息を吹き返した。

その時は、船はもうすつかり水を被つて、沈没を待つばかりであつた。船長は絶えずぼん／＼と鐵砲を打つて、救ひを求めてゐる。やつと、向うの船からボートをよこしてくれた。

「それ、救ひのボートだ！」

一同は、躍り上つて、喜んだ。すぐに、綱を艦の方から投げかけ投げかけて、ボートにつなぎ、や

つと一同乗り移る。向うの本船をめぐけて、漕いで出る。

が、吹く風の烈しき、本船へ漕ぎ着くことなどは思ひもよらない。ボートは漕いだり、流れたりして、岸よりに北へ北へと進み、遠くウインタアトン・ネスあたりまで行つてしまつた。

振返つて見ると、私達の船はもう沈んでしまつた。私達が船を見捨て、から、わづかに十五分、船は早くも海底の藻屑と消えてしまつたのであつた。

波上に残る渦巻を示しながら、水夫等は叫ぶ。

「見ろ、見ろ、これが難破といふのだ！」

だが、私は眼をあげて見る勇氣もなかつた。

「これが恐ろしい難砂だ」といふことは解つたが、今の私は恐れと、驚きと、後悔のため、心はそのまま、體の中に死んでゐたも同様だつたのである。

水夫達は懸命に波を乗り切つた。山なす怒濤にボートが乗り上げた時、ちらりと岸が眼に見えた。濱には多勢の人々が、私達を助けようとして、あちこち走り廻つてゐる。

私達のボートは、ウインタアトンの燈臺の向うを遠廻りして、やつとのこと、濱に着いた。まづまづ危い命を助かつたのである。

それから、陸路をヤマアスの市にたどり着くと、市民は、不幸な私達に、温かい手をさしのべて、

一同をいたはつてくれた。市の役人は、休養所まであてがつてくれ、これからロンドンなりヘルなりへ歸る旅費として金まで恵んでくれた。

こゝで、私がおしハルへ歸り、家へ戻る氣が起つたなら、生涯の幸福だつたに相違ない。父とても私がアマス沖で難船したことは人傳てに聞いて居つたに違ひないから、私が不意に歸宅したなら、父はどんなにか喜んで、例の祕藏の牡牛でも屠つて、狂喜して私を迎へてくれたに相違ない……が、いかなる惡運に見込まれたものか、私はどうしても宅へ戻る氣にはならなかつた。「歸らなければならぬ、ならない」さうは思ひながら、さて思ひきつて歸宅を決行する氣にならなかつた。それどころか、なほも海の生活に親しまうと決心した。

「まゝよ、これが自分の運命なら、避け逃れることをすまい、抗ふこともすまい。反對に俺は眼をあいて、いつそ、その運命の唯中へ突進してやれ！」

船長の忠告

この私の決心を聞いて驚いたのは、例の私を勵して海へ誘つた友達だつた。船長を父にもつ彼も、二度の災難で、つくづく閉口したらしく、

「いや、そりや考へものだ、考へものだ……」と頭を振つた。

父の船長の方も、私に向つて、

「君はもう海にゆくことは斷然止したまへ！ 今度の災難で見ても、君は將來船乗になるのは、よくない兆がある」

「兆？ それは、また、どういふわけでせう？」

私は、反問した。

「さうとも、兆だとも！」と、船長は、ひどく不機嫌で「君は第一、初航海からして、失敗してゐる。それといふのも、神の意志に反したからであつて、此方から言つても、君のやうな縁起の悪いものを乗せたればこそ、船が沈んだのだ、たとひ千ポンドの金を貰つたところが、君のやうなものを、二度と船に乗せるものか、眞平だ、眞平！」

難破で損害を受けた船長は、興奮もして居る際、さんぐくに毒づくのであつた。そして、

「とにかくも、神の意志に従つて、も一度親許へ歸つたがよい」と、しんみりお説法をしてくれたのであるが、しかし、一旦かうと定つた私の決心は、梃でも動くものではなかつた。

私は、船長の言葉にも服さないで、たうとう物別れとなつてしまつた。

その後、船長がどうなつたか知らないが、とにかく私は懐に多少の金があつたので、陸路ロンドンをさして行つた。

人生のコース

ロンドンに着いたところが、めぼしい仕事のありやうはずはなかつた。海におけるやうに、陸においても、私には困難がつきまとつてゐた。

「いつそ、家へ歸らうか」さうも思つたが、さて歸つたところで、どの顔さげて郷黨にまみえよう。

「やつぱし俺は海だ！ 海だ！」

海か？ 陸か？ これから人生の行程をどう取らうか、私とても、いろ／＼に迷つたのである。

迷つてゐる中に、初航海での憂目もだん／＼忘れかけて来た。「とにかく家へは歸れない」といふ氣持は、持前の放浪癖と重なつて、またもや、海へ海へと、憧れたのである。

ロンドンにゐる間、私は、ふと一人の船長と知り合になつた。この船長なる人は、性質も親切だつたが、先頃ギニイ地方へ航海して、彼の地で非常に成功したので、近々また二度目の航海に出ようと、いふところだつた。

渡りに船と、私は早速、世界周航の希望を打明けると、船長も快く引受けて、

「よし、君がさういふ望みなら、一錢も出さなくともよい、船長待遇で乗せて行つてあげよう。また君が一儲けしたいなら、商品でも仕入れてゆくがよい、行く先々で貿易も出来るし、彼方へ渡れば、また何かうまい仕事もあらう」

と、至極耳よりな話。早速、私は玩具や小間物類を取交せて、四十ポンドばかりを仕入れ、船に乗り込んだ。

一體、私が船乗として成功しなかつたのは、水夫として乗り込まなかつたからだ。もし私が、水夫として海上生活を始めたなら、労働の方は苦しからうが、その代りには、船中の仕事も覚えて、將來は、船長といかないまでも、副船長ぐらゐにはなれたかも知れないのであつた……

それはともかく、今度のギニイ行は、私には非常に愉快なものであつた。恐らく私の生涯の冒険中、成功したのは、この一航海ぐらゐのものであつた。

正直で義侠心に富む船長から、私は、數學や航海術、その他船乗に必要な知識を、萬遍なく授けられた。實にこの航海で、私は申分のない水夫になつた許りでなく、一角の貿易商人にも仕立られた。

私が、ギニイから持歸つた五ポンド餘の砂金は、ロンドンで三百ポンドに賣れた。が、これがそもその病みつきで、私の心は、ますます南洋に向ひ、そして、後には取返しつかない羽目に陥つて

しまつたのであつた。

といふのは、ロンドンに歸るとまもなく、船長が病死した。代つて副船長が船長になつたが、私は再びその船に乗つて、ギニイに出帆することになつた。儲けた金の中、二百ポンドは前船長の未亡人に預け、百ポンドだけ身につけて、出かけたものだ。

海賊船に捕はれて

船が進んで、カナリイ島とアフリカの間にさしかゝつた頃だつた。ある日の明方、突然、サレエ邊の黒奴の海賊に襲はれた。

海賊船は、十分に帆を張つて、折からの追風を受け、一直線に追つかけて来る。

「それ海賊だ！」

といふので、此方も出来るだけの速力を出して逃げのびようとしたが、敵の追撃は愈々急だ！

「もう駄目だ、追ひつかれた！」

「仕方がない、一戦争しよう。なあにたかゝ海賊だ！」

「さうとも、此方には、十八人も剛の者がある！」

「おまけに鐵砲も十八挺ある。やらう！」

「やらう！ さあ、戦闘準備だ！」

時に午後三時頃、海賊船は、たうとう追ひすがつて来て、船尾から襲ひかゝらうとしたが、間違つて船腹へ船を着けた。こちらは、

「得たり！」と、八挺の小銃を向けて敵船の横腹を撃つと、何かは堪らう一時にさつと船を引いた。

が、忽ちに備を立て直して、海賊およそ二百人ばかりばらばらと甲板に姿を現はすよと見るまに、一齊に銃口をそろへて、

「ど、ど、どつ！」と撃つてかゝつた。

こちらは必死に防禦する。する中、反対側の船腹からは、早くも海賊六十名ばかり、遮二無二、こちらの船に飛び込んで来て、あれよくと立ち騒ぐまに、帆を切り、纜を切り落してしまふ。

私達ももう大童。小銃、手槍、火薬と、手當り次第の武器をとつて、海賊と渡り合ひ、さんくんに敵を惱しはしたものの、さて情ないことには、こちらの船は帆や纜を切られてあるから、進退が自由でない。おまけに殺されたもの三名、負傷者を出すこと八名といふ始末で、口惜しくもたうとう海賊船に降参することゝなつた。

そして一同、捕虜として、黒人族の港サレエへ連れて行かれた。

海賊船を脱す

捕はれた一同は、内地ふかく王宮へ曳かれて行つたが、私だけは残されて、海賊の奴隸にされた。人の運命といふものは、まつたく解らない。昨日までは一角の貿易商人として幅をきかせてゐたものが、一朝にして惨みな海賊の奴隸の境遇に陥らうとは！

「變れば變る身の上だ」私は、またしても過ぎし日の父の戒めを思ひ出したのであつたが、しかも、私の長い、冒險的生涯から考へると、これなどはほんの初歩の振出しにすぎなかつたのであつた。

晝は、庭の番人、でなければ走り使ひ、船の留守居番、そんなことで、私は、こゝに二年をすごした。その二年間も、私は隙さへあれば、

「逃げ出してやらう。脱走してやらう」と、空想したり、計畫することを怠らなかつた。

幸ひに私は年も若し、生れつき機敏だつた。で、海賊船長の氣に入られて、よく魚釣のお伴を仰せつかつたものだが、ある日のこと、船長は都合で行けず、その代りに一人の黒奴とジュウライといふ小僧をつれて、私を釣りに出した。

「これこそは天の與へ、今日を逃して脱走の機會があらうか」

私は心に勇み立つた。かういふ時の用意にと、かねて隠しておいた糧食に、酒類、米、コーヒーなどを船に持ち込んだ。

その上、魚釣の合間に鳥を撃たうといふので、獵銃、彈藥も持ち込んだ。ベンを入れた籠、水を入れた瓶、ラムプ、錐、斧、鋸、槌、あらゆる準備はとつて、船は沖合へと出た。

見渡す海上に船も見えない。

「折こそよけれ」と、私は、つと黒奴の方へ寄つた。同時に相手の腰へ手をかけるなり、とんと海へ突落した。

突落された黒奴は、浮子も同様な泳ぎ上手の男、すぐにばかりと浮き上つて來て、叫んだ。

「助けてくれ……船へあげてくれ」

「い、や、ならない！」私は、銃口をびたりと彼の頭につけた。「貴様、船へ觸つたら、たゞ一發だぞ！幸ひ、貴様は泳ぎの名人だ。その上、海は静かだから、早く向う岸へ遊いでゆけ、命だけは助けてやる、早く行け！」

言ふと、黒奴も解つたものか、くるりと向きを代へて、岸の方へと泳ぎ去つた。

船では、少年ジュウライが、私の早業に呆れて立つてゐる。私は振向いて、

「おいジュウライ、どうするか？ 今度は貴様の番だぞ！どこまでも俺に従ふか、それともあの黒

奴のやうに海へ叩き込まれたいか!

すると、少年はにたと笑つて、無邪氣に、

「はい、私はどこまでもあなたの忠實な僕になります」

「よし、ちやあ誓ふね! 貴様がその氣なら、俺も誓つて、後に貴様を出世させてやる!」

で、私はジュウリイに手傳はせて、帆を張つた。そして、満帆に風を孕ませて、後白波と走り出した。

獅子を撃つ

走ること五晝夜、最早や追手の恐れはないと見て、とある河口に錨を下した。が、思へば心細い話で、そこが何處の國か、どんな人種が住むか、皆目見當がつかないのであつた。

たゞ飲料水がなくなつたので、夜になつたら、上陸して様子を偵察しようと思つただけだつた。

ところが、夜に入ると同時に、濱邊にあたつて、野獸の吠聲が聞えて來た。何の獸だか解らない。解らないだけに一層恐ろしい。

ジュウリイは、齒の根もあはず、がた／＼慄へ出した。

する中、名も知れぬさま／＼な猛獸は、海へ入つて、びちや／＼と水を飲んだり、浴びるらしい。

あまりの恐ろしさに、私は銃をとつて、闇へ向けて、一發、

「ズドン!」と、打つて放つた。

その銃聲が、一層獸を怒らせた。忽ち、岸には百獸の猛り吠える聲が、ごう／＼と起つて、夜の空に響きわたる物凄さ! 二人は、まつたく生きた心地はなかつた。

夜のあけるのを待ちかねて、二人は怖々陸に上つた。そして、飲料水を取ると、そのまま、また巖地の海岸づたひ、およそ十日も航海をつゞけた。

ある朝は、二人で小高い岬の下に錨を下して、潮の満ちるのを待つ折しも、ジュウリイは、急に聲をひそめて、

「あれ、あれ、あそこに怪物が眠つてゐます」

「なに、怪物?」

見ると、何様、向うの小丘の影に、大きな怪物が横になつてゐる。よく見ると、一頭の大いなる獅子だ!

「よし、俺が今仕止めてやる!」

私は銃をとつて、念入りに火薬をつめた。そして、丸をこめて頭に狙ひをつけ、

「どつー」と一發、打つて放つと、獅子は一聲高く吠えて、むつくり起き上つた。その姿の凄さ、恐ろしさ！ 私はすばやく第二發を放つと、見事に頭部に命中して、ぼつたりと倒れた。

で、命の根の絶えたのを見ずまして、私とジュウライとは、獅子の傍へ近づいて行つた。まったくすばらしい獲物だつた。が、獅子だから、まさかその肉を食べることは出来ない。せめて皮だけ剥がうといふので、二人がかりでやつと毛皮を剥がして、それを乾しあげると、立派な敷物になつた。

その敷物に坐つて、私はジュウライに帆を張らせた。指してゆく先はヴァード岬で、そこへさへ行きつければ、きつと歐洲がよひの船に逢へると思つたのであつた。萬一にも、そこで船に逢へなかつたが最後、私は蠻界に漂着して、猛獣かそれとも、喰人種の餌食になる他はないと思つた。

心細い航海をつゞけること二十日あまり、ある日、私は行手四五里ばかりのところ、一つの岬を見つけた。

「うん、あれこそ目指す岬に相違ない。どうかしてあそこに船をつけたいものだ」私は船室で獨りやきもきしてゐると、舵をとつてゐたジュウライが不意に大聲で叫んだ。

「船長、船長、帆前船です！」

「なに、帆前船だ？」私も飛び出した。

「さうです、帆前船です！ ですが、あれは海賊船です！」ジュウライは、聲をふるはせて恐れる。

私は、ちつと瞳を定めた。

「いや違ふ。あれはたしかにポルトガルの船だ。海賊船がこゝまで追つかけて來るものか。さあジュウライ、あの船に追ひつゝがよい！」

生涯の大悪目

船を寄せると、嬉しや、果してポルトガルの貿易船で、ブラジルへ航海する途中なのであつた。

おまけに船長は、非常に親切な優しい人で、すっかり私達に同情してくれ、船賃もとらずに、無賃でブラジルまで乗せて行つてくれた。その上、ブラジルへ行くと、少年ジュウライの身柄まで引取つてくれ、私には別に土地の有志へ紹介状を書いてくれた。

「ジュウライよ、これでお前は自由の身となつた。出世の緒はひらけた。俺は、お前への誓ひを果たしたよ」私はジュウライに別れの言葉を送つたのである。

それはそれとして、私の氣性としては、ブラジルへつく早々、そこが有望な土地であることを、すぐ悟つた。すこしの土地を手に入れ、砂糖栽培業を始めた。

ちやうど、隣りには、リスボン生れのポルトガル人があつて、それと協力して、製糖の外に煙草の試

作もやるといふ風に、事業もやがてだん／＼大きくなつて、四年後には、土地も大分買ひとりし、二人の人まで使ふやうな身分になつた。

かうなると、私も益々気が大きくなつて来る。持前の分にすぎた望みを起すやうになつて来る。「さうだ、俺も男兒と生れたからには、これぼちの成功に満足してはならない。今一度海へ飛び出して、あわよくば世界周遊の望みを果したい」

持つて生れた氣性は致し方ないもの、私はまたぞろ船に乗り出したくなつた。一攫千金の、夢のやうな熱い望みに燃えた。

遊びに来る商人達にも言つた。

「私はかう見えても、ギニーへは二度も航海したよ。面白いのは、ギニーの黒奴との貿易だね、何しろガラス玉やナイフ、鍔、せい／＼斧ぐらゐの子供だましの品物を持つて行つて、それが砂金だの、象牙だのと交換できるのだからね。おまけに黒奴の奴隷まで、いくらも手に入る」

「へえ、黒奴の奴隷が？」

商人達は、眼をまるくした。それもその筈、當時、賣買されてゐた奴隷といふものは非常に高價で、しかもブラジルの栽培人としては、人手もあるし、奴隷が欲しいところであつた。

「ぢやあ一つ、押し出すかな」商人達は、すぐ乗り氣になつて、

「クルウソオさん、あなたが案内人格になつて下さい。その代り、あなたからは資本は出させない。尤も儲けは山分けにしますがね」

「いゝとも、一か八か、押し出して見ませう！」

私は二つ返事で承知した。神ならぬ身のそれが後の破滅にならうとは知らず、ついか／＼とギニー行に賛成して、早速用意に取りかゝつた。

とにかく、冒險な旅行だから、私は、栽培場を始め私の財産一切について、遺言状を書いた。そして、航海中もし萬一のことがあつたら、私の財産一切を、例の私の命の親たるポルトガルの船長に贈ることにつぎめ、船長から、その半分を、英國の親元へ送るやうにと、手筈をきめた。

そして、いよく一六五九年九月一日といふに、ギニーに向けて出帆した。忘れもせぬ、その日こそ、私が八年前に兩親に背いて家を飛び出した同じ日、私にとつては、不吉きはまる生涯の大惡日なのであつた……。

坐礁！ 難船！

乗つた船は百二十噸ばかり、總員は船長とそのボーイ、それから水夫十六名、六門の大砲を備へつ

け、勇みに勇んで、大海へと乗り出した。

先づ、ブラジルの海岸を北へ、それから轉じて、アフリカに向ふべく、いよく、果しない遠洋に出た。

航海およそ十二日間、緯度を計ると、まさに北緯七度二十二分へかゝつた頃だつた。その時、俄かに一天掻き曇つた。と思ふまに、すさまじい颶風が襲來して、波は逆立ち、海は荒れて、方角も何も解らなくなつてしまつた。

荒れに荒れる大洋の中に、船は木の葉のごとく浮きつ沈みつ、漂ひつして、吹き廻され、追ひ立てられて一同生きた心地はなかつた。

すさまじい暴風雨の中に、一人の水夫は、船暈で死んだ。それだけでも、颶風のいかに猛烈だつたか、解らう。その上、も一人の水夫と船長のボーイとは、波にさらはれるといふ有様、しかも嵐は、十二日も續いた。

十二日目、風がや、風きかけたのを機會に、船長が船の位置を觀測すると、北緯十一度ぐらゐのところに来てはゐるが、いかにも船が損んでゐるので、すぐブラジルさして引返すか、それとも、何處ぞ島でもさがして船をつける他はないと、定つた。

する中、風がまた荒れ出した。慘澹たる嵐の中に、船の針路も違つてしまつた。一同は運を天に任

せて神を念するばかり。

と、ある朝、突如一人の水夫が、

「陸だ！ 陸だ！」と叫んだ。

「それ！」とばかり、一同甲板へ飛び出すとたん、どしんと船底に不氣味な異様な物音がして、船は忽ち淺瀬へ乗り上げてしまつた。

「もうおしまひだ！」

一同は、眞青になつて、船室へ逃げ込み、一緒に集つてがたく、慄へるばかりであつた。

さういふ中に、さすがは船長、水夫を勵まし勵まして、ボートを下させた。そして總勢十一人、命からんくボートに乗り移ると、オイルを頼りに、果しもない荒波の唯中へと乗り出した。

あたりは黯澹として、晝か夜かも解らない。まして、乗りつけようとするのが、岩壁なのか、砂地なのか、淺瀬なのかも解らない。

たゞ一同は必死懸命に漕ぐだけは漕いだ。いくら、漕いでも、陸地などは見當らない。

およそ一里半も漕いだと思ふ頃だつた。突然大波が、がぶりと來た。潮のやうな大波！ その波に乗る時は、山へでも登つて行くやう、と思ふまに、波間の谷へ突き落されて行く。死は刻々と迫つて來る。

かうしておよそ一海里半も漕いだと思ふ頃、山のやうな大波が一搖れ、不意に船尾の方を襲つて来た。一同思はず、

「あつー」と叫ぶとたん、ボートは忽ち轉覆して、一行十一人、ほんの一瞬間に、海の中へ散つてしまつた。

溺死を免れて

海の中へ沈んだ時の、私のうろたへ方といつたら、なかつた。私も泳ぎは達者なつもりだが、山なす大波を、泳ぎぬけることは出来ない。たゞ、幸ひに、力強い波は私の體を乗せて、砂の上へ投げ出した。

私は夢中で、陸をめがけて駆け出した。後から追つて来る大波にさらはれまいとしたのだ。殘忍な敵のやうな大波は、後から／＼追つて来る。私は、やはり夢中で、あたりのものにしがみついた。それが、巖の端だつた。

その巖に、命から／＼這ひ上つて、草の上へ、べつたり坐つた時、私は息もたえ／＼ながら、ほつとした。

あ、私は助かつたのだ！

だが、私と生死を共にした十一人の仲間、どうなつたらう？ 見渡す海上には、波が依然として高く、風が荒れ狂うて、人つ子一人姿も見えない。

「さうだ、俺一人助かつたのだ、皆な溺れ死んだのだ……」

思はず私はさう叫んで、喜んだ、深く哀しんだ。狂人のやうに渚を駆け廻つた。事實、仲間は皆な溺れ死んだのだ、その後、岸へ打寄せられた四つの帽子と、片々の靴二つを見つけた時の、私の悲嘆は非常なものだつた。

「さうだ、俺は助かつたのだ、だが、こゝは一體どこだらう？ 一體、俺はこれからどうしたらよいのだらう？」

さう思ふと、喜んだのも東の間、恐ろしさ心細さに、身を慄はすのであつた。第一、私は着のみ着のみ、食べ物もなければ、飲むものもない。身につけてあるものとは、ナイフ一挺と、パイプ一本、すこしの煙草、これで猛獸が防げやうか、猛獸よりも恐ろしい蠻人があらはれたら、どうしよう……

さう考へると、あまりの恐ろしさに、私は狂人のやうに、走り廻つた。子供のやうに聲をあげて泣いた。

助かつたのが嬉しいのか、哀しいのか、解らないやうな氣持だった。
泣きながら、傍の樹へよち上つて、そこで一夜をあかし、翌日、ゆるく死に方を考へることにきめた。

必需品を探しに

それから、幾時間たつたか知らない。ふと、眼がさめると、日がかんく照つてゐる。自分は？
と見ると、樹の枝の股に跨がつて、危ない恰好で眠つてゐたのであつた。

見ると、海上には、さしもの嵐も収まつて、岸から一哩ばかりの巖のところには、私達の船が浮いてゐる。

右手二哩ばかりのところには、昨夜のボートも浮いてゐる。

が、ボートとの間には、入江があつて、渡れない。

「だが、差しあたり必要なものだけは船から持つて来たい」

とにかく、私は、泳いで船へ行くことにきめた。折から干潮だったので、船のところまで泳ぎつゝのも、さう困難ではなかつた。

で、船に上ると、私はまづ眞先にパン部屋へ駆け込んだ。かぶりつくやうにビスクケットを喰べたり、ポケットに入れたりした。

「さあ、かうなつたら、この船のものを運び出すより他はない。」

私はだんく勇氣が出て来た。船内の板や椀木や、短い帆柱などを利用してまづ筏を造つた。そして、差當り必要なものを、運んでゆくことにした。

パンや、米や、チーズや、それに山羊の肉、鶏の餌にしたすこしの大麥、小麦、酒の瓶。それから大工道具の箱、鳥銃七挺、ピストル二挺、それに要する火薬と彈丸袋、古刀二本——まづ、そんなものを乗せて、陸へと運び始めた。

運び終ると、また引返して、こんどは餌袋や、手斧や、砥石や、金挺や、水夫の着物や、帆や、吊床や、運べるだけ運んだ私の骨折り、苦心といふものは、形容することは出来なかつた。
私は、それをたゞ獨りの力と苦心で、陸へ移したのだ。

あゝ絶海の孤島

荷物と一緒に、陸へ引上げると、私はそろく土地の觀察にかつた。

「こゝは一體、島か大陸の一部か、それよりも住む人間があるのか、猛獣の危険はないか？」
 私は、あたりを見廻した。さつぱり見當がつかない。見ると、向うに一座の険しい高い山がそびえてゐる。私は拳銃を持って早速、山に上つて行つた。
 登りつめた私は、思はず、

「あゝ、島だつたか？」

と、がっかりして叫んだ。いくら見ても、のび上つても、こゝは四面海に取り巻かれてゐる小さな孤島である。西の方には、遠くかすかに、小さな島らしいものが見えるが、それも海上三里餘も離れてゐる。

絶海の孤島である上、まったく手のつけられない荒地なのだ。たゞ、森があつて鳥類が多い。私が拳銃をあげて、一羽の鳥を撃ち落とすと、銃の音と共に、さまざまの鳥が群れ飛んで、けたましく鳴き立てる。

おそらく、銃の音などは、この島開闢以來はじめてひびいたのであらう。
 山を下つて來ると、荷物はやはり元のまゝだ。誰も來た様子はない。たゞ、一疋の野猫が箱の上に坐つてゐるばかりである。この猫は船に飼つてあつたもので、筏に乗つて來たのだが、私を見るとちつと此方を見つめて、馴れ親しまうとするやうに見える。

「そら」

私がビスケツトを投げてやると、ちよつと嗅いでみてから、もつと欲しさうな様子だつたが、やがてのそくへ行つてしまった。

「家」を定む

後に残つたのは私一人。まったく獨りぼつち。

ともかく、住む場所をさがさなければならぬ。

あちこち、さがし廻つたあと、と見ると、岩山の下に窪みがある。

「此奴はうまいぞ」

と、私は早速そこを住居ときめた。

前の草原にテントを張り、周囲には杭を打ち連ねて、こゝに一箇の、住居といふよりは要心堅固な要塞を作りあげた。蠻人や猛獣の襲來をひどく恐れた私は「家」も、出来るだけ堅固にしなければならなかつたのだ。

それから私は、幾度となく船へかよつては、器物を運んで來た。剃刀、鋏、ナイフ、フォーク、そ

れから三十六ポンドもある貨幣も持つて来た。ちやらくくと鳴る金貨や銀貨を運んだ時は、私は何となくし可笑くなつた。

「ふん、金貨も銀貨も、今の俺には一文の価値はないな、船いつばいのダイヤモンドよりも、俺には、この一挺のナイフの方がどのくらゐ有難いか知れない！」

かうして、十三日後、俄かに吹き起つた烈風で、船が壊れるまでに、私はあるかぎりの必要物を船から取り出して来た。

船に生残つた一疋の犬も連れて来て、これから長く私の唯一の友となることゝなつた。

その犬を連れて、山羊を狩りに行つたり、住居を作つたり、いよく孤島における、世にためしなき不思議な私の生活が始まつたのであつた。

暦を創む

その生活の、どんなに寂しい、哀しいものであつたかは、これからの私の物語でしみじみ書いてもらひたいと思ふが、まづ第一に、私は自分だけに覺えの暦を作らうと思ひ立つた。實際、何かの方法で暦でも作らなければ、日も何も解らないやうな境遇であつた。

私は大きな柱を作つて、大十字架とし、その上へ、

「一六五九年九月三十日、この土へ上陸す」

と、大きく書いた。さらに、柱の一面へ、毎日一つ宛の刻み目をつけ、七日目の刻み目は長くし、一月目のはさらに長くして、日、週、月、年と計算の出来るやうにした。

かういふ時、私が船から持つて来たベンヤ、インクが、どれほど私に役立つたか知れない。實際、あの船が壊れずにあつたために、私は奇蹟的に助かつたのであつた。

後で運んで来た品物の中には、紙もあつた。コンパス、日時計、望遠鏡、海圖、航海日記、それから幾冊のバイブルなどは、以後三十年の長い間、私の命と魂をも、あはせ救つてくれたやうなものであつた。

幸、不幸

一疋の犬は傍に侍るけれど、動物の哀しさは、言葉を交すことは出来ない。あまりの寂しさ、あまりの哀しさ……せめてもの心やりに、私は、自分の今の境遇をつくつくくと考へ返して、幸、不幸の對照を書き並べてみた。

不幸

私は恐ろしい寂しい寂しいこの孤島に
棄てられて、もう二度と歸れる望みは
ない。

私は、選ばれたる不幸なものである。

私は人間界から隔離され、人間社會を
逐はれたものである。

私は、身につける着物とてもない。

私は話相手もない。

幸

が、幸にも私は生きて、仲間の人達
のやうに瀕れ死はしなかつた。

が、私は選ばれたる生者である。

が、かうした荒地にあつて、私はどう
やら飢死もしない。

が、氣候が暑いので、着物があつたと
て着られない。

が、神様は、岸近く船を送つてくれた
ので、必要品は手に入れた。

かう竝べてくると、世にも不幸な私の身の上でも、考へやうでは、慰めもあり、また光りもあると
いふことを知つたのである。

その望みに誘はれて、私は、まづ巖屋の發掘にかゝつた。巖屋の穴を掘りひろげて、そこを安全な
住居ともし、道具の置場ともした。出入口には、高い梯子をかけて出入りするやうにしたので、たと
ひ猛獸があたとしても、私の身の上は絶対に安全なものにした。
私はまた非常な苦心で、椅子とテーブルとを、工夫して作つた。

「絶望の島」

世の多くの人粗末にしがちなインク、それが今の私には、どれほど貴重な大切なものだったか知
れない。私は、心の落着くにつれて、そのインクの盡きるまで、「日記」をつけようと思ひ立つた。

私の漂着したこの島を、假りに「絶望の島」と名づけ、九月三十日「絶望の島」へ打上げられてか
ら、明くる年の暮になつても、私は丹念に正確にその日々の出来事やら、感想やらをつけ込んで行
つた。

心細くも、インクが盡きかけると、それを水にうすめたり、最後の一滴まで惜しみながら、日々

記録は廢さなかつたのであつた。

年の暮までの私の重なる仕事は、住居を堅固にしたこと、晝は鐵砲を携へて、屋外に出て、鳥や山羊を射止めて食事にしたこと、その山羊を飼つて牧畜を始めようと思ひ立つたこと——などであつた。

一月三日——私は蠻人でも來はせぬかとの恐れから、壁を作り始めた。その壁は二重塙の土で築いたもので、もし海邊から人が來ても、人の住居とは思へぬほど、要心のよいものであつた。

私はまた燈火の工夫をした。以前、アフリカへ冒險旅行した時、蜜蠟の塊りで蠟燭を作つたことがあつたが、こゝでは蜜蠟がない。で思ひついたのは、山羊を殺した時、脂肪をとつておいたことだ。私は、粘土を乾して拵へた小皿へ、その脂肪を入れ、糸を燈心がはりにして火をともしてみると、どうやら燈火になつた。

青いく大麥の芽

それより前、私は穀物を入れた空袋を船から持つて來て、巖穴の前ではたいしたことがあつた。そのことは忘れてゐたが、この頃ふと見ると、巖の前の地面に青々と柔かく芽をふいてゐる草がある。

「何かの雜草だな」最初は氣にもとめないであつたが、雨のあと、見ると、草からは十ばかりの穂を出してゐる。

「おや、大麥だ！ しかも、英國の大麥だ！」

私は、びつくりして叫んだ。喜んだ。

「おゝ、これこそは神の恵みでなくて、何であらう！ この孤島の荒地に、蔞かぬ大麥が自然に生えて、穂を出さうとは！」

私は、この時ほど、神のふかい慈悲を、しみくと感じたことはなかつた。神の恵みは、そればかりではない、巖のあちこちには、妙な草のやうなものが新芽を出してゐる。

よく見ると、それは、たしかに稻だ！ 稻の刈穂だ！ あの十粒か十二粒の穀粒がかうして雨にめぐまれ、日の光を受けて、地に生きやうとは！ 私は涙ながらに、天を仰いで、神に感謝した。

まつたく私にとつては大切な大麥だつた、稻の穂だつた。これから私は、わづかな穀物を育てあげて、その實を蒔き、種をふやして、パンなり、米なりにしようと思ひ立つたのであつた。

病と藥

五月四日——今日は釣に行つて、海豚一尾を捕つた。釣針とはなく、糸だけで捕つたのだ。捕つ

た魚は、いつも日に乾かして食べるのだ。

六月十六日——磯へ行くと、一疋の大きな龜を見つけた。龜を捕つたのはこれが始めてだったが、實は島の向う側へ行けば、日に何百となく捕れたのだ。

六月十七日——今日は、龜の子の料理でくらしした。龜の腹からは六十も卵が出た。この島へ来てから、山羊や鳥こそ食べたが、肉にありついたのはこの龜の肉が初めて、何ともいへず、うまかつた。

六月二十日——昨日より、發熱、頭痛がひどい。

六月二十五日——悪性の瘧で、苦しむこと七時間、寒悪と熱と、發汗に悩まされる。

六月二十七日——瘧がひどく、終日飲まず食はずで臥床、渴きがひどいけれど、起きて水を飲みに行くことも出来ない。死ぬかとはかり心細く、哀しく、ちつと横になつたま、祈りをあげる。

「主よ助けたまへ……主よ、憐れみたまへ」

私は、瘧の収まるまで、二三時間も、さう祈りつづけた。私の生涯で、この時こそ初めて心から神を祈つたやうなものである。

六月二十八日——病氣も大分よくなつた。夜、龜の卵を三つ灰の中で焼いて喰べたが、神の恵みを感謝しながら物を喰べたのは、この時が初めてだつた。

神のことが、頻りに思はれる。眠らうとしても、心が亂れてゐるから寝つかれない。燈火を明るく

して、ぐつたりと椅子に凭れて考へてゐると、また明日の瘧のことが氣にかゝつて、哀しくなる。

「どうしたらよいものか」考へ悩んでゐる中、ふと思ひ出したのは、ブラジル人は煙草を用ひて、どんな病氣でも治すといふことだつた。

早速、煙草を取り出すと、五六冊の書がばらりと出る。その中に聖書もある。

實際、今の私には、醫者もなければ、薬もないのだ。兎に角、煙草の葉を一枚、口に入れて噛みしめてみると、まだ枯れないためか、頭がぐらぐらする。仕方がないので、石炭の火に燃やして、もうもうと立ちのぼる煙りを嗅いでみる。嗅ぎながら、聖書を讀む。

「悩みの日には、我を呼べ、我、爾が悩みを釋かん。而して、爾また我を崇むべし」

身にしみるやうな聖書の言葉が、ひしと胸にこたへる。する中、煙草がきいて來たとみえて、しきりに眠氣を催ほして來た。私は寢床に入らうとして、生れて初めて、神を祈つた。

跪つきながら、

「神よ、願はくは來つて我を救へ」と祈つたのであつた。

そのおかげか、私は、翌日はぐつぐつと寝た。翌々日も熟睡した。氣分もすつかり治り、食慾も出て、日ならず全快したのであつた。

七月四日——今日から、私は、日課として聖書を讀むことにきめた。神に聽き、神に謝し、自らを

深く咎める氣持が、初めて私に起つたのであつた。

「この島は、私にとつては自由の領土であるか、また一面には、海に鎖された牢獄でもある。しかしこの島を逃れることよりも、私はまづ私の罪から、逃れなければならぬ。私は心から、つくづくさう叫んだのであつた。」

美しき谷の別荘

早いものだ、私がこの島へ漂着して、人類會てない生活を始めから、早くも十ヶ月経つた。

この島には人も住まず、猛獸もゐないことを確かめたので、愈々七月十五日を期して私は全島探検の志を立てた。全島を探検して、まだ知らなかつた生産物を發見しようと思ひ立つたのである。先に筏をつけた入江を起點にして、私はまづ三日間にわたつて、海岸を歩いて見た。二哩ばかりゆくと、一條の清い流れがある、河岸には、青々とした煙草の葉が茂つて、蘆がある、砂糖の樹がある。その他、名も知らぬ草が生え茂つてあるが、哀しいことに、私は植物學の知識がないので、どんな種類の草か、解らない。

草原の盡きたところから、森林となつて、そこはいろいろの果物がなつてゐる。眞桑瓜はごろ／＼

と横はつてゐるし、葡萄はふさ／＼と枝から垂れて、見る眼にもうまさうだ。

葡萄の實は、あまり健康によくないときいてゐるので、私は喰べることは好加減にして、あとは乾葡萄にして、貯へることにした。で、その夜は、その樹の上に寝た。

自分の家でないところに泊つたのは、その夜が初めてであつた。

あくる朝から、さらに北へ／＼と進むと、唯見る一場の廣場へ出る。草木は青々と茂り、空氣はしめつて、その美しいこと、さながら植物園である。

「美しい樂園よ、この谷は皆な私の所有であつて、私はこの國の王である—

繪のやうな景色に見惚れながら、私はさう叫ぶのであつた。

「私はこの島の唯一の王だ。もしこの土地を本國へ持つて行つたら、それこそ私は立派な貴族だ！」

谷を下りると、そこにはコ、アの樹がある。橙、レモン、佛手柑、ライムなど、滴る汁はうま／＼

匂はしく、私は獨り、かきりない愉快を味ふのであつた。

家へ歸つてからも、その美しい谷の景色は、忘れられなかつた。水あり、樹あり、果實あり樂園の住心地は、今の家よりは、はるかによいと思つた。

「が、待てよ、もしこの家を移したあとで、この海岸へ船でも漂着したら、どうしよう? と云つて、あの谷の美しさも棄てられない」

谷の景色は、たうとう私を誘惑した。遂に私は、谷の方に小さな小屋を造つて、七月中は向うで暮すことにきめた。

早速、小屋掛に取りかゝつて、出来上ると、その廻りには、巖壁の高い二重塀をめぐらして、塀と塀との間には、例の逆茂木のやうな樹を植込んで、梯子で出入りするやうな装置にした。

小屋の中で、すっかり安心して寝ながら、私は獨り得意になつた。

「これで、俺も海の本宅と、田舎の別荘と、二つ住居を持つたといふものだ！」

聖なる記念日

八月末のことであつたが、行方不明になつてゐた猫が、だしぬけに三疋の子猫を連れてのそつと歸つて来た。

「多分どこかで死んだらう」と思つてゐた猫が、子猫を、しかも三疋まで連れて来たのだから、私はびつくりもしたが、それで、家族が増えたわけだ。

考へてみると、私は、前に野猫を鐵砲で撃つた記憶はある。しかし、その猫は、歐洲の猫とは、種類がちがつてゐた。それが、今度来た子猫を見ると、親猫と同種類である。

私は不思議でならなかつた。

私は食事の規則をつくつた。

朝………乾葡萄一房。

晝………山羊または龜の肉一斤。

夜………龜の卵二三箇。

雨は毎日降りつゞく。私は、雨中の仕事として、毎日二三時間づゝ巖屋の取りひろげにかゝつた。掘り進んでゆくと、たうとう丘の外側の塀の外へ出てしまつた。

「これはすこし要心がわるいな……だが、島の動物といつては、せいゝく山羊位のものだ、大したこともあるまい」と、新しい穴を出入口にした。

九月三十日となれば、孤島へ漂着してから、一周年の記念日である。曆代りに建てた柱の刻み目を數へれば、まさに三百六十五日！

私は、この日を大切な聖日として、地にひれ伏して、神に祈り、神の恵みを願つた。そして、十二時間断食して、日暮時に、ビスケツトと、一房の葡萄を喰べて、一日を清くすべく過して、寢床に入つた。

……こゝまで書いて来たが、大事のインクが、乏しくなつた。それからは日記をやめて、主な出来

事だけ書きつけることにする。

季節と自然生活

人類から隔離された私は、反対に自然に親しむ人間とはなつた。長い間の観察で、私はこの島の季節が、歐洲のやうに夏冬といふものはなく、雨期と晴天期に分れてゐることを、知つた。すなはち、
雨期……二月半より三月をへ、四月の前半。
晴天期……四月半より五、六、七月をへ、八月の前半。
雨期……八月半より九月をへ、十月の前半。
晴天期……十月半より十一、十二、一月をへ、二月前半。
私もこの季節に適應して生活した。晴天期には野外に出て、獵をしたり穀物の種を蒔いたりした。いつかの大麥と米の種も一時は失敗したが、季節のことが解つてから、成功するやうになつた。雨期の準備のため、できるだけ、食物を貯へるやうにした。
さて、雨期に入ると、家にとちこもつて、日用品の工夫をしたり、手細工で日を暮した。本宅と別荘の兩方に植ゑた杭の樹は、いつか青々と葉が茂つたが、いづれも柳の一種だったので、その枝を乾

かすと十分籠細工の材料になつた。

海の彼方の陸地

「いつかは全島を残らず探検してやらう」この考はいつも私の心を支配してゐた。それが、中途で小屋を建て、しまつたので、その先の森林から向うの様子はまだ知らなかつたが、「今度こそ」と思つて、いよく全島探検の行を起すことになつた。私は、いつもより多くの彈藥を用意した。兵糧としては、ビスケット、乾葡萄酒を携へ、他に鐵砲と斧を準備し、犬を供にして、出發した。
別荘から西へ道をとると、からりと海がひらける。折から一天晴れわたる海上はるかに眺めると、ふと陸地のやうなものが見える。
たしかに陸地だ！大陸の一部か、島かは解らないが、前方およそ二十海里の海上にあたつて、陸は西から西南の方に突出してゐる。
私は、ちいつと見入つた。

「さうだ、ことによるとアメリカの一部かも知れない。それもスペイン領に近いところだ、ことによ

ると、あそこらに住んでゐるのは、皆な獯猛な野蠻人なのだな」
考へるだけで、私は、ぞつとした。恐ろしい、喰人種の住家——そこへ漂着しないで、かうした孤島へ上陸した自分の運の好きが、つくづくありがたかつたのである。

鸚鵡を飼ふ

「それも、ひとへに神のおかげだ。だが、あそこが果してスペイン領だとすれば、二艘や三艘の船はいつも往來してゐるはずだが……」

私は、考へながら歩を運んだ。ゆけばゆくほど、あたりの景色は、いつそう歡しく面白い。一面の廣野は、草花の薫りに満ち、樹は美しくこんもりと茂つてゐる。

「や、鸚鵡だな」

私は、林を飛ぶ鳥に眼をつけた。

「あれを一羽捕りたいな。そして、言葉を教へ込んだら、どんなに愉快だらう！」

私は、棒を振りあげて、やつと一羽を叩き落した。

それはまだ雛とも言ふべき鸚鵡であつたが、私の手で捕へてから、丹精して飼ひならし、幾年か後

には、私の名を呼ぶやうに教へ込んだのであつた……。

獸としては、野兎や狐が多かつたが、ことにこの邊へ來ると、龜が非常に多かつたので、御馳走にありついた。海鳥も、それはく多かつたが、その中で、私が名を知つてゐるのは、ペンギン位のものであつた。

この旅行中、私の犬は、一疋の子山羊を捕つて來た。

「うむ、これはよいものを手に入れた。山羊を養つてさへおけば、たとひ彈藥がなくなつても、食料になる」

で、私は、その山羊に頸輪をはめ、紐をつけて別荘の方に虜にしておいたが後に餌をやると、だんだんなついて來て、後には犬同様、愛らしく溫和しい家畜になつたのである。

犬、猫、山羊。私の家族は益々殖えてゆく。それに、鸚鵡といふ一員も仲間に加はつたのである。

私は、鸚鵡のために、ボルといふ名をつけてやり、籠もつくつてやつた。

神は爾と共に

「あゝ、世界に、俺ほど不幸なものはない。俺こそは、この大洋といふ錠を以て鎖された牢獄中の囚

人である。無人不毛の孤島にとちこめられ、永久に放免されない囚人である」

實に今日まで幾度か、私はさう悲観して、哀しんだことであらう。家の中で仕事をしてゐる時でもこの考が嵐のやうに襲つて來ると、私はもう遣り場のない哀しみに追はれて、おい／＼聲を立て、子供のやうに泣き叫んだのであつた。

でも、泣くか叫ぶかすれば、哀しみも柔らぐけれど、ぢいつと黙つて、一時間も二時間も、地面をみつめて坐り込んでゐる時の苦しさ、辛さは、何とも言ひやうがなかつた。

さういふある朝、ふと聖書を取り上げると、書いてあつた。

「神、爾を捨てず、爾を孤りならしめず」

「さうだ！」私は、思はず聲高く叫んだ。

「さうだ、ほんたうに神様さへお捨てなされないなら、全世界の人が皆な私を捨てたところが、何であらう。よしました、私が全世界を所有したところで、神様に捨てられたら、何の生甲斐があらう」

この時からだ、私が今の境遇を幸福だと考へるやうになつたのは！そして、神様が、この孤島に私を送りつけて下さつたことを、むしろ、感謝さへしたい氣持になつた。

孤島に漂着して二年目に、まったく私は、今の身の上を幸福と感じて、神に謝したのであつた。

哀しみはすっかり消えて、私は嬉しかつた。歡しい安らかな氣持で、私は第三年目の生活を迎へ始め

めた。

私は、改めて日課をつくつた。

- 一、神に對する務めを怠らず、一日三回聖書を読むこと。
- 二、晴天には、毎朝約三時間、鐵砲を以て外出、食料を獲ること。
- 三、室内の整理、細工物、料理。

詩いた種

十一月の交に成ると、そろ／＼大麥や稻の收穫季節になつたが、私は、また一つの災害に見舞はれた。

それは、山羊や野兎が、穀物の新芽を喰べてしまふことだつた。そのため、私は急速力で垣をつくつたり、鐵砲で獸を打ち止めたり、犬を使つて番をさせた。で、穀物は、どうやら無事に穂を出しかけた。

すると、第二の災難が來た。今度は、鳥だ！ どこからどう來たのか、それは名も知らぬ無数の鳥類が群が／＼來て、穂をつゝいてゐる。

「これを食はれてなるものか」
私は、鐵砲を取つて、ずどんと一發撃つと、ぱつと飛び立つ鳥群は、まるで、黒雲のやうに凄じかつた。

さすがの私も、これにはすつかり閉口した。いろ／＼考へたあげく、放つた鳥を鎖にかけて畑の中に鼻すことにした。この案山子がうまく圖にあたつて、鳥群は恐れて、寄りつかず、おかげで、私は麥三斗、米二斗の收穫を得た。

蒔いた種といへば、わづか二升五合ばかりのものだつたのに……。

「これこそ神の與へたバンだ！」

私は心から喜んだ。が、また考へると、折角、收穫はあつたが、これを搗くことを知らなければ、粉にする方法も知らない。

今や、私は、文字どほりバンのために働く人だつた。「バンのため」といつても、私のやうに働いたものは、世になかつたであらう。

私は種を蒔いた、生やした、乾かした。だが、まだ／＼喰べるといふところには行かない。私はこれを篩つて、焼かなければならない。

いな、その前に、私は土地を耕すために、鋤やシャベルからして造つてかゝらねばならなかつたの

だ。鋤だけは、木造のもので間に合せたが、さてそれで土を耕す努力の、どんなに辛いものだつたかは、想像にあまりあるだらう。

さて、粒々刻苦の穀物を、家に運び入れた今になつて、搗くべき臼と、篩がない始末だ。パンにするにしても、麴もなければ、鹽もない。おまけに、焼くべき爐もない次第だ。

その上に、人手といつては唯一人！ 時には、私もうんざりしたが、また思ひ返して、いよくパンを造るに必要な諸道具から造つてかゝることに、決心した。

道具だけ造るのに、およそ六ヶ月もかゝつたのであつた。

鋤を一挺造るのに、一週間かゝつた。垣を造り上げるのに、三ヶ月もかゝつた。

しかし、この間、私のなぐさめとなつたのは、わが愛らしい鸚鵡ボルに、人の言葉を教へ込むことであつた。

「ボル！」

と、私が呼びかけると、鸚鵡は、ちよつと考へてゐたが、突然、

「ボル！　ボル！」

と、大きな聲で叫ぶのであつた。

この聲こそ、この鳥へ來て以來、私が初めて聞いた言葉なのであつた。

人間の歴史を一人で

私は、二ヶ月間の慘憺たる苦心を重ね、工夫を凝して、二つの不恰好な陶器の瓶を造つた。引續いて、壺や、皿や、甕や、土瓶をつくり出したが、最後に、穀物を搗く臼をつくるには、さんに手古摺つたのであつた。

初めは白になるやうな石をさがしたが、島の石は皆な柔らかなので、臼としては使へない。そこで堅い樹をさがして、中を穿りくぼめようとしたが、それも容易な業ではなかつた。

私は、中を焼いて、穴を穿つたが、その苦心の様は、ブラジルのインド人が、獨木舟をつくるのもかうかと思はれるばかりであつた。

とかくして臼と杵とが出来上ると、今度は、篩だ。それには、船から持つて來た水夫用のモスリンの襟巻を利用して、どうやらかうやら小さな篩三つを工夫して製造した。

次はパンを焼く竈、これにもさんく惱んだが、それもどうやら成就して、パンや菓子が出来上つた時の愉快さ、得意さ！

「これこそは世界一のうまいパンだ！」

と、私は得意になつて、喜んだものであつた。

が、こんなことで、第三年目は暮してしまつた。さうであらう、私は、人類初まつて以來、何千年間のことを、私一人ですつとしたのだから……。

懐しの對岸

私の心を絶え間なく騒がせ、惹き附けてあるものは、海を越えてかすかに望んだ、かの大陸の突角だつた。

「あそこには人が住んである。いつかは、この寂しい島を逃げ出して、あそこへ渡りたい！」
さう思ふあとから、

「いや〜、あそこには蠻人がある。アフリカの獅子や虎よりも恐ろしい喰人種がある。あそこへ渡つたが最後、俺はすぐに喰はれてしまつて、萬が一にも助かりつこはない……。」

私は曾て聞いてある、カリビアの海岸には、人を喰ふ人種があると。今、緯度から計つてみても、こゝはどうやらカリビア海岸に遠くはないらしい。

「と言つて、俺は行つてみたい！ たゞ〜あそこへ渡つてみたい！」

あこがれの陸地へ渡つてみたい一心から、ある日、私は、海岸へボートを見に行つた。
そのボートといふのは、最初、難破した時、陸ふかく吹上げられたものが、行つて見ると、元のところにあるにはあるが、逆さにひっくり返つて、あたりには砂が山のやう。とても、引き下して海へ浮べることなどは、思ひもよらない。

「どうだらう、これを修繕して、ブラジルへ乗つて歸れまいか」

が、實際はそんなことが出来るものではない。よし、この島を動かしたところだが、このボートを起すことは出来ない。それほど、陸地ふかく、砂の中に埋まつてゐたのであつた。

「さうだ、これは断念して、俺はいつそ獨木舟を造らう！ なあに、黒奴やインド人の野蠻人だつて造る獨木舟だ。造らうと思つて俺に出来ないはずはない。獨木舟！ こいつは素敵だ、素敵な思ひつきだ！」

二十六人乗の大獨木舟

あとで考へれば、無鐵砲なくはだてだつたが、私は、まづ森へはひつて、一本の大きな檜を切り倒した。

大きいと言つても、法外に大きな檜で、根本の太さ直徑六尺、高さ二丈二尺といふ巨木で、これを切り倒す私の手間も、大したものだつた。

斧と手斧を使つて、根本を切るのに二十日間、枝葉を折るのに、十四日間かゝつた。その上、船の形に削り上げるのに一ヶ月、さて、それから、内部をくりぬいて、いよく舟に仕上げるのに三ヶ月もかゝつたものだ。尤も内を焼くやうなことはせず、槌と鑿ばかりでコツ／＼やつたものであるが、我ながら、根氣のよい勞作だつた。

出來上つてみると、二十六人はたつぷり乗れる大獨木舟。

「うむ、これなら、俺の財産は、すつかり積み込めるぞ。獨木舟としては、恐らく空然絶後かも知れないぞ！ さあ、この舟で、俺は前代未聞の大冒険、大航海を斷行するんだぞ！」

私は、まつたく得意だつた。この大きな獨木舟を水に浮べて、大海の荒波を乗り切る痛快さを想像した。

ところが、こゝに一つの故障があつた。と言ふのは、舟から海岸までの間に、小高いところがあつて、舟が出せないのであつた。

「しまつた、氣がつかなかつた」

我ながら不覺だつたと後悔しながら、私は、舟と海との間を掘りにかゝつた。地面を掘り下げて傾

斜をつけようと思ひ立つたのだ。

私は掘りに掘つた。一念は恐ろしいもの、たうとう、小丘を掘りくづしてならしてしまつたが、今度は舟が動かばこそ！ それもそのはず、こんな大木の舟が一人の力で動かすははずはない、たとひあのボートを起せたとしても、今度の獨木舟を、動かすことは出来ない。

「よし、ぢやあ、海から掘割をつくつて、舟を水に流してやるぞ！」

さう力んではみだが、さて實際について測量すると、海から舟まではかなりの距離で、これを二本の腕で掘つてゆくとすれば、すくなくとも、十年か十二年の仕事だ！

「十二年かゝるかなあ」

私は、がっかりして深い／＼嘆息をついた。

「やつぱり俺の考へは無駄だつた。かうと知つたら、最初から細かく計畫も立て自分の能力も研究しておくのだつて……」

人間としてよみがへる

とかくする中、島の生活は早くも四周年を迎へた。

四周年の記念日には、例によつて私は神に謝し、安らかな一日をすごした次第であるが、神を信じてれば信じるほど、私の考へは變つて來た。

私は、特に言ひたいことがある。それは私の物の見方が、根本的にちがつて來たことだ。何物に對しても、何人ともちがふ考へを抱くやうになつて來たことだ。この點は、よく聞いてもらひたい。

私は、人間社會といふものを遠く離れてしまつた。曾ては私が生活した人間社會といふものから全然かけ離れて、人間社會に對しては、今の私は、何の望みもなければ、期待もない、關係もない。

第一に、私は、人間社會の罪といふものから逃れてしまつた。私には、卑しい慾望といふものが無い、眼に美しいものを觀、虚榮に誇らうといふ望みがない。たとひ、望んだところが、それは皆な得られないものなのだ。たゞ、私はこの全島の王なのだ。いはゞこの全島の帝王だといつたところが、誰が私に抗し、私と競争しようといふものがあらう。私に服従しないといふものは、誰一人もないのである。

穀物だつて、私は殖さうと思へば、いくらでも殖えて收穫を收めることが出来る。たゞ、不必要であるから、自分一人の必要の分だけしか作らないのである。

食用の龜にしても、私は捕らうと思へば、いくらでも捕ることが出来るが、一匹捕れば、自分一人喰べるには餘るほどなのだ。船だつて、造らうと思へばいくらでも作れる、乾葡萄酒にしろ、葡萄酒に

しろ、船何艘にも積み込むほど、あり餘つてゐる。

と言つたところで、價値のないものは仕方がない。自分で使ひきれないものは價値のないもので、私には何の用もない。食物にしても、腹いっぱい喰べたあとは、私にはちつとも必要ではない。慾ばつて喰べきれない肉を得たところで、犬にやつてしまふ他はない。喰べきれないほど種を蒔いたところで、あまりは棄て、しまふばかり。樹を伐つたところで、煮焚に使ふ他は、地上に棄て、腐らせ、しまふばかり、こゝでは餘りものは、まったく價値がないのである。

一口に言へば、一般社會で珍重がられるものも、私には珍重ではない。自分で使へる以上のものは、私には、すて、も値うちがないといふわけである。

「考へてみると、俺も物持になつたものだ……」

私はいきなり、呷くのであつた。

「實際、俺のやうな境遇に陥つたら、どんな守銭奴だつて、改心せずにはゐられまい。それほど、私は物を持つてゐる。使ふことの出来ないほど持つてゐる。だが、俺の心から欲しいものは、ほんのちよつとした些細なものなのだがあ！」

先にもちよつと言つたやうに、私は現に金貨で、三十六ポンドといふ現金を持つてゐる。が、情けないことには、こんな金など、一向私には役に立たないで、場所ふさぎになつてゐる。金があつたと

ところで、私はまったく使ひ途がないのだ。

私は、獨りによく考へた。

「誰か俺に五六本のパイプをくれなかなあ！ さうすれば、俺は即座にこの金をやるがなあ……パイプでなくとも、穀物を挽く手臼でもい、蕪の種、人參の種でもい。いや空豆一握り、インク一瓶でも、すぐ取換へるんだがあ！」

持てあましもの、金は、巖窟の中の抽斗に、轉がつてゐる。それも、雨期には濕つてかびが生えるばかりだ。

「だが、金ばかりぢやない、この抽斗いづばいにダイヤモンドが満ちてゐるところで、今の僕には、何の用もなければ、價値もない」

祈りと感謝

「俺は幸福だ、食べる物がある！」

食卓につくたび、私はまづ跪びついて、神の恵みを厚く謝するのであつた。こんな荒れた島の中に、食卓をひろげることの出来るといふのは、ひとへに神のおかげだと感じて、つとめて、暗い方面

のことは考へず、心を明るく、持ち直さうとした。

「常に不平を抱く世間の人達よ、俺は楽しい」

私はさう呼びかけて戒告したくさへ思つた。

「人が不平を抱くといふのは、神に謝する心が足りないからだ。俺にしても、神の助けがなかつたらば、もつと不幸な目にあつたかも知れない。それを、あの船がこの島近くで、坐礁したればこそ、俺は危ふいところで助かつたのだ。いや、そればかりではない、筏を作つてあの船からいろく、なものを取り出せなければこそ、俺はかうして、満足な人間の生活が出来たのだ。あゝ、あの時、俺に鐵砲がなかつたら、どうしたものだらう？ 道具がなかつたら、どうしたものだらう？」

私は惻然として、今さらに心から神の慈悲を感じずにはゐられなかつた。

身の不幸を嘆つ世の人々よ、願はくば、自分より、より不幸な人達の身を考へよ、しからば、最早、身の不幸を不幸とは感じないはずだ。

思へば、私の前生は、罪ふかくも空恐ろしく愚かしさのかぎりであつた。幼ない折、両親は神のことを説かれもし、神の恵みの廣大なことを教へ込まれたものだが、長じて放浪生活に入つてからは、いつも心に神を瀆すのみ、しかも神はなほ未だに私を棄てたまはず、限りない保護と恵みを垂れたまふ、さう思へば思ふほど、私の心は神に對する感謝の念に満ち／＼るのであつた。

「さあ、働かう！」

さう思つて、勇んで身を起す時、私の心は、殊に神に對する熱い信仰に満ちた。その日／＼の糧に事缺かないこともありがたいが、この無人の島にゐても、暮しの立つのが嬉しくてならなかつた。

交るべき社會がないと言つたところが、なまじつか厄介な交りのないのもよいし、またこゝには、獐猛な害獣のないのも、幸ひだつた。こゝには私の命を脅かす狼もゐなければ、虎もゐず、毒蟲もゐなければ、特に、人を虐殺して食ひ食はうとする蠻人のゐないのが、何より仕合せだつた。

「この生活は哀しい生活だ、だが、一方には恵まれた生活だ！」

私はさう繰り返して、熱烈に祈りを日課にしてさゝげるのであつた。

被服の用意

孤島生活が長くなるにつれて、私の所持品もだん／＼減つて來た。まったく使つてしまつたものもあれば、盡きかけて來たものもある。

大事なインクも、最早や残りすくなになつて來た。

とぼしいインクの中に、私は水を入れ／＼しては薄めて使つたが、しまひには、まったく薄くなつ

て、殆んど紙に寫らないやうになつて來た。

でも私はインクのあるかぎり、月の中、重なる出来事であつた日のことを書き込んだ。自分で書いたものを讀み返してみると、不思議なことに、よいこと、悪いことのあつた日が必ず重なる。その日が九月三十日だ。最初、私が両親の家を飛び出してハルへ行つた日が九月三十日なら、黒奴

の海賊に捕つて奴隸にされたのも九月三十日、ヤアマスの碇泊所で難船の憂目を見たのも同じ九月三十日。それから、少年ジュウリイと黒奴の海賊船長のところから逃げ出したのも九月三十日なら、その日が生憎私の誕生日にあたつてゐて、たうとうこの孤島へ漂着してしまつたのも同じ九月三十日といふ不思議な因縁にながれてゐるのであつた。

インクがとぼしくなつた上、ペンが缺乏して來た。ペンといふのは、船から運んで來たビスケットのことで、これは私が儉約に儉約をして、一年あまりといふもの、毎日たつた一つ宛しか喰べなかつたものであるが、穀物の取れる一年前に、すっかり喰べつくしてしまつたものである。

着る物も破れはじめた。一體、島の氣候は暑いし、着る物もいらないわけだが、暑ければ暑いなりに、裸では外出できない。もし裸で外出しようものなら、皮膚も焼けるほどの暑さなのだ。だから、シャツを着て出る方が、却つて凌ぎよく涼しいので、私は例の船から持つて來た水夫用のシャツを着てゐたわけである。

同様に帽子も入用で、もし無帽で外出しようものなら、すぐ頭痛がするほどの酷暑なのであつた。

ともあれ、私は被服のことを心配しなければならぬ。そこで、私は、兼ねて鐵砲で打つた獸類の皮を取り出した。それを日に乾かして、まづ大きな帽子を作つた。毛の方を外に出すと、よく雨をはじいてくれる。

それに氣を得て、いよく私は着物の方に着手した。チョッキと股引とを、一かきね作つてみたのだが、勿論、寒さを凌ぐといふよりは、暑さを凌ぐのが目的だから、兩方ともだぶくに作つて、シャツは膝まで垂れるやうにした。

尤も、大工としても拙い私、裁縫師としては、なほわるい。甚だ不器用な手際ではあつた。

「だが、これで結構役に立つから妙なものさ、このチョッキを着、帽子を被つてさへ出れば、どんな雨でもはじいてしまふ。さあ、次は、蝙蝠傘を作るのだぞー」

神と語りて

前にも言つたやうに、島の氣候は、晴天期と雨期とに分れてゐる。

晴天期は、たまらなく暑い。その暑さを防ぐにも、雨期に外出するにも、必要なのは、蝙蝠傘だ。

「どうぞして一本拵へたいものだぞー」

それから私は、長い間かゝつて、さんくくに苦心して、二三本作つてみたが、なかく思ふやうな形のものが出来ないのであつた。

「蝙蝠傘一本でも、自分で作るとなると、かうも手がかゝるものかなあ。」

作つては壊し、壊しては作りしたが、一番むづかしかつたのは開け閉ぢの出来ないことで、「今度こそ成功したぞ」と思つたものが、つぼめることが出来ないで、開きばなしのまま、出歩かなければならないのには、閉口した。

しかし、たうとう素張しい蝙蝠傘を作り出した。例の獣の毛皮を外に張つた傘で、雨が降れば、庇のやうによく雨滴をはじき、どんな暑い日にも、これを差して外出すれば、傘のない日の最も涼しい日より涼しいといふ素張しい効果。おまけに、不要になれば、ぼちつと閉ぢて、腋の下に挟んで、どこへでも持つて運べるといふ重寶さ。

「ありがたい、ありがたい、これも皆な神のお計らひだ」

事ごとに楽しく、私はまつたく平穩にくらした、時には、人と話をするこの出来ないのを遺憾に思ふが、さういふ時は、われとわが思想を語り、また、話のしたい時は、神とさへ語るやうな氣持になつてゐた。

「俺は愉快だ、なまなか社會に交はるより楽しい。いな、人間社會の樂みよりも、俺はずつと愉快を味つてゐるのだ」

手製のボートで

それから五年たつた。

五年間は、別に事件もなく、私は同じ場所、同じやうな生活をくり返した。尤も、その間に、大麥と米と乾葡萄を作つて、一年分の食料は、常に貯へるやうにした。

も一つ、私は、この二年間、殆んどかゝりきりで、一艘のボートを作つた。

いつか、私が獨木舟を作つたことは、前に述べたとほりであるが、あの時、私のやり口はひどく無茶で無暴きはまるものだつた。計畫もなく豫定もつかず、獨木舟を作るには作つたが、海に浮べることが出来なかつたものだ。それに凝りて、今度は前以て、海からなるべく遠くないところにボートを起工し、その上、念を入れて、入江とボートとの間半マイルに、根氣よく堀割を掘つたものだ。

二年かゝつて、ボートはやつと出来上つた。實は、このボートで、向うの對岸まで漕ぎつけようと、いふのだつた。しかし、向うの陸地までは、四十マイルもあつて、四十マイルを漕ぎぬけるには、ボ

ートではあまりに小さすぎる。

「やつぱし駄目だった、けれど、折角作った船だ、いつそこのボートで、濱づたひに周囲を探検してやらう」

島の一部は、前に歩いたことがあるが、このボートを利用すれば、島全部が廻れるし、新しい発見もあらうと思ひ立つたのであつた。

今度は用意周到綿密な計畫を立てた。まづ、小さな帆を立て、帆柱を拵へて試乗してみると、なかなか工合がよい。

それに氣を得て、ボートの兩端に小さな室めいたものを作つて、そこに食料や、道具や、彈藥などを入れておくと、雨もかゝらぬし、海水の飛沫にも濡れないので、ますます工合がよい。鐵砲は大事なので、別にボートの中に置場を作り、上を布で被つて、濕氣を防ぐ仕掛にした。

船尾の方には、例の蝙蝠傘を立て、頭の上にさしかけると、熱い日を遮つて、甚だ工合がよい。準備が一切整つたので、折り／＼海に浮んでみる。無論、入江を離れて、沖へは出ない。近いところをびく／＼もので、ちよい／＼小旅行をしてゐたが、いつかは私のこの小帝國を視察してやらう」といふ私の熱心は、打ち消さるべくもない。

「行かう！」

たうとう、私は準備を整へて、島めぐりを試みることに決めた。

準備品――

麥のペンニダス。いり米一壺、ラム酒の小瓶。山羊の肉半匹分。彈藥。

その他、大きな水夫服二着で、うち一着は座蒲團に、一枚は夜具にすることにした。

潮に渦卷かれて

十一月六日

私がこの島を占領してから――いや、この島に捉はれてから六年目の十一月六日。いよく私は、島めぐりの冒険航海に出た。もとよりさまで大きな島ではない。東海岸に沿うてボートを走らせてゆくと、やがて、見るかぎり岩礁の横はる箇所へ出た。おまけに、岩礁の先は、一帯の淺洲で、ボートを廻すことが出来ない。と言つて、この岩礁を廻つて沖へ出たならば、二度と、島へ歸ることは出来ない。

詮方つきて、私は、そこに錨を下した。

錨を下すや、私は銃を執つて、陸へ上つた。

「まづ形勢を見よう」として、小山へよぢのぼつた。そして、先づ冒険しようと思つた。

「見渡す海面には、世に恐ろしい潮流が東に向つて走り、もしそこへ嵌り込んだが最後、私は沖へ掠はれて行つて、二度と島へ歸ることの出来ないのを知つた。」

「危なかつた！ あゝ、危なかつた！」
私は、ぞつとして叫んだのであつた。

見ると、島の向う側にも、同じやうな潮流が、見る眼も眩むばかり恐ろしい勢ひで、濱に渦まいてゐる。もし私が、ぐづくしてゐたら、きつとこの物凄い渦の中に巻き込まれてしまつたであらう。

「危なかつた！ あゝ、危なかつた！」
私は、ほつと胸撫でおろして、そこに二日をすごしたのであつた。

三日目になると、風も凧いで來たので、
「もうそろ／＼よからう」と、船を出した。

ところが驚いたことに、ボートが岸を離れるか離れないのに、海は崖のやうに深く、しかも潮流の急なことは、水車の水門を一時に開いたやうだ。

「しまつた！ 危ない！」
私は、あわて、潮流の渦巻から逃げ出さうとしたが、こんなボートごときで乗つ切れ、ばこそ、見

る見る外へ／＼と押し流された。それも渦の中心へ巻き込まれずには沖へ／＼と押し流されてゆく。

「仕方ない、もう駄目だ」
さすがの私も、今は観念してしまつた。

「まゝよ、四五里も行つたら、島の兩側の潮流は、きつと一緒になるだらう、さうすれば、所詮助からない命だ、仕方がない！」

生きて歸れない今になつて、私はもう一度、島を振り返つて見た。人も住まないその荒れた島が、ああ、今の私には、どんなに歡しい樂園に見えたことだらう！

あまりの懐かしさに、思はず私は、兩手をさしのべた。
「おゝ懐かしの無人島よ！ 俺はもうお前とお別れだ……隣れな俺は、どこまで押し流されてゆくことか」

のびあがり、手をさしのべて、私は聲のかぎり叫ぶのであつた。さしも寂しい無人島が、今の私にはどんなにどんなに懐かしく歡しいものに思へたことであらう。

ほんとに、今になつて、私は島の生活の歡しいこと、ありがたいことが、身にしみ／＼思ひ返されるのであつた。別れゆく今、島の生活のほんたうの値打が解るのであつた。

「人の不幸には果しがない」さうも感じられるのであつた。

消えゆくやうな寂しさ、心細さ。船は私一人を乗せて流されてゆく。果しも知らぬ大洋へ！

怪しの呼聲

もう絶望ときまつても、私の性質として、なほ舟だけは漕いだ。あらんかぎりの力を出して、漕ぎに漕いだ。

晝頃まで漕いだ。晝頃ふと気がつくとき、かすかなそよ風が、そよくと私の頬をなせる。「や、風だな」

私は、急に元氣づいた。たしかに風が出て、南々東の方から吹いて来るのであつた。

おまけに、半時間もたつと、その風は、かなりな追手風となつて来た。尤も、その時、私は島からは恐ろしいほど離れてゐたので、もしすこしでも曇が出るか、霧でもかゝつたが最後、羅針盤を持たない哀しさは、もう永久に島の影を見失ふところだつたのである。

それが幸にも、この日一天雲もなく、島はなほ向うに見えてゐたので、私は手早く帆柱を立て直し、帆を張つて、遮二無二潮の外へ出ようとして、北へくと船を進めた。

船は走る。見ると、水はだんく澄んで来る。それと共に、潮流もゆるんで来る。向うの岩礁を境

目に、潮流は二つに分れて、本流は激烈な勢ひで、南へ流れ、一つは岩礁に當つて跳ね返り、渦巻を巻きながら、北西方へと奔流してゐるのであつた。

「しめた！ 俺は助かつたぞ！」私は躍り跳ねんばかりに喜んだ。「この渦を巻く潮に乗れば、助かるんだ！」

あゝこの時の喜び！ それは死刑を執行されようとして不意に許された人か、もしくは強盗の兇刃から逸れたといふやうな人でなければ、この時の私の喜びを想像することは出来ない。

それほど、私は狂喜して、船を走らせた。潮流に乗つて、走つて行く愉快さ。船足は疾く、飛沫亂れて、涼しく、満帆風を孕んで走り、まつしぐらに島へ歸ることが出来た。

陸へ駆けあがるなり、私はくづ折れるやうに、跪づいて、神に謝した。

「お、助かつた！ 救はれた。これも偏に主のおかげだ！」

で、これから一直線に家路を急ぎ、途中、適当な入江を發見したので、それを小船渠ともみなしてポイントをつなぎ、例の蝙蝠傘と鐵砲を携へて、懐しのわが家——田舎の別荘の方へ歸つて来た。

時に日は暮方であつたが、助かつて来た身には、踏む陸の土も嬉しく、疲れた身をいそくと塀際にたどりつき、塀を越えて、内へ入つた。

同時に、ごろりと身を投げ出して、前後も知らず熟睡した。

と、怪しや、眠つてゐる私の耳許で、

「ロビン！ ロビン！」

聲高く呼びかけたものがある。

鸚鵡を抱いて

「ロビン！ ロビン！ ロビン・クルウソオ！」

怪しい聲がさう呼びかけても、私は夢現の境にあつた。あの大冒険と、それから歸り路の疲勞で、私はまつたく死人のやうに寝倒れてゐたのだ。耳根の聲も、夢の中できいた。

怪しい聲は、しきりにつゞく。

「憐れなロビン・クルウソオ！ お前はどこにある？ どこにある？ お、ロビン・クルウソオ！」
がばと、私は跳ね起きた。びつくりして飛びあがらんばかり、身を起してあたりを見廻した。
が、姿は見えず、聲ばかりけたましく、

「ロビン・クルウソオ！ お前は今までどこにゐたか？」
私は、ぞうつとして、全身の毛が逆立つやうに感じた。

轟く胸を静めて、

「何者？」と、怖々外をのぞくと共に、

「なあんだ、鸚鵡だつたか」と、思はずがつかりしたやうに叫んだのであつた。

可憐な私の鸚鵡——ポルは、主人の身を案じるやうに、もしくは出迎へでもしたやうに、私の姿を見ると、さも親しきやうに、私の教へ込んだ言葉をそのまま、

「憐れなロビン！ お前は今までどこにゐた？」など、巧みにしやべつてゐたのであつた。

「ポル、お前も嬉しいか。俺は無事に歸つて來たよ！」

咄嗟に、私は涙ぐましくなつた。手をさしのばした。

すると、ポルも、懐しきやうに飛んできて、いつものとほり私の親指に止まる。顔に近々と嘴をすり寄せて、

「憐れなロビン・クルウソオ、お前は今までどこにゐた」を、繰り返しく、さけびつゞけるのであつた。

お、その嬉しさうな様子、私も涙の出るほど嬉しかった。

「うい奴ぢや、忠實な奴ぢや！」私は、抱へるやうにして、その人なつこい小鳥を、家に連れてはひつた。

パイプを作る

それから一年間は、無事にすぎた。

「せつかく作つたボートだけれど、かうなつては仕方ない、棄て、しまはさ」

あれだけ努力して出来あがつたボートを、みすく見棄て、しまふのは、情けなくもあつた。

と言つて、あの潮流のために流された時の危険を思ひ出すと、考へるだけで身内がぞうつとして、二度とボートに乗る氣はしない。

「あれだけ苦心して、あれだけ年間をかけて造つたボートだけれど、仕方がない思ひきらう」

惜しいけれど、たうとう私は、ボートを見棄てた。

その後、一年ばかりは、私の隠遁生活には、何の事件もなかつた。總じて、私は面白く満足して、その日を送つた。たゞ世間との社交がないといふだけで。

さういふ間も、私は、手工がだんくうまくなつて来た。

「ほ、う、俺もこれでよい大工さんになるぞ」

なけなしの道具で働きながら、私は、得意にもなつてゐた。

私は、陶器を作つた。

また、煙草のパイプを作つた。

パイプが成功して、それでふかく煙草をふかした時は、私はほんとに愉快だつた。

私は、また澤山のバスケットを作つた。これは山羊や、龜の肉を入れたり、穀物の入れ物として、重寶なものだつた。

牧場経営

けれど、困つたことには、火薬が盡きかけて来たことだ。これは私には重大問題で、

「もし火薬がなくなつたら、どうしよう？ 俺は鐵砲を打つことが出来ない。食料を得ることが出来ない」

いろいろ頭をなやました擧句、ふと考へついたのは、鐵砲を使はないで、山羊を捕ることだつた。

「うん、それには毘がよい。一つ仕掛けてみよう」

私は早速、毘をかけて、孕んである牝山羊を生捕らうとした。

ところが、幾度やつてもうまくゆかない。その筈だ、私は針金を持つてゐないために、毘一つ完全

に作れないのだ。獲物は、餌を食つて、逃げてしまふ。

「よし、今度は俺も考へがあるぞ」

私は、工夫をめぐらして、今度は陥し穴をこしらへることにした。

まづ、山羊の出さうなところを見計らつて、大きな穴を掘り、上を手製の簀子で被つて、餌の穀物をまいておいた。そして翌朝、行つてみると、果して、一つの穴には、大きな牡山羊が一匹かゝつてゐた。

同じ仕掛けで、私は、一夜に都合三匹の小山羊を生捕つたのである。が、親の方は、あまりひどく暴れるので、手がつけられない。小山羊の方だけやつと捕へて、一緒に紐で珠数つなぎにして、家に引張つて来た。

「さあ、これから牧場を始めるのだ。山羊の肉さへあれば、鐵砲を使はずともすむ」

牧場！ 一人の人間、二つの手で、こんな大仕事を仕遂げようといふのは、大變なことである。と言つて、これは絶対に必要な事業なのだ。

牧草があり、水があり、日をよける草のあるところ——私は、まづ牧場になる土地をさがさなければならなかつた。

で、幸ひに場所は見つかつたが、今度は、周圍に柵をめぐらすのが大變で、私は、二マイルの柵を

めぐらすのに、三月もかゝつたのである。

可愛いもので、その頃はもう三匹の子山羊は、すっかり私になつて、掌に穀物をのせてやれば、それを喜んで喰べもする。柵の中へ入れてやつてからは、私のあとを追つて来て、餌をせがむほど慣れて来た。

牧場が出来上つてから一年半で、山羊の数は十二頭に殖え、それから二年たつと、四十三頭になつた。島に来てから約十五年、私は初めて安全に食物を得る自信を得たのである。

だが、そればかりでない。山羊の肉を食用にしてゐる中に、私は山羊の乳を取ることを思ひついたのである。

「まづたく、神様の恵みは、どこまで廣大だか解らない。最初は、飢死する他ないと思つたこの島で、肉ばかりか、乳にまでありつけやうとは、何といふ仕合せか！」

山羊の乳を搾るにも、苦心はあつたが、とにかく私は、日に一升や二升の乳を得ることもあるやうな身分になつたのである。

重ねて、恵みふかき神よ、神は、こんなどん底にある私どもにも、かうまであたゝかい救ひの手をさしのべたまふか。丁度囚人が獄屋から日を仰ぐやうに、私はあらためて、つくづく神に謝したのである。

帝王のやうに

意外な食卓が、この荒地にひろげられてある。食卓には、バタもあり、チイズもある。皆な山羊の乳から作ったものだ。

もし人があつて、私および私の小さな家族どもが、ずらりと卓に就いてある有様を見たら、ぶつと噴き出さずにはゐられないだらう。

まづ、上座には、全島の帝たり王たる我輩が、控へてゐる。この帝王たるや、臣下に對しては、絶對的の支配權をもつてゐる。彼等を絞罪に處するも、放つも、命を與へ、自由を與へるも、また壓制を加へるも、一に余が權限であつて、凡ての臣下、決して余に向つて、叛逆を企てるものでない。

實際、私が臣下を集めて、會食する時は、帝王さながらの大權力である。鸚鵡ボルは、私の寵臣だから、ボルばかりは、私と言葉を交ゆることを許される。老臣ながら犬の方はもうすつかり老ぼれた姿で、王座の右側にと侍つてゐる。二匹の猫は、食卓の彼方と此方とに分れて坐まり、折り／＼私が特別に與へる肉片を待つてゐる。

尤も、この二匹の猫は、昔、私が船から連れて來たあれではない。あの猫は、數年前既に死んで了

つたので、私は、家の近くに葬つてやつた。今のは、その仔であるが、親の牡の方はどんな動物なのか、全く解らない。とにかく、船から連れて來たあの牝は、澤山の子を引連れて來たので、私は、その中の二匹だけを手許におき、他は皆な追ひ拂つたのである。それが、今のこの二匹なのである。

「どうだ、我輩の家來の賑やかなことは！ いや、賑やかすぎるほど、多勢ぢやない！」

私は得意になつて、食卓を眺めわたすのであつた。

今は、人間社會と交はらなくとも、不満に感じるやうなことはなくなつた。もうこの上、冒険に出ようなどとの考へも出なかつた。

珍無類の旅姿

たゞ一つ、心にかゝるのは、入江に棄て、おいたあのボートのことだつた。

「いや、ボートはもう懲々だ……が、ボートはよいとして、もう一度、あそこへ行つて、あの小丘にのぼつて、潮の流れ工合だけは見て來たいものだな」

そんなことで、またぞろ私は旅支度をとゝのへて、家を出發した。

私の旅姿！ それが、まったく珍無類の奇怪な風體だつた。

「は、は、この姿でイギリスを旅行したら、人はなんと批評するだらう、大笑ひに笑はれるか、吃驚して逃げ出すにはあられまい」

私は、自分ながら、あまりに變つた姿なので、獨り噴き出した。そして、我とわが姿を、つくづく感心して、見廻すのであつた。

まづ頭に戴くのは、山羊の皮製の大きな高い不恰好の帽子である。帽子の後には、縁がふらくぶら下つてゐて、熱い日を遮り、頸から入らうとする雨をはじくといふ仕掛けなのだが、この島では、着物にしみとほる雨は、健康にわるいのだ。

身に着けたのは、同じ山羊製の短かいジャケットで、腿の中程までぶら下つてゐる。その下には、同じく老いたる牡の山羊皮で作つたズボンをはいてゐるが、そのズボンたるや、だぶくしてゐて、おまけに毛が長く垂れ、道化役者の長ズボンのやうに、脛の中部まで垂れてゐる。

靴や靴足袋はないから、その代りとして、私は古ギリシヤの役者のはくやうな半長靴に似たものを脛の上でしめ合せてある。身につけたどれもこれも蠻的でないものはないが、中で一番振つてゐるのはこの半長靴なのだ。

その上に、山羊の皮の廣帯をしめ、劔の代りに小鋸と斧とを左右にさげ、肩には同じく細帯をかけて、その端には二つの袋を結びつけてある。その一つには火薬を入れ、一方には彈丸が入つてゐる。

まだある、背中にはバスケットを背負つてゐる。肩には鐵砲をかついでゐる。さらに、頭上高くかざしたのは、例の不恰好な大きな、山羊の皮製の蝙蝠傘なのだ！

この傘、形こそなつてゐないが、私にとっては、鐵砲についての必要物なのだ。

そして、これこそ實に、全島の王たる余のいでたちなのである。滑稽でもあらうが、私にとっては皆な血の汗を流した手製の世にも貴重な衣類なのだ。

さて、島帝王の顔はと言へば、さう黒くもならなかつた。實は赤道を距ること五度乃至十度の熱帯にあるのだから、きつと白黒の合の子ぐらゐにはなつてゐるだらうと思はれるのだけれど、仕合せとさう黒奴にもならなかつた。

髻はと言へば、以前七寸ぐらゐに延びたこともあつたが、幸ひ鋏と剃刀を持ち合せてゐたので、短かく刈り込んでしまひ、鼻下ばかりを残しておいた。鼻の下にびんと生じた髻の恰好はちよつと乙なものだつた。

私は、そんな扮装で、今度の新旅行に旅立つた。

岸傳ひに行くく、例のボートを碇泊させてある箇所へ着いて、小山にのぼつて見ると、

「おや」と、私は、驚きの聲をあげた。

あれほど烈しかつた潮流が、もうそこにない。凄くあの潮の流れが、影も形も見えないで、海は一

面青い滑らかな鏡のやう。

「もしや、場所ちがひではなからうか」と、疑はれるばかりであつた。

「だが、これも潮流の作用かも知れない」

私は、小山の上に立ちつくした。見てみると、果して、引いてゐた潮は、西の方から満ちくく来て、陸から来る大河の流れと合流し、こゝに一大激奔をなして、吹く風はますますこれを煽り、海面俄然として、急變を來すのであつた。

「すると、干潮の時來れば、ボートも持つて歸れるんだな……けど、それは危険だ！」

私はいろいろ考へた。最後に、あのボートは棄て、いつそもう一艘獨木舟を起工して、島の兩側に一艘づゝ分けておかうといふ結論に達したのであつた。

平和にして愉快そのもの

島における私の植民地は、二箇所に分れてゐる。

一つは、例の巖窟で、小さな城内とも言ふべきもの、廻りには堀をめぐらし内にはテントを張り、堀はだん／＼掘りひろげて来て、五つ六の室をもつてゐる。その中、一番廣い住心地のよい室に、陶

器や穀類を貯へてある。

堀として植ゑた生垣は、長年の間にすつかり育ち、こんもりと茂つて、その樹陰に人の住家があらうなぞとは、思はれない。

樹陰には、また二箇所の畑がある。私が、年毎に規則正しく耕し、蒔けば、季節には、正しい收穫がある。種をふやせば、その收穫も比例して、ふえて来る。

も一つの私の住居——田舎の別荘の方も、すつかり屋敷になつて来た。これも生垣が繁茂して、屋敷を被ひ、住むに涼しく、氣持がよい。生垣の内側には、例の梯子がいつもちやんと立懸けてある。

林の真中には、テントが張つてある。これは帆布で作つたものだ。内には、獸の皮で作つた蒲團があり、毛布があつて、主人を待つてゐる。

で、本宅にあきると、私は、その別荘の方へ休みにやつて來るのであつた。骨折つた甲斐あつて、山羊私が苦心に苦心をかさねて經營した牧場は、この別荘の近くにあつた。

も逃げ出すやうなことはない。かうして馴れた家畜は手近にあるし、新鮮な肉や、ミルクや、バター、チイズも豊富で、私は喰べるに不自由はしない。

おまけに、こゝには葡萄がある。採つて乾しておけば、冬の常食物になる。

「乾葡萄は素敵だな」

私は、好んでそれを喰べた。實際、うまくもあつたが、體の保健にもよかつた。本宅を出て、ポートを見にゆく途中、私は、いつもこゝへ立ちよつて、休むのを例とした。慈みぶかい神様は、決して人を殺すやうなことはない。私の生活は、平和で満足で、愉快そのものだつた。

ところが、突如としてこゝに私の身に大變動が起つた……。

あ！ 人間の足跡

驚くべき變動が、突如として、私の身に起つた！

その日、晝頃であつたが、私はボートの方へ行かうとして、何気なく濱の砂上にさしかゝると、ふつと私は立ち止つた。

「おや、人間の足跡ぢやないかな？」

私は、吸ひよせられるやうに、眼をつけた。と、同時に、

「あ、人間の足跡！」

私は、ぎよつとして立ちすくんだ。砂の上には、ありくと五指を具へた人間の裸の足跡が一つ、

はつきりと捺されてゐるではないか！

雷に打たれた人のやう、幻を見た人のやう、私は、砂上に突つ立つた。

耳をそばだて、眼を光らせて、じろくあたりを見廻した。が、何も聞えない、眼に見えない。

さながら憑かれた人のやうになつて、私は、小高いところに駆けあがつた。そして、四方を見廻した。別に人影はない。

と、今度は狂人のやうになつて、濱へ取つて返し、再びかの足跡を調べてみたが、足跡の他には、

何の異状もない。

「可怪しいな、氣の迷ひしから……」

自分の眼を疑りながら、見れば見るほど、まぎれもない人間の足跡なのである。

指もある！

踵もある！

まつたく、疑ふ餘地のない人間の足跡！

それが一つ、砂の上へ、あざやかに印されてある。

と思ふと同時に、私の胸の鼓動は、轟くやうに鳴つた。

「この足跡はどこから來た？ どうして出來た？」

だが、私には何が何だか、さつぱり解らないのであつた。あまりの恐ろしさに轉倒して、夢中で、家路をさして駆け出した。

木の葉のそよ音、草の風に動くのにも、びつくりして飛び上らんばかり、しまひには二歩走つては振り返り、三步目にも後を見返り、後には自分の歩む聲音までも、誰か追ひかけて来るやうな心地がして、ぞつとするのであつた。

それほど、私は、物恐ろしい想像に脅かされた。眼に見えるものすべてが、恐ろしい形となつて、私を驚かした。

家が見えるや否や、私は、何物かに追はれる人のやうに、一散に駆け込んだ。

樂園の夢破る

あとになつて考へてみても、その時の私は、まったく夢中だつたらしい。梯子を上つて飛び込んだのか、向うの岩の戸口から入つたものか、まったく解らない。

「穴に逃れる兎、土にかくれる狐だつて、こんなに恐れはしないだらう」さう呟いたほど、私の心の恐れは激しかった。

その夜、私は眠るどころではなかつた。もう恐ろしいものからは逃げて来たのであるが、遠ざかれは遠ざかるほど、私はまだ何物かに脅かされるやうな気がして、心は不安でならなかつた。不安は不安を生んで、心は、形のない影を描いて、恐れはますます募るばかりであつた。

と言つて、私の眼で見たのは、たかゞ人間の足跡一つだけなのであるが、恐れの原因が曖昧であればあるほど、私の想像はそれからそれへとひろがつて行つて、われとわが影を恐れる人のやうに、根づよい恐怖に苛まれたのであつた。

「事によると、あれはきつと悪魔の仕業だ」ある時は、そんなふうにも考へた。「さうだ、悪魔でなくて、どうして人間の形でこの島へ渡つて來ることが出來やう。船が見えない以上、やつぱし悪魔が渡つて來たんだ」

とは言へ、それはやはり一時の無稽な氣まぐれな妄想で、あの足跡が残つてある以上は、「やはり生きた動物の仕業にちがひない」といふ結論に達して來たのであつた。

「もし生き物の所業だとすれば、それは危険きはまる動物の足跡だ……とすると、對岸の本土の蠻人が、獨木舟で海へ押し出した折、潮流に流されたか、逆風に吹かれて、この島へやつて來たんだ。そして、上陸はしたものの、このとほり荒地なので、すぐ歸つて行つたに相違ない」さう推察をすゝめるあとから、

「でも、よく俺を見つけれなかつたものだ。俺といふ人間でなくても、あのボートを見つけれられたが最後、俺は、どんな目にあつたか知れない」

さう思ふと、私は、全身冷水でもかけられたやうに、ぞうつとした。

「あ、さうだ、もしかすると、蠻人はあのボートを見つけたのだ。さうしてこの島に人があることを、仲間知らせに歸つたのだ……とすれば、彼等は、折返し大舉して押し寄せて来る！そして、俺を食つてしまふ！」

私は、眼先がぐらくと動くやうに感じた。

たとひ、彼等が私を見つけないまでも、畑や牧場を見たら、そのまゝにはしておかない。すくなくとも穀物を荒らすにきまつてゐる。飼ひ馴れた家畜を持つてゆくに相違ない。さうなると、私は、食ひ殺されないまでも、飢死するより他はない……。

「どの道、俺は助からない」

激しい恐れは、私の身を突き動かし、慄はせ、一時、神に對する信仰も消えてしまつた。

「かうと知つたら、穀物もせめて二三年分を貯へておくのだつて……それもお前が怠けたからだ」
さう自分を責めても、今となつてはおよばない。あれだけ辛い勞作をしても、なほ私は、自分の到らなかつたことを責め悔むるのであつた。

神よ、私と共に

「お、人生といふものは、神の戯らに作つた細工物のやうなものだ。人が、變事の起るたびに、氣持の變る相の、何といふ微妙なことぞ！」

まことに、人は今日好むところのものを明日きらひ、明日恐るゝところのものを、さうとは知らずに、今日望んで止まないものである。その實證は、今まざゝと私の一身にある。

初め、私がこの島に漂着した時は、人間社會からはまつたく切り放たれて、交はる人とは無い獨りぼつち。涯知らぬ大洋に閉された牢獄に、心細くも寂しい哀しいその日々を送つた。まつたく沈黙の人生を送つた。

あゝ、その時、私は、どんなにか人間社會を戀しがつたことであらう。もし、こゝにわが同じ人間のとつた一人でも居てくれて、それと交はることが出来たならば、それこそ私は、死から生へ蘇へるやうな喜びを感じた筈なのである。

ところが、今はどうであらう？ あの砂地に残された唯一つの足跡を見ただけで、私はこれほどに恐れをのゝき、穴あらば地下へでも逃れ去らうとしてゐるのである。

「それも、私は、人間の影のやうな足跡を恐れてゐるのだ、形のない影の妄想に苦しめられてゐるのだ。この上、もし、實際の人間が來たら、どうしよう？ どうして、この命を全うしよう？ あゝ、これまで、これほど苦しんで衛つて來た命を……」

私は、人間生活、人間心理の不思議な動きを、またまざ／＼と心に浮べるのであつた。さうして哀しい感慨にふけたあとから、神に對する望みが、胸の底に湧いて來た。

「だが、省みれば、それもこれも神の意志だ。神が私の意志を絶たうとし思召すなら、それも致し方がない。神が私の過去の罪をお罰しになるなら、私は甘んじてそれに従ふ他はない。私としては、何事も神の意志として、運命に服従するばかりだ」

日として、週として、月として、私は、神の思召しを計り考へないことはなかつた。明けても、暮れても、神の心は、私の胸を往來した。

ある朝は、寢床に横たはつて、恐ろしい蠻人の出現を豫想し、身の置き處のないまで、不安に驅り立てられた。

その時だつた。ふと聖書を手に取ると、

「爾、惱める日には我を呼べ、我、爾を救はん」とある。

忽ち私の心はからりと明るく晴れた。身を寢床から起して、跪づいて祈つた。

「神よ、來つて我れを救へ！」

神は、最早や私と共にある。私の心は、初めて休まつた。

最早や、私は、哀しまなかつた。

足跡探險

「あの足跡は、事によると俺自身の足跡ではなからうか」

ある日は、ふつとそんな考が、湧いて來た。

「さう言へば、ボートを見に行つた歸りに、自分が残した足跡かも知れない。あゝして度々行く中には、俺だつて、どこへどう足跡を残さないものでもない。とすると、今までのことは、皆な俺自身の心の影にすぎなかつたのだな、妄想にすぎなかつたんだな……なんて馬鹿らしいことだらう！」

私は、小々可笑しくもなつた。その上、この三日三晩といふもの、籠城してゐたので、大麥の菓子も、水も缺乏して來た。山羊の乳もしほらなければならぬ。かた／＼、思ひきつて、外へ出た。

出るには出たが、びく／＼ものである。「いざ」と言はゞ、背に負つたバスケットを放り出して、命から／＼逃げ出さうと身構へてゐる。

あとを振り返つたり、きよろしく邊りを見廻したり、その落着かない有様といつたら、まるで憑物がしてゐるやうだ。かういふ絶えまない不安に惱まされるといふのも、一に島に人間のけはひが射したからだ……。

「けれど、かう出歩いてても、別に變つたことのないのを見ると、あれはやはり俺自身の想像の産物だったのだな、俺は俺自身の心の影を見て恐れてゐるのだな」

山羊の乳をしぼりに別荘の方へ二三日行つたが、別に異状はなかつた。私は、だんく大膽になつて来た。

「だから、俺自身の足跡ではないかと思つたんだ。とにかく、もう一度見直して来よう」
怖い物見たさに、私は、わざ／＼砂地の方へ行つた。

砂の上には、依然として、足跡があざやかに残つてゐる。

私は、自分の足をあて、みた。

同時に、私は、

「あつ！」と叫んで、危ふく後へ倒れるところであつた。

足跡は、私の足とは似てもつかない、とても大きなものだつた！

「むう、やつぱし誰か人がゐるんだなあ、無人島だとばかり思ひ込んでゐたのに」

自分の他に人間がゐる！ 私は、咄嗟に電光に打たれた人のやう、瘡を煩ふ人のやうに、ぶる／＼と身をふるわせて、恐れをの、くのであつた。

「あ、この島へ人間が渡つて来た！ 人間がゐる！ いつ、俺を攻撃に来るか知れない」

極度の恐怖に、私はまた轉倒してしまつた。あとで考へれば、馬鹿々々しいことだつたが、その時の私は、まづ私の牧場を壊し、折覺馴れた家畜をも森へ放ち、テントを撤し、家をも取拂はうといふ無鐵砲な考へだつた。

「さうすれば、どんな敵が来ようとも、この島に私といふ人がゐるとは思ふまい。俺は俺の痕跡をこの島からすつかり拭ひ消してしまはなければならぬ」

危急の場合、私は、神のことなどは考へる餘裕もなかつた。實際、危険を豫想することは、現實に危険が来た時よりも、一層烈しく、強いもので、實に幾倍もの不安で、私を脅かしたものである。

心は千々に亂れ／＼して、その夜は、一睡もしなかつた。明方とろ／＼と眠つて、覺めて、頭がや、はつきりして来るに従つて、やつと考へが纏まつて来た。

「あ、楽しいと思つたこの島にも、遂に人間の影がさして来たか……大陸からも遠ざかつて、食物も豊富で、地上の樂園も同様だつたこの島も、まったく無人の孤島ではなかつた。あ、人が渡つて来る！」

見えざる敵

この島の住人となつてから十五年!

十五年目にして、今初めて、私は、人間の痕跡をこの島に認めたとのである。

「しかし、その人間はこの島に居着いてゐるのではない。どの點から推測しても、ほんの時々この島に上陸し、ほんの一夜ぐらゐ海岸に止まつて、風の都合を見、潮流を見計らつて、そこへ去つてしまふのだ……」

かう事の真相がはつきりして來ると、それに對する私の方針も定つて來た。

とにかく、どこか安全なところに隠れ家を定めなければならぬ。

さうなると、十二年前、岩窟を掘り擴げて戸口を作つたことが、後悔されて來た。ちやうど十二年前、そこへ二重に植ゑた樹木も、今では森のやうに生茂つてゐるので、そこへ更に第二の要塞を築かうと思ひ立つた。

私は材木や、古い針金や、石や土や、いろんな物を掻き集めて來て、出来るだけ嚴重な外壁を作つた。その壁に拳大の穴七つをあけて、七挺の小銃を据ゑつけ、二分間に七挺一齊射撃出来るやうに装

置した。

その工事を完成するまでに、およそ五六ヶ月もかゝつたが、それが成就するまでは、今にも敵が來はしないかと、気が氣ではなかつた。

「どうだ、まるで大砲を据ゑつけたやうなものだ。さあ敵よ、來い! いつでも來い!」

かう威張つてはみたが、まだ安心出来ないやうな氣がされて、更に塹の外へは、およそ二萬本ちかくの夥しい柳の樹を植ゑ込んだ。その樹の列と塹の間には、かなりの空地をあけておいて、萬一敵の來た場合は、その空地で發見出来るやうに仕掛けた。

爾後、二年。二年たつと、その植樹は、鬱然たる森林となつた。

更に五六年。五六年たつと、見るから物凄しい、恐ろしいやうな大森林となつて、いかな敵も寄せつけられないやうになつた。そして、外から見たのでは、森の奥に家があり、人があやうなぞとは、思はれない。

この防備は、前後を通じて、實に七八年の長い歲月を要したが、それも一に、私が「知らない人間の訪づれ」を恐れたからに他ならない。これだけ要心した上に、まだ私は要心を加へて、自分の家の出入口には、二つの梯子で出入ることにした。

萬一の場合、二つの梯子を取り外したが最後、いかな敵も、私の家へは闖入出来ないやうに設備を

した。

見えざる敵の影は、かうまで深刻に、強く根ぶかく、私を苦しめ、苦しめぬいたのである。

渚に散つた人間の骨

見えざる敵影に對して、私が防備を整へたのは、住居の方ばかりでなく食料の方にもまでおよんだ。私は、牧場を二つに作つて、たとひ一方の山羊を荒されても、豫備の牧場の山羊から肉や乳を十分得られるやうに用意した。人類、原始時代の生活は、かうでもあつたらうかと思はれるほど、私の生活は、不安定で、本能的の恐怖に満ちてゐた。私は、あらゆる工夫と智慧をしぼつて、自分の命を衛らうとした。

あまり要心に氣をとられてゐるため、肝心の足跡のことは、忘れがちにさへなつた。島の生活も面白くなくなつた。

神の觀念も、おろそかになつて來た。

「俺は、いつ殺されるかも知れない。いつ食はれるかも知れない」と思へば、ろくろく落着いて、祈る氣にもならなかつたのである。

「もう一箇所、牧場がないかな」

私は、島をめぐるめぐつて、ある日は、島の西側へ出た。これまで行つたことのない海岸へ出た。で、何心なく、海の彼方を見ると、遙か向うに一艘の小舟らしいものが眼についた。

「おや」

私の心は、鋭く騒いだ。ちいつと立ちつくして、眼先の霞むまで見つめて立つたが、果してそれが舟か何うか見きはめがつかない。

「かういふことなら、望遠鏡を持つて來ればよかつたに……」

呟きながら、私は海岸の方へ降りて行つたが、その時はもう舟らしいものは見えなかつた。……言ひ忘れたが、私は、例の船から品物を運んで來た時、水夫の荷物の中から、一二箇の望遠鏡を持つて來たのだ。

「あの望遠鏡を持つて來ないで惜しいことをした」私は、さう繰り返しながら、歩みをすゝめた。

その邊りは、まだ來たことのない島の西南端だけに、私は道に迷ひがちであつた。歩きながら、ふと足下を見た私は、不意に立ち止つた。

あたりには、骨らしいものが散つてゐる。

「？」

私はちつと見た、息をのんだ。思はず、

「あつ！」と叫んで、後退りした。

人間の骸骨だ！ 手の骨、足の骨、それがばらくになつて、渚に散つてゐるのだ。助の骨もある、髪の毛もある！

「あゝつ！」私は、ぞうとして、身の毛もよだつやうな恐怖に襲はれた。

言ばかりではない、邊りには焚火をした跡がある。また鬪鶏場のやうに地を圓く掘つてある。

蠻人等は、そこへ圓座を作つて、同類である人間を食つたのだ。食ひながら、酒宴をして、祝つたのだ。

何といふ残酷！ 何といふ兇暴！

私は慄へながら、たゞ呆れて、突立つて眺めるばかりであつた。

呪ふべき吸血鬼

私は、暫し呆れて、突立つてゐた。

身の危険も思ひ浮ばないほど、あまりに酷らしい眼前の風景に、胸を打たれた。

「これが話に聞く食人族といふもの、仕業か？ でも、同じ人間でありながら、よくもかうまで残酷無慈悲、鬼畜にも劣るあさましい所業が出来たものだ！ これでも人間だといふのか、獸ではないと言ふのか」

この世ながらの地獄のやうなおぞましい場面！ 餘りの酷さ、恐ろしさに、私は顔をそむけた。

と、俄かに鋭い恐怖が襲つて来た。

私は、一散に元来た道を引返し、家をさして走つて歸つた。

家近くに歸つた時、初めてほつとしたやうに立ち止つて、後を振り返つた。

熱い涙が眼に溢れて来た。それは、我と我が身の現在を省みて、改めて、神の恵みに熱い感謝をささげる涙であつた。

「あゝ、同じ人間と生れながら、よくも自分は蠻人族の中なぞに生れなかつたものだ、それも、ひとへにありがたい神の慈悲だつた！ それよりも、もし、自分があの時、島のこの邊りへ漂着したとしたら、どうであつたらう？ 自分はどうにあの渚の骨と化してゐたのだ。それを島の安全な側へ漂着させた神の思召こそ、特別の神意でなくて何であらう？」

家へ歸つてからも、私は、さう考へつゞけるのであつた。

ともあれ、あの砂の上の足跡も、今はすつかり解決が出来た。

「つまり、彼等蠻人は、島のあの邊りへ獨木舟で渡つて來るのだ。それも向うの本士で争鬪した折り勝つた方は、捕虜を連れて、あの渚へ來る、そして彼等特有のあの恐ろしい食人の風俗に従つて、捕虜を殺して食ふのだ」

かう想像してゆくと、私は、初めて、

「蠻人、さまで恐るゝに足らず」といふ強い氣持が湧いて來たのであつた。

と言ふ理由は、なるほど蠻人等は、この島へ來るには來るが、別に物を掠奪するのが目的ではない。勿論、彼等とて、島の森の方をもうろついたではあらうが、何の獲物もなかつた筈だ。従つて、此方が姿を見せさへしなければ、彼等から進んで私を殺しに來るやうなことはない。その證據には、私がこの島へ移り住んでから、もう十八年たつが、十八年の長い間、私はつひぞ人間の影をも見かけたことがない。

「とすると、これから先なほ十八年間、俺はこゝに隠れてゐられる筈だ。すくなくとも、食人種よりよい人種に出會ふまで、俺はちつと身を隠してゐよう」

考へるさへ情けなく、あさましく、吸血鬼ながらの彼等の生活。人間の血を啜り、人間の生肉を食ふ呪ふべき風習。それを想像すると、私の胸は重く沈んだ。

私は、何となく樂しまない氣持で、引籠りがちに、その後の二年を送つた。本宅と別荘、それから

森の扉のあたりを往來するだけで、出來るかぎり身を慎んで、隱遁生活をした。

「仕方ない、あのボートは棄て、もう一艘新たに作らう。なまなか、あのボートを持つて來ようとして、蠻人に出會したら、それこそ大變、身の破滅、俺は捕つて食はれてしまふ」

蠻人伐つべし

私の生活は、要心に要心を加へて、注意はますます鋭敏に細心になつた。身の廻りを、非常に氣をつけるやうになつた。

私は、鐵砲を打つことを恐れた。萬が一にも、彼等が上陸してゐる場合、銃聲を聞きつけられたら、それこそ萬事休す、と思つたからだ。かうなると、私の牧畜事業は、意外の大成功で、山羊さへあれば、鐵砲を打つ必要はすこしもなかつた。で、この後二年間、私はたつた一度も鐵砲を打つたことはなかつた。

しかし、外出する時は、鐵砲を離したことはない。昔、船から持つて來た三挺の拳銃はいつも身邊から離さないばかりか、外出する時には、山羊製の帶皮へ二挺づつさして出かけることにした。その上に、大太刀を一刀、鞆なしの拔身のまゝ、腰に下げてゐるのだから、その扮裝の異様で、物凄いこ

と、我ながら仰々しい。

一方かういふ蠻人騒ぎに、取紛れて、私の工夫發明事の方は、すっかりお留守になつてしまつた。實は、私はビールを醸造してみようといふ計畫もあつたのだが……もし、かういふ變事が起らなかつたならば、私の根づよい實行力は、きつと大麥からのビール醸造に成功してゐたかも知れない。

けれど、私の考へは、今や全然別方面へ走つてしまつた。晝となく、夜となく瘠せるやうな思ひをして、いかにもして、あの怪物どもを退治してくれようとはばかり考へた。あの酷い、血まみれの悪業を敢てする彼等、それを打滅ぼして、出来るならば、彼等に食はれやうとする哀れな犠牲をも併せ救つてやらういふ考へばかり、先に立つた。

その方法工夫の細部に就ては、とても書きつくせないほど、私は細かく、周到に、各種各様の案を練つたものだが、さりとて、さういふ計畫も、私がそれを實地に行はない以上、所詮工夫倒れになつてしまつた感がないでもない。

「たとへば、俺が鐵砲で撃つたところが、彼等とても、弓や矢で、俺を覗つて来る。結局、得物は五分と見て、此方は一人、向うは二三十人といふことになれば、分がわるいことになる」
私は、そんなふうに、計畫をすゝめたり、崩したり、また立てたりしたのであつた。
「いつそかうしようか……彼奴等が火を焚いたところへ穴を掘つて、火薬の五六ポンドも仕掛けてお

かうか、さうすれば、彼奴等が火を燃やすとたんに、火薬は一時に爆發する……蠻人どもは一時にとつと吹き飛ばされてしまふ、これこそ妙案だ！」
だが、しかし熟慮してみると、私の手許には火薬の貯へとても、さう大してない。假りに、火薬を全部使ひ果すつもりで掛つたところが、必ず爆發するものとは限らないし、よし爆發したところで、耳の廻りへ火が勿ねるくらゐなら、しないにまざる。
「妙案だが、これも撤回だ」

蠻人伐つべからず

次のは、一層きはどい計畫だつた。

まづ、私は三挺の鐵砲へ、二重に裝彈しておく。それを抱へて、どこぞ、屈竟な場所に身を伏せてゐる。

ひそかに窺ふと、敵は人肉を食ひながら酒宴の眞最中、

「折こそよけれ」と、三挺一度にどつと撃つて放てば、一弾ごとに、ぱたくと二三人が倒れる。不意のことゝて、蠻人どもは、あわて、騒ぐ。その機を外さず、拳銃三つと、大太刀を抜きかざし

て躍り入らば、何の二十人ぐらゐの蠻人どもは、一薙ぎに薙ぎ倒すに、難いことがあらう。

「これこそ最上の妙案だ、百發百中、必勝の作戰計畫だ」

考へるだけで、私の心は勇みに勇んだ。しかも、その空想は、強く私を樂しませて、それから幾週間の間、私は、夢の中でよく蠻人どもを薙ぎ倒した。

「いよいよさう極れば、俺はよく場所を研究しておかなければならない。なあに、身を隠す場所さへ見つければ、蠻人の二十人や三十人、たゞ一刀の下に切り棄て、くれるぞ！」

私は殺人的の氣分に満たされて、小山の中腹に、屈竟の場所をさがし出した。かうなつては、もう一か八だ。彼等を倒さなければ、こちらが危険だ、それよりも非義非道、人類の肉を喰むやうな彼等は、こちらから進んでも伐たなければならぬ。

山腹の隠れ場所には、身を隠すに足る穴があつて、樹も茂つてゐた。だから、穴に身をひそめて、樹間をすかせば、蠻人等の獨木舟も手に取るやうに見えるし、しかも、向うからは見つけれない。「そこで、彼奴等は、焚火の廻りに頭を突きあはせて、あの酷い所業にかゝる。その時、覗ひを定めて、鐵砲を打つて放てば、なんの三人や四人、たゞ一發に仕止めるに、何の造作があらう。よし、やらう！」

私は二挺の小銃と、常用の鳥銃を取り出した。小銃の方には散弾と、拳銃用の小彈四五個を籠め、

鳥銃の方にも、一番大きな彈丸を込め、その上、拳銃には、各四發の彈丸を込めた上に、なほ二發目三發目の彈丸をも用意するといふ仰山な準備で、いよいよ憎むべき食人種の征伐に向つた。

さあ、それからが大變だ。私は、毎朝家を出ては、三里も隔つた小山の頂上へ登る。そして、「敵や来る？」

と、見張るのだ。望遠鏡を眼にあて、遙か沖を眺めわたしては、

「蠻人の獨木舟よ、來い！」

と、待ちこがれるのだ。

が、蠻人等は、なかく姿をあらはさない。

二月たち三月たつ中には、私は眼も疲れるし、力ぬけがして、だんく飽きて來た。

人の氣持といふものは、をかしたものだ。最初の中こそ、一蠻人よ來い、なんの二三十人ぐらゐ一舉に仕止めてくれる」と、勇氣りんく、物凄じい元氣であつたが、さて、毎朝々々この面倒くさい務めに服して、海ばかり眺めくらしてゐる中には、だんく疲れて來た。敵が影も形も見せぬのに、拍子ぬけがして、がっかりして來た。

疲れると共に、氣持も落着いて來た。同時に、蠻人に對する私の見解も一轉化を來した。

「なるほど、物は考へやうだ、考へやうでは、蠻人必ずしも一圖に伐つべしとは、言へないかも知れ

ぬ。なぜなら、彼等が人肉を食ふのは、われ／＼が山羊の肉を食ふのと同様かも知れぬから。すくなくとも、彼等は、捕虜を殺すのに、われ／＼が牡牛を殺すのと同様に心得てゐるから。實際彼等は、別に悪いとも思はないで、平気で人肉を食つてゐるのだ。彼等はまったくそれを罪とも思はないのだ。……これは俺の考へが、すこし酷だつたわい」

食人種として、一圖に必ずしも責むべきでないといふ考へが、次第に強く私を支配して来た。一たしかに、俺は、責めるに酷でありすぎた。かういふわれ／＼が基督教徒にしたところで、戦時には、捕虜を虐殺することがある。武器を投げ出して降を乞ふ者に對してすら、虐殺を敢てすることがある」

その上に、よし彼等同士がどんなに獸的非人道的の虐殺をしあはうとも、それは、私の關係したことはではない。彼等は別に私に對して害を加へようとしてゐるのではなく、今の私は、まったく彼等の力の外にあつて、彼等は私の存在を知らないのだ。

「それを進んで此方から戦を挑まうとするのは、此方こそ、不正だと言はれても仕方があるまい。ようし、この上は俺の方からは挑戦はすまい、第一、十人二十人殺したところで、あとから／＼襲つて来る蠻人何千人といふものを片ツ端から殺しつくすわけには行かないし、それは却つて、此方の身の破滅を招くといふものだ。俺は、俺に害をなさない人間を無暗に虐殺するわけには行かぬ」

巖窟の怪

再び私は、幽棲生活に返つた。

その後一年間といふものは、決して小山の頂上に、敵を見に行かなかつた。つとめて、自分の身を隠すため、例の島の向う側においたボートをも、島の東端に持つて来て、険しい崖の下の入江につないだ。そこならば、決して蠻人がやつて来ないと見定めたからだ。ボートに附屬する錨や帆柱のやうなものも、残らず皆な運んで来た。

今の私の身には、食物のことよりも、もつと／＼大切なことがある。それは、手工などの工事の音で、身の危険を招かないやうにすることだつた。

私は、釘を打つことを憚つた。樹を伐ることを恐れた。「もしや、その物音から蠻人に感づかれはせぬか」と、氣づかつたからだ。

私は、鐵砲をうつことをひどく恐れた。殊に、心配だつたのは、火を焚くことで、

「もし、この烟が日中遠いところから見えて、見つけられたら、どうしよう」と思ふと、氣が氣でな

らなかつた。それで、壺を焼くとか、パイプを作るとか、火の入用な仕事になると、森の方の新しい洞穴の中に、移して働いた。

ところが、ふとしたことで、私は、理想的な素敵な新しい隠れ家を見つけ出したのである。

と言ふのは、今度の洞穴は、大きな岩の下にあつたが、ある日のこと、私は、そこでせつせと、樹の枝を切つてゐた。この樹の枝は、木炭を作らうといふので、木炭は、パンを焼くにも、肉を料理するにも、私にはなくてはならない大切なもので、私は本國にゐた時分見たやうに、まづ芝土の下で樹を焚き、それが木炭になると家へ持つて歸つて使ふと、決して煙は立たなかつたのである。

そんなことにも、私は細い心づかひをした。で、その日も、樹を伐つてゐると、下の枝の茂みの蔭に、何やら穴のやうなものを見つけた。

「可怪しいな、何だらう？」

枝葉を掻きのけて覗き込むと、大きな洞穴が、ほかりと眼の前にひらけた。

立つたまゝでも入れさうな大きな洞穴だ。私は、とにかく内へ入つた。

入るや否や、私は、

「きやつ！」

と、叫んで、外へ飛び出した。

一眼見た穴の内は、眞暗なのだが、その暗中に何者か、二つの星のやうにきら／＼と怪しく閃めいてゐるものがある。

「人か、悪魔か？」

私は、洞穴の口で、轟く胸を抑へながら、怖々呟いたのである。が、やつと心を取直して、

「なに、馬鹿な、たとひ悪魔にしろ、俺は二十年も、この孤島に孤りで住んでゐたのだ、俺より怖いものが、この洞穴にあるわけはない、なにこれしきのこと、恐れてどうする！」

私は、手早く松明をつけた。

それをかざして洞穴の内を覗くと、内の光るものはびか／＼と光りを受けて、一層物凄しい。

大洞窟發見

私は、足を踏みしめて、内へ進んだ。

と、怪しや、内では、人の苦しみ悶くやうな唸り聲が、きれ／＼に聞えて来る。まさしく意味ある人の言葉のやうで、それが絶えると、今度はふかい／＼溜息のやうな呻きが聞える。

「……………」私は、息をのんで、後へたぢろいだ。

ひどい恐怖と驚きとに、總身は冷汗にぐつしより濡れて、體中の毛は、ぞうつと一時に總毛立つた。この時もし私が帽子を被つてゐたなら、私の逆立つ頭髮で、帽子はぬけたかも知れない。

それほど、私は激しい恐怖に襲はれた。が、またしても全身の勇氣を振り起して、

「なに、これしきのことに」と、叫びながら、夢中で内へ突進して、松明を振りかざして見た。

見ると、何のことも、それは人ではなかつた。大きな老山羊が一匹、老病で死なうとして、苦しい最期の呻き聲を立てゝゐるのであつた。

「なあんのことだ」

私は、張合がぬけ、力ぬけがしながら、山羊の傍へ寄つてぶつてみたが、もう起きあがれないほど弱つてゐた。

「山羊め、ひどく驚かし居つたな」

私は、眼をあげて、洞内を見廻した。内は案外狭くて、十二フィートにすぎないが、まったく自然の洞穴で、すこしも人工を加へたあとはない。その上、まだ奥がある。

私は、四ん這になつて、奥へくと進み入つてみた。すると、驚いたことに、一旦狭い通路をすぎると、向うはからりと廣くなつて、屋根も高く、殆んど二十フィート近くもある。立派な天然の大洞窟だ！

その上に、洞壁と天井の美しいこと、こんな立派な大洞窟は、私がこの島に上陸して以來、初めて見るところだ。明りを受けた四面の岩壁には、ダイヤモンドか、黄金か、きらりと照り光りかゞや、く鑛物が交つて、眼も眩むばかり。

床は床で、小石を敷きつめてゐて、よく乾いてゐる。毒蟲などは、決してゐない。絶好無二の樂園であり、安全な隠れ家だ。

「たゞ一つ、入口の狭いのが缺點と言へば缺點だが、それも蠻人から隠れるには、誂へむき。もう蠻人の襲來も怖くない」

翌日から、私は、手筈をきめて、こゝへ身廻りの大事なものを運び入れることにした。

鳥銃三挺の中二挺、小銃八挺の中三挺、火薬、彈丸を作る時の用意の鉛、さういふものは、すつかり新発見の洞窟へ運び入れて、のこりの武器や、火薬は、例の砦と稱する家の方の防備用にのこしておいた。

これまでの私のしたこと、計畫したこと、つまり私の生活といふものは、太古の人間そのままにも似てゐたと言へやう。ところが今は、私そのものが、太古の人間さながらの姿とはなつた。

「話にきく大昔、人跡未踏の大巖窟に住む巨人の姿は、かうでもあつたらうか。この上は、蠻人の五百や千押し寄せて來やうとも、俺の姿を発見することは出來ない。たとひ発見したところが、この

俺に攻めかゝつて来ることは出来ない」

私は、初めて安心の胸を撫で下した。

病山羊の死骸は、死ぬとすぐ、大きな穴を掘つて葬つてやつた。

鸚鵡と犬に慰められて

早いものだ、私がこの島へ漂着してから、もう二十三年たつ！

二十三年の長い〜歲月の間には、私もすっかり地土風土に馴れた。私の不思議な生活にも同化して来た。

「この上、蠻人さへ攻めかけて来なければ、俺の生活は永久に平和だ。残る餘生を楽しく安穩にすごして、あの老山羊のやうに、洞窟の内に老軀を横へて、最後の息を引き取るまでだ」

二十三年間、苛酷な労働に堪へて来たあとで、私は、漸く身心の慰安を欲して来た。

第一は、あの鸚鵡のボルだ。

人間の言葉を教へ込んだ效があつて、今では明瞭に發音することが出来るばかりでなく、まったく馴れなつてゐる。

私は、ボルめが可愛くて〜ならない。

その筈だ、ボルはその後も私と一緒に暮して、實に二十六年の長い〜月日、私を慰さめ、楽しませてくれたのだもの……ブラジル人の言ふところによると「鸚鵡は百歳まで生きる」といふことだから、後々私と別れてからも、島に生き残つてゐたかも知れない。

生き残つてゐて、

「隣れなロビン・クルウソオ、お前はどこにゐる？」と私を慕つて、私の名を呼びつゞけてゐたかも知れない……。

犬も、甚だ愉快な、氣持のよい私の伴侶だつた。彼は十六年以上も、私と一緒に暮したが、老衰して死んでしまつた。

猫に就ては、前にも書いたと思ふが、子が殖えるので、甚だ閉口した。子猫の方を二匹づつ、飼つておくことにして、殖えると、森へ追つ拂ふか、銃殺するか、水へ投げ込む他はなかつた。でない、私の食物を喰ひ喰べて仕方ないのであつた。

この他には、家族として、二三匹の山羊を絶やさず飼つておいて、自分の手から食物をやるまでに馴らしておいた。

鸚鵡も別に二羽もゐたが、最初のものほど口はきけなかつた。たゞ、

「ロビンソン・クルウソオ」と、私の名前を呼ぶだけが能であつた。

海岸には、相變らず澤山の海鳥がむらがつてゐた。私は、その中でベンギンを知つてゐるだけで、名は知らなかつたが、とにかく四五羽を捉へて来て、放し飼にしておいた。羽を切つて、砦の前の柵の間に放つておくのだ。

青々と茂つた樹の間に、その海鳥が、ちよこ／＼歩き廻る有様は、一幅の畫だ、まったく歡しい樂園だ。

かうして、私は、自分の創めた生活を、自分でまったく満足して、實行した。楽しい慰めの多いその日を送つた。

「あゝ、これで蠻人の襲來さへなければ、心から幸福なのだがなあ！」

九人の食人族

私はそれほど、蠻人を恐れた。恐れたにもかゝはらず、後に思ふと、この禍が却つて私に幸ひして、遂には私を救ひ出してくれる手がかりともなつたものだが、それはこの物語を最後まで讀んでゆけば、だん／＼に解つて来る……。

ともあれ、私の孤島生活も、最早や二十三年におよんだ。

その二十三年目の十二月に入つてからのことだつた、十二月と言へば、南極に近いこの地方では、ちやうど收穫の季節なのである。私は、忙しく野に出て、働いた。

その日も早朝からむつくり起きて、まだほの暗い野道を踏んで、畑へ行かうとした。すると、二哩ばかり向うの海岸に、焚火の光りが見える。

「おや？」

私は、ぎよつとして足を止めた。そのまゝ、樹蔭に身をひそめて、向うの様子を窺つた。

蠻人の焚火だ！ が、その火光は、例の彼等がやつて来る島の端だとは言へ、私の住む側と同じなのだ。

「たうとう、やつて来たか、だが、かうして島へ入り込んで来る以上、彼等は俺の穀物を見つけてらう、そしてこの島に住む人のあることを知つて、俺をさがし出すだらう、さあ、事だぞ！」

私の胸は、驚きと怖れに慄へてゐる。後をも見ずに、私は、砦へ馳せ歸つて、梯子を引き上げた。かねて用意の鐵砲に彈丸を込めて、扉に据ゑた。拳銃をも手許に引き寄せ、

「敵來らば、命かぎり根かぎり戦はう」と、決心した。

「神よ、加護をたまへ！」と祈りもした。

そして、二時間ばかり待ちつゞけてゐたが、元より敵の攻めて来やう筈はない。と言つて、此方から斥候にやる兵とてもない。

「一體、敵め、どうしてゐるだらう？」

敵狀が解らないだけに、私は、ますます不安になつた。たうとう、堪りかねて、邊りの小山に梯子をかけ、山上へ這ひあがつて見た。

そして、身を頂に伏せ、用意の望遠鏡を以て向うを望めば、果然！ 蠻人の姿が、望遠鏡に映つた。

一人……二人……三人……すべて九人の蠻人が、とろく燃える火を取り圍んで、車座に坐つてゐる。皆な、裸體だ。

蠻人だとして素よりこの炎天に、火にあたつてゐるわけではない。まさしく、持つて来た人間の肉を料理してゐるのだ。甘くなるやうに炙つてゐるのだ。

「だが、その人肉は死者のそれか、それとも生きてゐる人間の肉か？」

望遠鏡を持つ私の手は熱した、慄へた。ぢいつと瞳をも凝らして見つめたが、食ふ肉までは見えなかつた。

たゞ、濱へあけてある彼等の舟だけが見えた。二艘の獨木舟だ。

「すると、彼奴等は、潮の満ちて来るのを待つて、歸るんだな！ だが、彼奴等が、かう俺の身に近く接近して来やうとは、思ひがけなかつた」

恐るべき蠻人が、島の此方側に、しかもこんなに私の身近く姿をあらはしたことは、ひどく私をあわてさせた。しかし、同時に、私にも觀察の便利を與へた。

「彼奴等は、たしかに干潮の時、やつて来るに相違ない。だから、潮の満ちてゐる間は、彼奴等に出會ふ心配はない。俺は悠々と收穫が出来る」

渚に散つた血、骨、人肉

さういふ間も、蠻人どもは火をめぐつて、さんくんに踊りに踊つた。動かす脚、手、腰、それがありありと私の望遠鏡に映るのである。彼等は皆な丸裸であるが、男か女かは、よく解らなかつた。

「あ、踊るわ！ 踊るわ！」

私は、また、きもせずにごつと見つめてゐた。

およそ一時間ばかり、踊りに踊ると、彼等は、獨木舟にぼらく飛び乗つた。そして、擡を取つて漕ぎ出したが、見ると、潮は早や西へ流れ始めてゐる。私の推測は適中したのだ。

蠻人去ると見るや、私は、すぐに小山の頂上に姿をあらはした。肩には二挺の鐵砲をかつぎ、帯には同じく二挺の拳銃をさしはさみ、腰には、鞘のない大太刀をぶら下げるといふ物々しい扮装。

見ると、彼方の獨木舟は三艘で、それが蠻人を乗せて、大陸さして漕いで行く。私は、身を轉じて彼等が去つたあとの渚へと廻つて出た。扮装が扮装なので、なか／＼道もはかどらなかつたが、さて、濱邊へたどりついて見ると、さすがの私も、

「あゝつ！」

と、驚きの叫びをあげずにはゐられなかつた。世にも酷たらしく恐ろしいその場の光景よ！ あまりに凄（さい）いあさましい有様に、私は、身を慄（おそ）はせながら立ちすくんだ。

見よ！ 蠻人等が酒宴の興に、また戯れに食つた人間の肉切れは、そこかしこに散つてゐるではないか！

血は、まだ生々しく、そこに滴つてゐる。

骨は、あちこちに放り出されてゐる。

「そして、彼奴等は、肉の食へるところは、皆な貪り食つたのだ。一體、彼奴等は、どんな人間を食ふのだ？ 何人ぐらゐを食ふのだ？」

同じ人間に對する憐れみと、蠻人に對する義憤の激情が、かつと私の胸を熱して湧き上つた。

私は、熱い涙を眼にうかめ、齒を噛み、拳を握りしめて、心に叫んだ。

「もうかうなつては、容赦はしない。たとひ蠻人輩が幾百人來やうとも、一人残らず退治してくれよう！」

深夜の砲聲

私の氣持は、變つて來た。

「斷じて許さぬ、蠻人よ、來い！」と、待ちかまへたが、その後、長らく彼等は姿を見せなかつた。

一年三ヶ月ばかりの間は、事もなくすぎた。

もつとも、この間は雨天の季節で、蠻人來襲の不安と相俟つて、私は、あまり樂まないその日を送つた。

心は、いつも殺人的氣分に包まれて、

「よし、この次、彼奴等に出會つたら、こんなふうにだまして、こんなふうに闘つて、こんな風に殺してやらう！」

そのやうな空想に耽る日が多かつた。

前にも言つたやうに、殺しても殺しても、あとから〜と彼等がやつて來るとすれば、彼等が殺す數よりも自分の殺す數が多くなる……そんなふうにも、考へて行つた。

夜もおち〜眠らないやうな日が多かつた。夢で蠻人を殺して、びつくりして、汗ぐつしよりで寢床から跳ね起きることもあつた。

さういふある夜のこと——私の不完全な柱曆の記録によると、五月十六日のことであつたが、その日は朝から風は烈しく、夜に入ると共に、雷は恐ろしく鳴りはためき、電光閃々として、凄じい暴風雨の夜のことであつた。

私は、例によつて獨り聖書を取り出して、過ぎ越し方を思ひかへしながら、讀み入つてゐると、突如！ 濱邊の方にあたつて、

「ど、どん！」と、異様な物音がした。

びくりとして、私は飛び上つた。耳をすましながら、

「はて、不思議なこともあればあるもの、今のは、たしかに大砲の音だ！」

私は、手早く身支度を整へた。そして、梯子を岩にかけ、それを引きあげる間も遅く、小山の頂上に駆け上つた。

とたんに、ちらつ！ と、海上はるかに光つたものがある。

「第二發目だな」私は、暗い沖を見つめ、ちいつと鋭く耳をすました。

果然、ものゝ半分もたゝぬ間に、

「どん！」と、一發、次の砲聲が聞えて來た。闇をつんざき、嵐を壓するその砲聲の凄じさ！

私は小躍りした。

「これこそ、難破船に相違ない。場所も先年、俺のボートが潮流に流されたあの邊だ。どれ、一つ火を焚いてみよう」

私は、あたりの枯木を掻き集めて、火をつけた。さつと來る風と共に、火は、ぼつと燃えあがる。

沖の難破船は、早くも火を見つけたものか、つゞいて、

「ど、ど、ど、どつ！」

と、つるべ打ちに大砲を打ち出した。おそらくその船は、最初、同行の船に向つて、救ひの信號を打つたものであらう。しかし、今は、私の燃やす火に對して、哀訴の砲聲を放つたのだ。

人よ、戀し

しら／＼と夜が明け初める頃、さしもの嵐も靜まつて、一天からりと青く晴れわたつた。

私は、鐵砲を追取つて、例の潮流のある島の南側へ走つて行つた。走りながら、

「あの難破船は、きつと俺を救つてくれるだらう、俺には、船を助ける力はない、けれど、先方はきつと俺を救ひ出してくれる」

氣もそゞろに濱邊へ走りついて見ると、船は、暗礁に激突したと見え、隣れな殘骸だけを海上に浮かべてゐた。

船上に人のあるやうな様子も見えない。

「しまった！ やつぱし手遅れだったか」

私は、人のゐない破船を眺めて、さう眩くより他はなかつた。救つてもらはうとした頼みの綱は切れた。綱は切れて、私はまた孤島に残ることゝなつた。

いつまでといふ期限はなく、孤島に取残されることゝなつた。

私は、さまざまの推理を試みた。

「まづ、あの難破船の人達は、私の焚火を見た。それからボートを下して、火を目あてに島へ漕ぎつかうとする中、ボートが潮流に卷かれた。そして果敢なく沈んでしまつたのであらう」

さう考へる一方から、

「いや、あの信號の砲聲で、仲間の船が救ひに來たのだ……いや、さうでない、ボートを浮かべらるには浮かべたが、あの強い潮流に押し流されて、果しも知らぬ大洋へ押しやられたのだ、そして飢と疲勞のため、乗員互に相喰むやうな悲惨な最期を遂げたのだ……」

想像すればするほど、その船の乗組員が哀れにも、氣の毒になつた。

「それに比べると、何といふ仕合せな俺の身の上であらう、およそ世界のこの邊の海で、難破したといふのは、俺達の船と、今度の難破船であらうか、二つの船の數多い乗組員の中、死を免れたのは、たつた一人——俺一人だけなのだ。それを思へば、俺はますます神に謝さなければならぬ」

神に對する、私の信仰と、感謝の念は、その時から、ますます深く堅く、裏書されて行つたのであつた。

かうして、私の望みは、まづたく絶えた。絶えはしたが、その時から、私の心に一つの望みが湧いて起つた。望みといふよりも、それは一種の憧れだつた。

「一人でも二人でもよい、いや、ほんの一人でもよいから、あの難破船から助かつて、この島へ漂着してくれ、さうして、俺と話してくれ！ 俺と友達になつてくれ！」

私の心は、その「一人の友達」を望んで止まないものであつた。

熱い憧れの情は、それが望んでも叶はないことだと知るほど、なほ強く切に望んで止まないであ

つた。

孤島に獨りぼつちである中には、私の空想力や想像力や、物を推測する力は、異常に發達して來た。その私が、どれほど切に、一人の漂着者を待ち受けたことであらう。

「難破船には、同行の船はないらしい形跡だ。すると、乗組員は皆な溺死してしまつたのだ」さう斷定してからも、心のどこかではなほも、

「たつた一人の基督教徒の友達」を渴望して止まないものであつた。

「一人でよい、たつた一人」幾千度となく、さう繰り返しくしてゐる中に、私は我れを忘れて、兩手の掌をしつかりと握りしめ、握りしめて、齒は固く噛みあはせたまゝ、暫らくは離れないのであつた。

あゝ、今になつて見ると、人と人との交はりといふものが、いかに根本的で、緊要で、命そのもののやうに切要で、且つ意味のふかい本質的のものであるかを、私は知つたのである。人間社會を離れた今、私は初めて人間社會のほんたうの意味を知つたのである。

氣狂のやうに、憑かれたやうに私の渴望した「たつた一人」の人は、たうとう來なかつた。その代りに、五六日のことであつたが、一人の少年の溺死體が、海岸へ漂着した。

近づいてみると、その死體は、水夫のチョッキを着け、麻の半ズボンをはいて、水色のシャツを着てゐるが、どこの國のものだか、一向解らなかつた。

ポケットには銀貨二つとパイプがあつたが、無論、私は、銀貨なぞよりパイプの方が値打がある。

塵芥同様の金貨

私を死から救つて、今日まで命をつながせたのは、私の乗つて來た難破船である。難破船にあつたビスケットや、麥の種や、鐵砲や、器具である。

「今度の難破船にも、きつと何か役に立つものがあらう。冒險だが一つボートで乗り出して、あの船の中をさがしてやらう」

さう思ひ立つたが、しかし私の欲しいものは、品物ではない人だつた。

「たつた一人でよい、誰かあの船の中に生き残つてゐないものかな！ さうすれば、連れ出して來て、仲間にするのだがなあ！」

いよく私は、難破船に乗り込む決心をしたが、さて今の境遇では、萬に一つ失敗のないやうに、用意に用意を重ねたのである。

パンや、飲料水を入れた壺や、羅針盤や、ラム酒や、乾葡萄や、それから米袋、山羊の乳を入れた

壺、さらに例の蝙蝠傘など、ボートいつばいに積み込んだ。

荷物はかりではない、いざ船出といふ時には、

「神よ、この航海を寄りたまへ」と、祈りをもさへげるといふ、用心ぶかきであつた。

その上にも、かの恐ろしい潮流の方向を仔細に観察して、潮に乗るやうにして舟を放つと、舟の進みは矢よりも速く、およそ二時間ばかりで、早くも目的の難破船に達した。

着いてみると、何といふ慘澹たる有様だ、難破船は二つの巖の間にびつたりと挟まれて、船尾と舷とは波のために切々に打碎かれ、大きな帆柱、前帆柱とも、さんくんに打ち折られてゐる。

「は、あ、この構造から見ると、スペインの船だな」

私は、ボートを、壊れた舷側に着けた。

すると、一疋の犬が岸上に姿をあらはして、さも哀しうに憐れみを乞ふやうに吠えてゐる。

「來い、來い」

私と呼ぶと、犬は忽ち海の中へ飛び込んだ、そして此方をめがけて、泳いで來る。

「可哀さうに」私はボートに引きあげて、パンを與へてやつた。

犬は、それにむしやぶりつく。水をやると、がぶくくと夢中で飲んでゐる。まるで、雪の中で飢ゑた瘠狼さながらの滲めな姿だ。

私は、やがて船上へ上つた。見ると、二人の男が、前甲板の料理室で溺死してゐる。

二人とも、腕と腕とで、しつかりと抱きあつて死んでゐる姿が、痛ましい。

「お、お、氣の毒な、この姿で見ると、船はすつかり波を被つて、水漬け同様になつたと見える」船内を隈なくさがしたが、先刻の犬の他には、何一つとして生きてゐるものはなかつた。荷物はす

つかり水に浸つて、その上、渦が巻いてゐるので、手のつけやうがない。

たゞ水夫の持物らしい五六箇の箱があつたので、その中二つだけを、ボートに移した。

その他、飲み物を入れた小さな樽、火薬の罐、十能、火箸チヨコレートを作る銅壺など、おもに炊事用の道具を持つて歸ることにしたが、殊更ら私を喜ばせたのは、シャツや色模様のある頸巻や、ハンケチの類だつた。

白いリンネルのハンケチ半ダアスが、その後どれほど私に調法をしたことであらう。暑い日中に顔を拭くことも出来なかつた私は、今このハンケチを手に入れて、つくづく物のありがたいこと、便利なことを知つたのである。

貨幣もかなり多かつた。スペインやポルトガルの金貨もあつたが、今の私には、それが何の値打ちがあらう。ありあまるほどの金があつたところで、何一つ買へるのではないし、私にはまつたく足下の塵芥も同然だ。

「俺にもし英國製の靴三四足、靴下でもよいが、呉れるといふものがあつたなら、この金は皆残らず呉れてやるがなあ！ 重くばかりあつて、こんなものは何にもならない」
實際、この時も、私は、金貨残らずを海の中へ投げ込まうとしたくらゐだつた。
が、ともかくも、他の品物や先刻の犬など、一緒にして、その金貨も持つて歸ることにした。
溺死者のはいてゐた靴もぬがして、持つて歸ることにしたが、それは英國出來のものとは違つて、極くお粗末なものだつた。

過去の追想

この日を病つきに、私は、その後もよく難破船へ行つた。
「あそこへ行つたところで、何一つ獲物はない筈だ」
さうは思ひながら、何となし物懐しさに、私は、船のあたりへ小迷つて行つたのであつた。
「おそらく世界に、俺ほど人生の苦痛を體驗し、痛感したものはないであらう、その點では、俺は世界に二人とない不仕合せな奴だとも言へる。少くとも、俺は、人類社會の不幸の代表者であつて、世の不仕合せを嘆つ人も、俺から見れば、俺の辛苦のほんの何千分の一を経験してゐるに過ぎない」

難破船に出會つてから二年間、相變らず單調寂寥な生活を繰り返しながら、私は、そんなふうにも考へず、めて行つた。

「しかし、この苦痛も寂寞も、皆な自分の身から出た錆に他ならない。少年客氣のなせる業とは言ひながら、持つて生れた放浪癖に禍されて、父の意見を無視したのが、そもくくの災害の元だつた。せつかくブラジルで成功しかけながら、つまらぬ仕事に手を出さうとして、奴隷買出しなどに出かけたのが、そもくくの身の躓きの元だつた！」

往時を顧み、少年時代を追想すれば、もろくくの感情はひしくと胸に迫つてきた。昔戀しく哀しく、やり場のない強い懐しみに襲はれる。

「あの黒奴の海賊船長の許を逃げ出した時の船——せめてあのくらゐの船が今手許にあつたら、俺はこの大洋へ乗り出すのだがなあ……」

よく、さう嘆じるやうなこともあつた。この島へ來てから既に二十四年！ 私も大分歳をとつた。孤島の獨居二十四年！ 長い年月の間には、さすがの私も、すっかり落着きが出来て、身の不幸の由來するところも、はつきりと解剖することが出来るやうになつたのである。

鍛練に鍛練は重ねたが、しかし、私は、死よりも辛い寂寞の痛苦には堪へきれない折があつた。たまたま難破船が來て、生活の單調を破り、私はまたそこから、身にあまる財産を持つて來たと言へ

「富豪になつたとは言へ、しかもその財産なるものは、スペイン人が行かない前に、ペルーのイン
ド人が持つてゐた富と同じやうなもので、私にはまつたく用のない無益の長物なのだった。」

二十四年目の三月となれば、島は例によつて雨天の季節。私は終日家に籠つてゐたが、ある夜は、
寝られぬまゝに、寢床——と言ふよりハムモックの上に起き上つて、薄暗い蠟燭の火影をみつめなが
ら、殊に寂しく、孤り物を思ふのであつた。

「それはさうと、あの蠻人どもは、その後どうしたらう？ やはり引續いて島へやつて来るのであら
うか？ 考へると、俺も危険な境に身をおいたものだった、同じ島の海岸へあの残酷な蠻人が幾百と
なく上陸してゐたのも知らないで、よい氣になつて、島の帝王氣取なぞであられたものだ……」

例によつて想像は想像を生み、推理と空想とは、果しなくひろがり續いてゆく。

「いや、しかし、それもひとへに神の加護によるものだ、神の奇蹟がなかつたならば、今頃俺の身
は、どうなつてゐたらう？ さうだ、俺はちやうどあの山羊だ、あの龜だ、私があゝの山羊を、あの龜
を捕へるやうに、蠻人は私を捕へて、食つてしまつたのだ、私があゝの鳩や鵲を取つて食ふやうに、私
自身が食はれてしまつたのだ……だが、だが……」

私は一步考へをすゝめた。

「一體、彼等蠻人の住む處は、地理上、世界の何處にあたるのであらうか？ こゝからはどのくらゐ、

離れてゐるのであらうか？ どんなふうにしてやつて来るのであらうか？ 彼奴等が既に渡つて来る

以上、此方からも行けない道理はない……一つ、冒險して渡つてみようか……」

が、渡つてゆくとして、舟をどうする？ 食料をどうする？

舟と食料とは、どうやら出来るとしても、さて向うへ渡つてから、蠻人に出會つたらどうする？

どうして、蠻人の魔手を逃れるつもりなのか？

「いや、その時はその時で、岸づたひに舟を漕いで行かう。漕いで行く中には、いつかは基督教徒
の船にも出會はう、神は救ひの手をさしのべて下さるだらう」

我と問ひ、我と答へて、私の苦悶は烈しく、靜まるどころを知らないのであつた。

「あゝ、俺こそは、人生にあり得る最も慘めな境涯に置かれてゐる身だ。その上、悪いといふことは、
たゞ死の他にない……あゝ、一人でもよい、たつた一人の共に言葉を交へる白人が私の前に現れない
ものか……」

夢の名残り

考へ去り考へ來ると、私の全身は熱し、血は湧き立つばかりに沸騰する。脈は熱でも病んでゐる人

のやうに、烈しく打ち、私はまるで狂人のやうに激昂するのであつた。

激昂の極、神経はぐつたり疲れて、深い眠りに陥るのであつた。

だが、眠りが浅くなつてうとうとくすると、すぐに怖い夢に襲ひかゝられるのであつた。夢の中には、よく蠻人が出て來た。寢ても覺めても、私の氣にかゝるのは、やはりあの兇暴な蠻人のことだと見える。

私は眠りながら、蠻人の群と格闘した。そして、哀れな犠牲が、危ふく彼等に殺されようとしてゐるのを助けたこともある。

その犠牲は、まだ若い蠻人だつたが、私が助けてやると、ひどく恩義に感激して、僕とならうと申し出た。

「よし」私は言つた。「では、これから大陸へ渡るのに、お前は案内をつとめるがよい」

「喜んで、御案内いたします」

「では訊くが、これからどう行つたら、糧食を得られるか？ どう行つたら、食はれずにすむか？」

「そんなことは譯はありません、私がきつと安全に御案内いたします」

「ぢや頼む！ あゝ、これで俺も助かつた！ あゝ、こんな嬉しいことはない！」

叫ぶ拍子、私は、はつと眼がさめた。さめれば、それは一場の幻、果敢ない夢にすぎなかつた。

「なあんだ、夢だつたか」

私は、がっかりして、全身の力が一時にぬけ落ちたやうな氣がした。前途が再び眞暗になつたやうな氣がした。

消え去つた夢の名残りを、惜しくも追ふやうな氣持で、私は呟いた。

「今の夢には何かの手が、りがある。ふだん俺の思ひつめてゐたことが、夢となつて現出したのかも、知れない……いづれにしても、この島から俺を救ひ出してくれるものは、一人の蠻人だ！ それも、食はれるため、こゝへ連れて來られた犠牲者でなければならぬ。だが、いよくそれを決行すると

なると、蠻人の大群を一人残らず皆殺しにしなければならぬぞ」

それは一か八か、必死懸命、棄鉢の冒險だつた、その上、いかに自分の身の安全を計るためとは言へ、そんな残酷な血まみれな所業をすることは、衷心疾しいことでもあつた。

「さりとて、血を見ない中は、此方の命が危ない。敵を斃すか、此方が斃されるか、つまり俺は、正當な防衛のために、戦ふのだ！」

私の考へは、幾變轉して行つた。今は進んで、敢て敵にぶつかつて、あわよくば二人三人蠻人を捉へて、手下につけようといふ、大膽な意氣込みだつた。蠻人を恐れて身を隠さうとした以前にくらべると、まつたく別人の觀がある。

私は、毎日、進んで、島の西側や、南西側をうろついて、敵や來ると、偵察した。一年半ばかりの間、瘡せる思ひをして偵察に憂身をやつした。

蠻人は踊る

待ちに待った敵があらはれたのは、一年半をすぎた後であつた。

ある朝早く、私が外へ出ると、五艘ばかりの獨木舟が、島の此方側の岸に集まつて繋いである。

「あゝ來たな、たうとう……」

私はぎよつとした。が、兼ねて覺悟したこと、すぐに勇氣を振り起して、獨木舟を偵察すると、蠻人等は早くも上陸したと見えて、四艘は空っぽ。たゞ一艘だけに五六人乗組んである。

「舟の數から推測すると、總勢二三十人の蠻人だな、これは俺一人の手にはおへないぞ」

私は一旦私の岩に引返した。と言つて、この機會を逸しては、また何時、蠻人の案内者を捉へることが出来るか解らない。

「今こそ絶好の機會！ 死を賭しても一戦交へよう！」

遂に私は岩を出た。鐵砲は皆な梯子の下において、兼ねての手筈どほり小山の頂上にのぼつて、身

を伏せ、姿を敵に見つけられないやうにして、望遠鏡を取り出した。

見ると、遙の濱には、その勢およそ三十人ばかりの蠻人が、さかんに火をたいて、肉を炙つてゐるらしい。

無論人間の肉であらう、彼等はそれを料理しながら、火をめぐつて、踊りに踊つてゐる。

舞踏だ、酒宴だ！ 然し、裸の彼等が踊る姿の、いかに奇怪で、原始的で、蠻的なことであらう。

私は、また、きもせずにはいつと見詰めた。すると、彼等は、二人の男を舟から曳摺り出して來て

いよく虐殺に取りかゝつた。

「や！ 殺るな」

私が、さう思ふ間も遅し、その一人は、ぱつたりと倒れた。混棒が木劍のやうなもので叩き倒されたのだ。

と見た蠻人の二三は、ばらばらと駆け寄つて、犠牲者の肉を切り割き、料理にかゝる。

そのとたん、傍に立つてゐたも一人の犠牲者は、不意にびよこんと跳ねあがるやうに見えた。跳ねたのではない、彼は蠻人の隙を覗つて、飛び跳ねながら、逃げ出したのだ。

肉の料理に氣をとられてゐた蠻人等は、それを見ると、忽ち飛び出して、追ひかけた。

犠牲者は走る！ その速いこと、彈丸のやうだ、私の方をめぐらして、砂地をまつしぐらに走る！

走る！

「やー やー やー！」

私は、びつくりして、身を慄はせた。兼ねてかういふ場面を空想に描きもし、夢にも見て来たのであるが、今、まのあたり、その活劇を實地に見ては、戦慄する他はなかつた。

望遠鏡を持つ手も汗ばみ熱して、私は、砂地の活劇に見入つた。

犠牲者は走る！ それを追ふ三人の蠻人も走る！ 追ふ者、追はれる者、足はさながら宙を飛ぶやうで、此方をめざして駆けて来るが、追はれる者の脚力は、一層速い！

實に驚くべき速力で、このまゝ、三十分も走つたら、彼は、たしかに逃げのびることが出来る……。

と見た私は、俄かに勇氣百倍、

「今こそあの犠牲者を虜となさう！」

と、勇みに勇んで、武者ぶるひした。

痛快な活劇

彼等は走る。共に走る。

が、彼等と私の要塞との間には、一つの入江がある。それは、私が昔、自分の乗つて来た難破船から、荷物を運びあげた小さな入江なのである。

「さあ事だ！ あの入江にかゝつたら、犠牲者は捕るかも知れない。それとも泳いで逃げ了せるか、捕まるか、二つに一つのどたん場だ！」

言ふ中に、犠牲者は、早くも入江の岸にかゝつた。

「あれ、あれ」と此方の胸の騒ぐ間に、ざんぶとばかり、水に躍り込んだ。

折から満潮、岸に溢れる水は、さつとばかり水煙が立つ。その中に浮きつ沈みつ、彼は泳ぐ。命かぎり根かぎり、手足を伸ばし縮めする中、早くも水を横ぎつて、此方の岸にのぼると同時に逸足出して、また駆け出した。

その泳ぎぶりの見事さ！ 走ることの速いこと！

「あれでも人間だらうか、さても恐ろしく敏捷な奴もあつたものだ」と、危急の場合ながら、私も見られるやうな早業だつた。

追つかけて来た三人の中、一人は泳ぎが出来ないと見え、岸のところ立ち止つて、ぼかんとして見てゐたが、やがてぶらく歸つて行つた。その間に二人は、水に飛び入つたが、泳ぎはうまいとは言はれない。ばたくやつて、やつと此方の岸に上つた。

見てゐる私は勇み立ち、

「これぞまさしく天の與へ！ では、あの逃げて来る蠻人を捕へて、仲間ともし僕ともしよう」

私は一氣に梯子を馳せ下りた。梯子の下の一挺の鐵砲を掴み取るまも遅し、再び小山へ馳せのぼつて、間道の近路を、一直線に濱の方へと走つた。

そして、追ふ者、追はれる者の間に身をおいて、

「おうい！」と、大聲に叫びかけた。

呼ばれた犠牲者は、びっくりとしたやうに、振り返つた。

「來い！ 來い！」

私は、手招きして、彼をさしまねきながら、追つかけて来る二人に近よつた。

近よりながら、飛鳥のごとく飛びかゝつてまづ先に來る奴を、鐵砲の臺尻で叩き倒した。私は、銃聲を立てることを恐れたので、強引に臺尻で打ち倒したのだ。

それと見た後の奴は、びつくりして棒のやうに立ち止つたが、素早く弓矢を取り直して、私をめぐりて射ようとする。

もう仕方ない。私は鐵砲の覗ひをつけると共に、

「どん！」と、一發で、撃ち殺してしまつた。

たゞこれ電光石火の早業であつたが、驚いたのは、かの犠牲者である。不意にあらはれた私の姿、その私が不思議な鐵砲の音を立て火を發すると共に、追手は、ぼつたり倒れてしまつたのだ。

蠻人の犠牲者は、たゞ、驚いて、暫らくの間ぼんやりと立ちすくんでゐたが、不意に逸足出して逃げ去らうとする。

「來い！ 來い！」私は後から呼びかけた。手招きをした。

さうなると、彼も逃げ去ることは出來ない。私の方へおづく歩き出して來た。五六歩歩いては立ち止りながら、今にも虜になるか、二人の追手と同じやうに殺されるかと思ふものゝやうに、ぶるぶる慄へてゐる。

私は、手招きをつゞけた。手招きの上に、安心するやうにと、出來るかきりの手眞似をして見せた。すると、彼もだん／＼近よつて來る。十歩來ては跪き、十二歩來ては跪きして、私を拜するやうな態度である。助けてもらつた禮をあらはすやうな態度である。

私は、につこりと快活に笑つてみせた。そして、もつと／＼近くへ來るやうに手招きすると、たうとう私の傍まで來た。そして跪いて、大地に接吻し、頭を地にすりつけて、私の足を抱き、それを自分の頭の上にと載せた。その様子は、

「私はこれから長くあなたの奴隷になります」と、誓つてゐるやうであつた。

あゝ夢にまで見た私の熱い望みが、今こそ達せられたのだ。

凱旋將軍の如く

鐵砲の臺尻で叩き倒した蠻人は、一時氣絶したもので、死んだのではない。やがてピク／＼と手足を動かして始めた。

で、私は取敢ず、助けた若い蠻人に向つて、「あれをどうかせよ、あれはまだ生きてゐる」といふ意味を手眞似で示すと、彼は、忽ち何やら言ひかけた。

意味は解らないが、何やら私に話しかけた。おゝ、それこそ二十五年目で、私が初めて聞いた人間の言葉なのだ！

おゝ、その解らない蠻人の言葉が、どれほど快く、懐しく、異様に、私の耳にひびいたことであつたらう。あゝ二十五年をすぎて、初めて聞いた人間の言葉の、いかにも歡しく、胸の血を躍らせたことであらう！

さういふ間も、彼方の蠻人は、起き上らうとする。私は鐵砲を取り上げた。

すると、助けた蠻人は、つと私の傍へ寄つて、しきりに手眞似をする。私が腰にぶらさげた例の抜

身の大太刀を貸してくれと言ふのだ。

「よし」

私が大太刀を貸してやると、彼はそれを受取るなり、敵の方へと走つて行つた。敵は今しも立ち上らうとする。その機を逸せず唯一打ち！ 唯一打ちで、見事に敵の首を刎ねてしまつた。

「さても鮮かな腕前、話に聞くドイツの首切役人と雖も、よもやこれほど巧みに劍は使へまい。だが不思議なのは劍も見たことのないやうな蠻人が、どうして手際よく首を切るのか」さう思つて、私は呆氣に取られたが、後で聞くと、蠻人の木劍といふものは非常に重く固く鋭いもので、それを使つて首や腕や足を、やはり唯一打ちで打ち落すのだといふのであつた。

それはともかく、彼は首を打ち落とすと、につこり笑つた。そして、凱旋の印として、その首を私の前に供へ、太刀を私に返したのであるが、さらに指さしをして「向うの蠻人を調べたいが」と、許しを乞ひたいやうな身振りをした。

「よろしい」さう口へは出さないが、私も手眞似で、それを許してやつた。

彼は、死骸の傍へ走つて行つた。そして、揺り動かしたり、胸の傷口を調べたりしたが、そこから大して血も出てゐないのに、しかも絶息してゐるのでひどく吃驚したらしかつたが、やがて、傍にあつた弓矢を持つて來た。

私は、手真似で、こんな意味のしぐさをした。

「蠻人よ、追手のかゝる恐れがあるから、私について早く来い」

すると、彼も、次のやうな手真似をした。

「この死骸を見つけられるといけない、砂の中へ埋めておきませう」

「よいところへ氣がついた。すぐ埋めておくがよい」

そこで、彼はすぐ両手で砂を掘り始めたが、その早いこと、巧みなこと！ものゝ三十分もたゝない中に、大きな穴を掘つて、二つの死骸を埋めてしまった。

「よし、さあ參らう」私は、手真似で、彼を従へ、凱旋將軍のごとく、家路をさして歸りかけた。

家といつても、島の向うの岩窟の方へ連れて行つた。そこで、パンと乾葡萄と水をあてがつてやると彼の喜ぶまいことか、さも旨さうに喰べて飲む。

「喰べたら寝るがよい」私は、藁の上へ敷いた毛布を指さした。

彼は、ごろりとそれへ横はつた。勞れてゐるのか、すぐ鼾の聲を立てた。

忠僕フライデー

蠻人とはいひながら、彼は實に好青年だつた。年は二十六ぐらゐであらうか、容貌も立派な好男子

で、丈は高く、すらりとして而も巖乗で、手足も長く釣合が取れてゐて、きりゝとしてゐて、而も髯悪でない、醜くない。どこか歐洲人に似た優しさと柔かみがあり、取り分けにつと微笑む時には、何ともいへない可愛い愛嬌がある。

髪の毛は長く黒く、そのくせ、毛絲のやうに縮れてゐない。額は高く、眼には、活々とした輝きがある。皮膚は全然黒ではなく、むしろ黄褐色で、それもブラジル人やアメリカ土人のやうに悪黄いのではない、濃いオリヅ色で、そこに何ともいへない好ましさがある。一體に顔は圓く肥つて、鼻は小さいけれど、ニグローのやうに平たくはない。口許はきりつとしまつて、唇は薄く、齒もよく揃つて、象牙のやうに白く美しい。

およそ三十分ばかり眠ると、彼は眼をさまして、巖窟を出て來た。そして、山羊の乳をしぼつてゐる私の傍へ駆けよつて來た。

同時に、私の前の地上にべたりと平たく坐つて、奇妙な身振り手真似を始めた。

「恩人よ、ありがたうございます、私は心から感謝いたして居ります」その身振りが、かう言つてゐるやうであつた。

それでも足りないと思つたか、彼は頭を私の足の下に摺りつけ、私の片足を取つて、自分の頭の上に乗せた。その上に、およそ彼が出来るかぎりの身振りをして、服従の意をあらはした。

「私の命のあるかぎり、私はあなたにお仕へします、決して／＼あなたに叛くやうなことはいたしません」彼の身振りが、さう繰り返してゐた。

「よく解つた、よろしい、俺もお前が氣に入つた」私が、さう手眞似身振りで答へると、彼も二重に喜んだ。

しかし、身振りや手眞似だけでは、どうも物足りない。第一、もどかしい。そこで私はまづ、彼に言葉を教へ、お互に話しかけもし、話しかけられもしたいと思ひ立つた。

そこで、彼の名をまづ、

「フライデー」と名づけて、その名を教へ込んだ。フライデー即ち金曜日、私が彼を助けてやつた日で、まことによい記念日なのである。

次は、私を呼ぶのに、

「主人」と言へと教へた。

「然り」と「否」を教へて、その意味を説明した。

次には壺に山羊の乳を入れて、私自身がまづ飲んでみせ、それから乳にパンを浸して喰べることを教へてやると、彼はさつそくやつて見て、

「これは旨い、素敵です」

といふやうな身振をして見せた。

それからが大變だ。朝起きてまづ着物を着せてやらうとすると、本來全裸體の彼は、ひどくそれを喜んだのはよいとして、やがて一緒に出かけて、例の二人の蠻人を埋めたところへさしかゝると、彼は急に變なそぶりをした。

「おや？」と思つて、よく見ると、どうだらう、彼の身振りは、

「こゝに埋めておいた二つの死骸を掘り取り出して喰べたい」と言ふのだ。

私は、くわつとした——いや、怒つたふうをして、まづ自分がべつ／＼と唾を吐いてみせた。それから、

「飛んでもない、人の肉を喰べるなど、考へただけで胸がわるくなる」といふ意味を示すと、賢い彼は、すぐ解つて、すぐに思ひ返したやうに、私のあとに踵いて来る。

行く／＼私は、フライデーに刀を持たせた。背には、彼が得意とする弓矢を背はせた。その上に、二人で三挺の鐵砲を持つて、例の蠻人が悪業をほしいまゝにした處へ行つてみた。

が、そこへ着くと同時に、私の總身の血は一時に凍り、ぐらく／＼と眼先が眞暗になるやうにさへ覺えた。

おゝ、何といふ恐ろしいその場の光景であらう！ 何といふ酷い慘めなあさましいその場の狼藉で

あらう！ 唯見るあたり一面は、人骨で満たされ、血は流れて砂に滲み、大きな人肉の切れはそこかしこに散乱してゐる。すたくに切り刻まれたもの、半分喰ひかけたもの、火に焼かれたもの……それが皆な彼等蠻人の戦勝の酒宴の肴にされたのだ。

「お、骸骨が三つ……手の骨が五本、足の骨が……」と数へながら、私は、ぞうつとして、背筋に冷い戦慄を感じた。

だが、傍のフライデーは一向平氣なもので、けろりとして、私に手眞似で説明するのであつた。それによると、捕はれて來た捕虜は、すべて四人だつた。そして中三人が食はれ、フライデーだけが逃げたのであるが、これは彼等と彼等の隣國たる自分達の王の間に、近頃烈しい戦争があつて、隣國のものが多く捕虜とされ、かゝして各所へわかれ／＼に連れて來られて、食はれたのだと、説明した。

私は、それを聞きながら、フライデーに命じて、あたりの骨や肉や骸骨を掻き集めさせた。そして、その上に火を焚いて、皆な焼いてしまふやうにと、命じた。

フライデーは、肉を見ると、急に食ひたいやうな様子を見せた。人肉に飢ゑる胃をもつ蠻人——フライデーは、今、明らかに食人種の本性をあらはしたのだ。

「こら！」私は、忽ち憎惡の色を顔にうかめた。「これフライデー、貴様がもしこの肉を口にしたら、俺は貴様を生かしてはおかないぞ！」これには彼も閉口した。改めて、私に詫言した。

蠻人教育

長年の間には、私もいつか立派な仕立屋となつてゐた。難破船から持つて來たリンネルや、山羊の皮などをつゞり合せて、ジャケツの一枚くらはつゞくれる腕前になつてゐた。それに、兎の皮で工夫して、鳥打帽も一つ作つて置いた。

それが、今みんな役に立つた。フライデーを連れて來て、それを着せてやると彼の喜びと言つたらなかつた。

「あ、これで私も主人と同じ風采になつた」と言つて、彼奴大満足の體だつた。でも、最初の中は、生れてから着物など着たことのないフライデー、いやに窮屈がつて、やれズボンが足にからまるの、チョッキが胸をしめつけるなど、言つて、ごたくをこねたものだつたが、だんだんそれにも慣れて、みかけは立派な美青年になつた。

風采はできあがつたが、何にしても危険な食人種、私は、彼の寝る場所と自分との間には、常に堅

固な戸のやうな物を置いたが、しかし後に考へれば、それも無用の要心だつた。

なぜならば、彼は、私のこれまで會つたこともない程の正直誠直な愛らしい僕だつたから。實に何の邪心もなく、不平もなく、謀みもなく、彼はたゞ、自分の熱い眞心を以て、私に奉仕することはかりを心がけてゐたのである。従つて彼の私に對する愛情といふものは、まるで、子の父に對するやうな濃かさで、お互の間をしつかりと、結び付けてゐた。

「ほんたうに、この主人のためならば、私の命はいつでも、犠牲にいたします」と言つてゐるやうに見えた。

このフライデーの眞心を見るにつけても、私はまた神のことを思はざるを得なかつた。

見れば見るほど、私も彼も、同じやうな力と、理性と、同じやうな愛情と、情藻とを神から與へられてゐる。誠實と感謝と反省の精神力を與へられてゐる。

「もしも、神にして、教育といふ大光明を以て彼を照せば、蠻人といへども、或は私達文明人にまさるものがあるかも知れない。すくなくとも彼の機敏と、誠實とは、文明人にまさるものがある」

まつたく彼は、快活で、伶俐で、その上、不屈の努力家だつた。私が言葉を教へ込むと、それはもう喜んで、いとも熱心に、言葉の意味を理解しようといふのであつた。さうなると、私は、まずまず彼が可愛い、私の生活も愉快になる。この上、蠻人の心配さへなければ、私は満足して生涯この

鳥に止まつてもよいとさへ思つた。

たゞ一つ困ることは、彼が依然として人肉を食ひたがることだ。

そこで、私は考へた。

「この食人の胃袋を治すには、他の肉を食せるにかぎる」

で、私はある朝フライデーを連れて、山羊を撃ちに出かけた。木蔭に眠つてゐる小山羊、それを目がけて、私が一發「ずどん！」と放つと、フライデーは腰をぬかささんばかりに吃驚した。

初めぐるぐらふるへて、氣絶せんばかりに驚いて、それからぼかんと突立つてゐる。自分の胸のあたりをなで廻して、「こゝを撃たれたのぢやないだらうか」といふふうに物案じ顔をしてゐたが、ふいに顔色を變へて、私のそばによると共に、べたりと地面に頭をすりつけて、何やらぶつ／＼いひながら、しきりに私を拜むのであつた。

「主人よ、命ばかりはお助け下さい」と、哀願してゐるやうであつた。

私は、につこり笑つて、彼を掻き抱いた。「フライデーよ、私はお前を撃つたのではない、安心したがよい」といふことを、示したのである。

それから、向うの山羊を指さして、持つて來いと命じると、彼は即座に飛んで行つた。が、山羊が死んでゐるのを見ると、また驚いて、きよとんとしてゐる。

その間に私は、手早く第二弾をこめる。折から空を舞つてきた鳥を目がけて、「どん！」と一發放つと共に、鳥は、ぼつさり地に落ちた。

見てゐるフライデーは、二度吃驚、「不思議なのは、この品物だ。魔物のやうに人も殺せば、山羊、鳥のなんでも殺す。なんといふ恐ろしい奴だらう」

フライデーは、まったく鐵砲を怖れたらしかつた。それからといふもの、私と一緒に鐵砲まで、崇拜して拜んだ。その後、よく鐵砲に向つて何やらぶつ／＼いつてゐたが、後で聞くと鐵砲に向つて、「不思議な品物よ、私の命を取らないでくれ」と、拜んでゐたのであつた。

それはともかく、この晩私は歸つて來ると、眞先に今日の得物を料理した。それをぶつ／＼鍋で煮て、うまい肉とソップとに煮つめた。

それをフライデーにやると、計畫はうまく圖にあたつて、彼はうまさうに喰べ始めた。たゞ一つ彼が不思議がつたことは、私が肉に鹽をつけて食べることであつた。言ひわすれたが、私は幾年か前に鹽を作ることを工夫し出してゐたが、今その鹽をつけて私が喰べるのを見ると、フライデーはさもさも不思議さうにながめてゐた。自分も眞似をして見て、ちよつと鹽をつけて見たが、あわて、吐き出して唾を吐いた上、水で口を注いだりした。

だが山羊の肉は、いかにも、うまかつたと見え、「主人よ！ 私は、今日から斷然人肉は食ひません！」と誓つたのであつた。

私は心からうれしかつた。それからだん／＼彼を仕込んで、穀物のこなし方や、パンの製法、山羊の乳のしぼり方までも教へ込んだ。

彼は、まったく満足して働いた。喜んで穀物を喰べた。

今や私は、曾てない深い愛情を以て心から彼を愛した。彼もまた深い尊敬を以て私に奉仕した。

物凄い食人種

その上、私は今になつて、自分の舌を再び用ふべき機會に達した。

ある日、私は英語で彼に問ひ、彼の答を待つた。

「フライデーよ、お前の國は、戦争に勝つたことはないかね？」

「否！ 主人」と彼は微笑して、覺束ない言葉で問へる。「私の國、よく敵負かすです」

「ほ、う、では、なぜお前は、捕虜になつたんだい？」

「それは、かうです、主人。その時の戦には、私の國の人は少なかつたから、私ら擱まつたけど、私

らないところでは、私ら國の者先方大勢つかまへた」

「さうか、ではなぜ、お前の味方は、お前達を取り返さなかつたかえ？」

「それがかうです。彼奴等は、獨木舟持つてゐたが私ら國獨木舟持つてゐなかつた」

「なるほどね」私はうなづいて、「ところでフライデー、お前の國の者は、つかまへた捕虜に對してどうするのだね？ やはりどこかへ連れて行つて食ふのかね？」

「然り、主人、私らの國の者も人肉食ひます」

「どんなところへ連れて行くのだ？」

「めい／＼、思ひついた他のところへ」

「この島へも来るかね？」

「然り、こゝへも來ます。他へも行きます」

私は、膝をすゝめて、

「すると、お前も來たことがあるね？」

「然り、あの邊に——」

言つて、彼は島の西北方を指したのである。

「物騒な奴だな」私は顔をそむけながら、

「で何かい？ お前はあそこで何人くらゐの人を食つたんだ？」

「それがその……」彼は言葉につまつて、へどもどしてゐる。

私は足許にある小石を指さして、

「あれで數へてごらん！」

フライデーは、丹念に苦心しながら、小石を竝べ始めた。「一つ……二つ……五つ……十。」

「え、えー、二十人も……何、まだある？ 二人？ 一人？ ふうむ！」

實に恐ろしい食人種よ！ おとなしいこのフライデーの同國人ですら、實に二十人の男と、二人の女と一人の子供とを捕へて喰べてしまつたのであつた。

白人の消息

フライデーの英語は、日に／＼うまくなつて行つた。ある日は、私はこんな風にもきいた。

「一體、この島から向うの岸まではどの位の距離があるのか？ 途中、獨木舟が流されることはないか？」

「否、否！ すこしも危険ありません。ですが、朝と晝過とで海の流れが變ります。それに風があり

ます」

「ぢや、それこそ、私が先年ひどい眼にあつた潮流の干満だ」

と、私は叫んだのであつた。が、それは後に考へると誤りであつて、私が潮流の干満だと思つたのは實は大河の作用なのであつた。この島は實は大河オルウノクオ河の河口にあつて、名をトリニダッドといふ大島だつたのであつた……。

それは兎も角、フライデーとのこんな話に氣もまぎれて、その後の私の生活は、まったく愉快そのものだつた。二人がかうして三年暮す中には、私は「神」といふ觀念についても次第に彼に教へ込んで行つたのであつた。

「神は、お互を救はんがために送られてある。どんな罪も懺悔によつて一切浄められる。神は常に空にあつて、われらの言葉に耳をかたむけたまふ。まづ祈れよ！ 祈らばどんな悲しみも柔げられる」フライデーは、かういふ私の言葉に對し熱心に耳をかたむけた。心の耳をかたむけた。彼の熱心が私にはしみじみ嬉しかつた。私自身の悲みが先づ柔げられた。

實際、楽しい仕合せな三年の年月だつた。私は身の孤島にあることをまったく忘れ、人間社會にある時よりも明るい蟻りのない月日を送つたのであつた。

就中、感謝すべきことは、我フライデーの信仰心であつた。聰明な彼、敏感にして受感性に富む彼

は、三年經ないに世にも立派は基督教徒となつた。私は彼ほど敬虔な、熱心な、篤實な基督教徒を會て見たことがない。蠻人ながら或る點では白人たる私よりも寧ろ強い信仰を發揮することがあつた。

で、ある時私は彼を呼んで、初めて私の身の上を説き明して聞かせた。どうして私がこの島へ來たか、自分でどんな生活を切り拓いて、もう何年か、に住んであるかをも語つて聞かせた。また本國イギリスの地圖を描いて、世界のことから歐洲の様子をも、彼にはつきり説明してやつた。

「ところで、お前がこれまで魔物と思つてゐた正體はこれなんだ」

と、言つて、私は鐵砲を取出して見せた。火藥や彈丸をもつめて見せ、鐵砲の祕密を初めて彼に明してやつたのである。また射撃の仕方をも教へてやつた。私が彼に一箇のナイフを與へると、彼の喜ぶまいことか、

「嬉しいな！ ナイフ！ ナイフ！」と叫んで跳ね廻るのであつた。そのいぢらしいこと、可愛いと、涙が出るほどであつた。

そこで、私は一挺の手斧をも彼に與へてやつた。

ある日のこと、私は彼を連れて濱へ行つた。そして、私が曾て作つたボートの砂の中に埋もれてゐるのを見せた。

と、彼は、ちいつとそのボートに見入つた。なにやら考へて思ひ出さうとしてゐたやうであつた

が、ふつと言つた。

「私こんな小舟、私國來た、見た」

「え、？　こんな舟？　……とすると、ボートだな！」

われを忘れて、私は息をはずませて訊いた。

「そのボートには、ど、どんな人が乗つてゐた？」

「はい、私ども、白人溺れる助けました」

「え、！　あの白人を？　……助けたと言ふのか？」

「はい、主人のやうに髯のある人間です」

「有髯人種？」　私は愕然として、「それは何人ぐらゐる？」

「はい、その小舟にいつぱい乗つてゐた」

「何人？」

そこでフライデーは行きつまつた。やつと、指を折つて數へて見て、

「十七人！」と答へた。

「ふうむ、十七人？　その十七人は今、どこにゐる？」

「はい、私の國に」

「生きてゐるか？」

「はい」

「すると、たしかにあの四年前この濱邊で難船した船の乗組員ではあるまいか？　とすると、フライ

デー、それは今から四年前のことだね？」

「然り！　たしかに四年」

「あ、さうか」　私は、無量の感慨の雲のごとく湧くのをおぼえながら「で、フライデー、その白人は

皆な無事か？」

「無事です。別に白人だけ住んで私國から食物もらつて生きてゐる」

「どうしてお前達は食はないのか？　お前達は食人種ではないか？」

「否！　彼等は白人種です、私ども、戦争して、勝つた時の他、人の肉食はない！」

フライデーは、昂然と答へた。

孤島脱出の大志

「海の彼方の陸地には同胞白人がある！

白人はスペイン人か？

ポルトガル人か？

ともあれ、俺

はこの海を乗切つて、あの有髯人種と連絡をとらなければならぬ！」
海を覗んで、私叫んだ。胸の血は湧き、熱氣溢れて、鬱勃たる覇氣は、すでに海波をしのぐやうに感じた。

思ふだに胸の血躍る大冒険！ いよく私は、あの大陸に向つて壯烈な遠征を企てるのだ。あの陸地にわたつて、白人と連絡をとれば、それこそ陸を距る四十マイルのこの孤島にあつて、單身歐洲へ歸らうとするよりも、どれほど有利な有望な計畫だか知れない。

「フライデーよ！」私は、元氣に呼びかけた。「私はお前の國に渡らうと思ふ」

「私の國？ あゝ私の故郷！」

故郷と聞いて、フライデーの眼は、懐かしさうに輝いた。火花のちるやうに爛々ときらめいて、潤んだ。

「さうだ、お前の故郷へ行かうと思ふんだ、だが、私が行つたら、お前の國の者は、きつと俺を捕へて食ふだらうね？」

「否！ 否！」

彼は、強く首を振つて、

「主人！ 私の國のもの、決して、白人を殺さない、皆な大事にする！ いろ／＼なことを教へても

らふ」

赤心面にあらはれる彼の態度で見ただけでも、その言葉に虚言偽りのあらう筈はない。

「それでフライデー、いよくお前の國へ行くことになる、第一に必要なのは、舟だ！ が、お前は漕げるね？」

「舟漕ぐ、私うまい！」

フライデーも、もう勇みに勇んでゐる。この忠實無二の僕は、故郷へ歸れるといふことよりも、私と一緒にいくことに、二重の歡びを感じてゐるらしい。

何といふ可憐な奴だらう！ 強い熱烈な嬉しい心意氣だらう！ またしても、私は、眼蓋の熱くうるむのおぼえた。

が、いよく海を越えてゆくとなると、第一の問題は、舟だ。往年、私の作つた舟もあるにはあるが、考へてみると、その時からもう二十三年もたつてゐる。雨風に破損したり、腐つたりして、そのまま役に立つとは思はれない。

「ぢや、いつそ大決心を以て、新たに獨木舟を一隻起工することにしよう！」

二人は相談の結果、まづ舟の材料である大きな樹を、全島にわたつて物色して歩いた。適當な樹は、なかく見當らなかつた。一本や二本あつたところで、濱からはあまりに遠く離れて

ある。

「うん、これで昔さんくんに失敗したつけ」

昔の苦い経験をフライデーに話してきかせながら、私達は、なほも適當な場所に、適當な樹をさがした。

苦心の甲斐あつて、たうとうフライデーが一本素敵な大木をさがしてあてた。その樹の名前は知らないが、樹肌の色あひもよく、第一、なんとも言へないよい香のする名木だ。

「ところで主人、中は焼いて洞にしませうね？」

フライデーが言つた。

「いや、焼くよりも、くりぬいた方がよい、そら、こゝに道具がある」

私は、フライデーに道具をあてがつてやつた。竝以上、すばしこい彼は、すぐ道具の使ひ方をおぼえる。

昔とちがつて二人でやるのだから、張合がある。一ヶ月た、ぬ中に、優に二十人は乗れる見事な大獨木舟が出来上つた。

二週間かゝつて、それを海にうかべた。

「主人、これなら、十分に海が渡れる。どんな嵐がやつて來ても怖くない」

フライデーは、もう得意満面。巧みに權を使つて、舟を操縦するに、その熟練、驚ろくばかりであつた。殊に、そんな大きな舟を二本の權で扱かつて巧みに方向を變へて見せる手腕には驚かざるを得なかつた。

しかし、工夫にかけてはやはり私の方が上手だつた、と言ふのは舟夫の方は、まづ人を得たから、私は、帆柱と、帆と錨とを、取付けようと考へついたので。

幸ひ近くに恰好のシイダアの木があつた、それを私は伐り倒させて、帆柱を作つた、さて帆であるがこの方は私が實に二十六年間しまつて置いた古い帆布を取り出したのである。

二十六年と言へば四分の一世紀。大事の帆もさすが腐つて切れぬになつてゐる。それを私といふ仕立屋さんが、針もなくつてつゞくり合せるのだから、容易なことではない。でもどうやらかうやら、三角帆の眞似ごとのやうな物を作り出した。

恰好は悪いが、やはり三角帆に違ひはない、私が昔、黒奴海賊船長の許から逃げ出した時もやはり、同じ三角帆をつかつたのだ。

帆柱と帆の上に、私はまた舵を取りつけた。なにしろ手下な大工さんだ、これだけの道具を作るのに、實に二ヶ月の努力をこめたのであつた。

「さあ、これに羅針盤さへ備はれば、立派な文明國の船だぞ」

私は空を見上げて呟いた。が、この一帯の空は曇るといふことは、ほとんどない。夜の空には、いつも星がキラ／＼と美しく輝いてゐる。

「まつたく、あの星さへあれば、羅針盤の必要はない。さあ、これで、どんなに遠い荒海でも乗切れるぞ！」

驚いたのはフライデーだつた。舟を漕ぐことにかけては上手だが、今までつひぞ、帆も舵も見たとがない。私にその使用法を教はると、熱心に喜んで覺えた。

蠻人討伐の門出

過去を考へると、實に、萬感胸に迫る……。

私がこの孤島の虜となつてから、二十七年目の記念日は來た。考へればまことに意味の深かつたこの二十七年間、たとひ最近の三年間はフライデーと一緒にゐて、その前とは生活がちがつてゐたにせよ、とにかく私には忘れがたい、大切な記念日だ。

「神よ、恵をたれたまへ」

來る年々のならはしで、私は跪づいて、神に祈ることを忘れなかつた。祈りながらも、心は何とな

い喜びの望みに満たされてゐた。喜び！ それは神の力によつて、いよく私が、この島から逃れ出る日もさう遠くはないと思はれたからだ。

けれど、さういふ望みに誘はれながらも、私は私に定められた努めを、疎かにしようとは思はなかつた。

私は、いつもの通り野外へ出た。畑で働いた。木を植ゑたり、垣を繕つたり、また葡萄を取つて乾したり、私は決して氣をゆるめるやうなことはなかつた。

折柄季節は雨期。私は新造の獨木舟を雨から保護もしなければならなかつた。で、小さな渠航を作つてそれに舟を入れ、更に木の枝を集めて苦をふいたり、雨除を作つたりした。

いよく、出、冒険の途にのぼる日を、十一、十二月の交に定めようとして、ひたすらにその日を待った。

ある朝は私はフライデーに言ひつけて、龜の卵を一つ取つて來いと命じておいた。フライデーは出かけて行つた。

が、暫らくして彼は引返して來た。まつしぐらに飛んで來た。

「おほ、主人！ 大變だ！ 大變だあ！」

「何んだフライデー？ 仰山な」と、近寄ると、フライデーは向うを指さして、

「お、向うに獨木舟が、一つ、二つ、三つ……おほ、一つ、二つ、三つ……」指さす手はブルブルとふるへてゐる。

一つ二つ三つ……一つ二つ三つ。

「解つた、六艘の獨木舟が濱へ來たと言ふんだな？」

「そぢやない、一つ二つ三つ……」

私は、ぎゆつと體中の引きしまるのを感じながら、

「よしよし、三艘だと言ふんだな、フライデー、決して恐れることはないぞ！」

だが、フライデーは顔色を變へて、まだガタガタとふるへてゐる。蠻人等が彼を探しに大舉して襲來したと思つたのだ。しかし、私の決心は固い、私は落着きはらつてフライデーを激勵した。

「フライデー！ お前が食はれるなら俺だつて食はれるのだ。もうかうなつては戦ふ他はないではないか？ お前、戦へるか？」

「はい、私、射ます。けど奴等人数多い」

「は、は。敵は多からうが、この鐵砲の威力にはかなはぬぞ、お前も一緒に戦ふがよい！」

フライデーは、感極まつたやうに、

「はい戦ひます、射ます！ 主人が死ぬとおつしやれば、私すぐ死にます！ 恐れません」

「お、よく言つた、フライデーでは一緒に、存分にやらう！」

二人はひしと手を取り合つた。それから私は、ラム酒を持つて來て、彼にも一杯飲ませた。

兼ねて用意の鐵砲を取り出すこと六挺、それに拳銃二挺、いづれも十分に彈丸を込めた。その上、私は例の拔身の太太刀を腰にぶち込み、フライデーには手斧を持たせて、しづくくと、出陣したのである。

まづ小山の中腹へ行つて、

「敵はいかに？」と、望遠鏡を執つてうかがふと、その勢すべて二十一人の蠻人が、三人の捕虜を拉して來てゐる。

獨木舟は三隻。

場所は、以前フライデーが逃げ出したところとは違つて、ずつと入江に近い濱で、附近には、一帯の森が茂つてゐる。

そこで、彼等は、連れて來た捕虜を屠り、その肉を肴に、殘虐きはまる例の酒宴を始めようとするのだ。

「憎むべきは彼等の所業だ、よし俺はこれから行つて、彼奴等を皆殺しにする！」
私は、くわつとなつて叫んだ。

フライデーも、勇敢に應じた。

「私も行きます、戦ひます！ 主人が死ねとおつしやれば、私すぐ死にます！」

犠牲者は白人

私達は進軍した。いよいよ驚天動地の活劇が始まるのだ。

私はまづ武器を分けた。フライデーには三挺の鐵砲を背負はせ、拳銃を腰へつけてやつた。私も、鐵砲三挺、拳銃一挺を身につけた。ラム酒の瓶を、かくしに入れた。

「フライデーよ、俺にくつついて来い、俺が撃てといふまでは、決して鐵砲を撃つてはならぬぞ！ 聲も出すこともならぬぞ！」

道々、私は、さう命じた。歩くこと、一マイルばかり、身をかくすに屈竟な森をさして進んだのである。

今や、私は人道のため、止むなく彼等蠻人を懲らさうとするのである。考へてみると、彼等蠻人とても、別段私を攻撃に來たわけではない。彼等は、たゞ無邪氣に、彼等が狩同様にしか考へないことを行ふのである。私は、神に代つて彼を處罰せよと送られた審判者ではない。

「それなのに、俺は、敢て俺の手を血にぬらして、俺みづからがまづ血まみれの所業をしようとしてゐる」

私は、良心の痛みを感じながら、やがて森にかゝつた。向うに見える一本の大木を指して、フライデーに、

「おい、お前はあの木へ登つて、敵の様子を偵察して来い」

「はい」

フライデーは、蹙音をぬすんで、向うの樹間へ入つた。

と、やがて引返して來て、

「主人よ、奴等は、焚火の廻りに坐つてゐます。そして、旨さうに捕虜の肉を喰べてゐます。も一人の捕虜はすこし離れた砂の上に縛つて投げ出してありますが、あれも後で食はれちまうんでせう」

「さうか」

私は、しつかりとなづいた。フライデーは聲をひそめて、

「ところが妙です、縛られてゐる捕虜は白人ではありません」

「白人でない？ とすると、なんだらう？」

「白人なんです。いつかポートで私の國へ流されて來た有髯人種なのです」

「なに？ 有聲人種！」

私は自分の耳を疑った。ぐらぐらと眼の前が眞暗になるやうに感じた。異様な戦慄が来て、私の脊筋を冷たく走った。

また咄嗟の怒りに、くわつとした。慄へる足を踏みしめて、自分も向うの木へ登つて行つた。頭上から、望遠鏡できつと向うを見た。

と、果して一人の捕虜が砂の上に投げ出されてゐる。残酷に手足を縛られて投げ出されてゐる。まぎれもない、白人だ！ 有聲人種だ！ 着物を着た歐羅巴人だ！ 私血は湧き、胸は躍つた。極度の激怒に喘ぎながら、樹の間づたひ、彼等の方へ進んで行つた。

基督教徒

とも知らぬ蠻人十九名は、とろくと燃える火を圍んで、人肉に舌鼓を打つてゐる。夢中になつてゐて、私達の近よるのも知らない。

その中の二人は、向うの白人捕虜のところへ行つて、今しも足の繩を解かうとしてゐる。眞にこれ危機一髪。

瞬間を逸せば、わが基督教徒の一人は、蠻人の恐ろしい兇手に斃れるのである。

私の胸は轟いた。フライデーに向つて、聲低く、

「銃の用意……」

さう私語いて、私は肩の銃を下におき、一挺だけを取りあげて、狙ひをつけると、フライデーも、同じやうに一挺だけで、射撃の用意をする。

「狙へッ！」

私は、照準をつけた。フライデーも、狙ひを定めた。

「撃てッ！」

同時に轟然たる銃聲！ 二つの鐵砲は一度に發射された。

鐵砲にかけては、今のフライデーは、私よりも巧みだ。

私の彈丸が一人を斃し、二人を傷けたのに、彼の一發は二人を斃し、なほ二人を傷けたのである。

あゝ、その時、殘る蠻人の驚きと言つたら！

轟然たる音響と共に、彼等は皆な飛びあがつた。跳ね飛んだ。が、鐵砲といふものを知らない彼等は、たゞ驚き恐れて、逃げ廻るばかり、それらどちらへ逃げたらよいか解らない。

たゞ、蜘蛛の子を散らすやうに、あちこちへ走り散るばかり。狂人のやうに駆け廻るばかりだ。音

だけで、氣絶したのもあつた。

その間に、私は豫備の鐵砲を取りあげる。フライデーも、私にならつて、取りあげる。

「用意——狙へッ！」

二人は、沈着に狙ひを定める。

「撃てッ！」

同時に「ど、どつ！」とまた二發。今度は彈丸が小さいので、斃れたのはたゞ二人だけであつたが、蠻人等の驚きは、一層烈しかつた。

彼等は、鋭い奇聲を發しながら、狂氣のやうに走り廻つた。全身血にまみれた奴は、走りながら、ぱたりくと倒れた。

倒れて、地の上で、びく／＼手足を動かしてゐた。

その機を外さず、私とフライデーとは、

「わあつ！」と、大聲あげて、疾風のやうに突進した。白人の捕虜の方へと突貫した。

白人にかゝつてゐた二人の蠻人は、もう疾うに逃げ出してゐて、海邊へ走り、そこにあつた獨木舟にと身をひそめたが、そのあとから、三名の蠻人も、獨木舟へ逃げ込んだ。

「フライデー、お前は、彼奴等を追撃せい！」

さう命じる聲の下から、フライデーは、獨木舟へと突進し、素早く、鐵砲を打ちかけた。そして、二人を斃し、も一人には重傷を負はせた。

一方、私はあとに残つて、ナイフを出して、捕虜の縛めを切り取つた。

助け起して、まづポルトガル語できいた。

「あなたは誰ですか？」

相手は息も絶々に、たゞ一語答へた。

「基督教徒」

ラテン語で、さう答へると共に、彼はまたぐつたりとなつた。

私は、用意のラム酒を取り出して、すゝめた。彼は、嬉しさうにそれを飲んだ。

私は、また訊ねる。

「あなたは何國人ですか？」

「スペイン人」

言つて起きあがりながら、手眞似をして、助けてくれた禮の意味を示すのであつた。

私は、おぼつかないスペイン語で、

「話はあとから……まだ敵がゐます、さ！早くこの拳銃と刀で、防ぎなさい」

「ありがたう！」

言ひさま、彼は二品を受取つて、必死の勢ひすさまじく、よろめきながら、敵の方へと突きすゝんだ。そして、逃げ遅れた蠻人に飛びかゝつて、二人まで切り倒した。

鐵砲で度膽をぬかれた蠻人どもは、衰弱したこのスペイン人にすら、對抗できなかつたのである。が、さすがは蠻人、味方が斃されるのを見ると、猛り狂つて、取つて返した奴があつた。

中にも一人の蠻人は、怒りの形相すさまじく、手に大きな木劍をひつさげて、眞向に振りかざし、白人目がけて打つてかゝつた。

蠻人が蠻力を以て振り下した木劍の下、あはやスペイン人の首はたゞ一打に碎かれたかと思ひのほか、彼は拳銃を取り出して「ずどん」と一發撃つて放てば、見事命中！ 蠻人は、ぼつたり斃れた。

かういふ間も、フライデーの奮闘は物凄く、手斧を打ち振りくくして、およそ四人の蠻人を殺し、二人を傷つけて追ひ散らしたのであつた。

かくて戦ひは終つた。二十一人の蠻人中、逃したものは僅かに四人、それ等は獨木舟に乗つて逃げたらしかつた。たしかに手傷を負つてゐたらしかつた。

「たうとう逃がしたか？」 私は齒きしりをして叫んだ。「あれを逃がすと、後難が恐しい。それ、フライデー、獨木舟で追つかける！」

「オーライ！」

フライデーと私とは、すぐさま濱にある敵の獨木舟の一艘へと飛び込んだ。

と、びつくりしたことには、その獨木舟にも、一人の捕虜が縛られてゐた。ひしひしと手足をからめられ、死んだやうになつて呻いてゐた。

見ると、これは白人ではない、やはり蠻人だ。

「おゝ、おゝ可哀さうに！」

私は呟いてラム酒を取り出し、

「フライデー、これを飲ませてやれ！」

フライデーはラム酒を持つて捕虜の傍へ立ち寄つた。と同時に、彼は、はつとした様子で、忽ち鋭い奇聲をあげた。

捕虜の方でも、なぜか、妙な唸り聲をあげた。

奇遇

「おや？ どうしたんだ？」

傍の私が不審するまもなく、フライデーは、いきなり捕虜の胸に飛びついた。抱きついた。頸をいだいて接吻した、泣いた、笑った。跳ね廻った。それから叫ぶ、踊る、飛びあがる。また泣く、歌ふ、笑ふ、自分の額をびしゃく叩いてゐる……まるで、狂人のやうだ。

「おい、フライデー、どうしたといふのだ？　おいフライデー！」
私が叫んでも耳にはひらないやうに、フライデーは、まだ飛び跳ねてゐる。歌つてゐる……踊つてゐる。

「おい、どうしたといふのだ？　フライデー！　お前は發狂したのか？」

私が、烈しい聲をかけると、やつと彼は氣がついたやうに、

「これ、私の父」と、一言言つた。

「え？　父？」

「然り、私の父！」

「あ、さうか！　お前の父か、道理で……」

私は言ひかけたが、あとが續かなかつた。何といふ奇遇、何といふ幸運！　だがまったくこれは幸運といふより他なかつた。もしも私達が今日こゝへ襲撃して來なかつたならば、哀れなフライデーの

父の運命は、どうなつてゐたか解らない。

「あ、危ないところだつた、よくも俺達は、この父を助けた」

言ひながら、私は、急に胸が迫つた。感極まつて、熱い涙が眼に溢れて來た。

「お、フライデー、お前はそれほど嬉しいか」

「はい、嬉しくつて……」

「さうだらう、俺も嬉しくつて……」

言ふ私は、聲を飲んで泣いた。フライデーの父にめぐり合つて喜ぶ様が、それほど私の心を感動せしめた。

父をいたはるフライデーの情愛、親切、孝心が、それほど私を感激せしめたのである。

彼は老いた父の傍にひしと寄り添つて、さも懐かしさうに、その顔を見た。自分の胸をひらいて、父の頭を抱き寄せて、それを温めてやつた。自分の逞しい両手をのべて、父の體を揉み擦り筋肉を撫でほぐして、たゞもう夢中。縛られた手足の痛みを治してやらうと苦心してゐるのであつた。

あゝ、その孝心！　誰か涙なしに見て居られやうか。

「さあ、フライデー、このラム酒を飲ませてやつてくれ！」　涙ながらに、さう私は言つた。
フライデーは、喜んで、藥用代りのラム酒を、父にすゝめた。

早走りの名人

蠻人の交りにも、ふかい人情はあつた。半生を孤島に幽棲した私は、こゝに再び人間社會の再現するのを見たやうな氣がされた。私の胸は人の心をもつ美德にふかく動かされた。

が、さういふ間に、蠻人の乗った獨木舟は、逃げ去つてしまつた。尤も、結果から考へると、獨木舟を追はなかつたのは此方の運がよかつた。と言ふのは、それから二時間ばかりして、恐ろしい暴風雨が、この濱一帯を襲つたからだ。その恐ろしい暴風雨にあつては、蠻人とても首尾よく彼岸へ歸れたかは疑問だ。

それはともかく、フライデーがまだ、父をいたはり看護してゐる時だつた。私は、ふつとフライデーにきいた。

「ラム酒で元氣になつたが、ベンもやりたいね、お前持つてゐるか？」

するとフライデーは困つたやうな、表情をして、

「ベン、私残らず喰べてしまつた」

「ぢや、こゝに乾葡萄がある、お父さんにやるがよい、お前も喰べるがよい」

さう言つて、私はかくしから用意の乾葡萄を取り出して與へたが、彼は自分では決して喰べなかつた。自分の分まで残らず父にやつた。

その上に、

「水がやりたいな」

さういふ私の言葉を聞くと共に、彼はすばやく獨木舟から飛出して、森の向うへ走つて行つてしまつた。

「おや、どこへ行つたのだらう？」

私が呟くもまなく、彼のすがたは早や樹立の此方にあらはれた。

彼は、ラム酒の瓶を持つて、飲水を取りに行つて來たのであつた。その足の早いこと、まつたく驚くばかりであるが、これも後でだんく聞くと、フライデーの國の土人は非常に足の速い人種だつたといふことである。實際、フライデーもその走る速力は人か馬か解らぬほどで、足は宙を飛び、風のやうな速さで走つたのであつた。

感すべき我フライデーは、その上に、持つて來た水を、かのスペイン人にも分けてやつた。

父とともに、スペイン人をも背負つたり、助けたりして、私とともに、私の要塞へ連れて來たのであつた。

で、彼は、引返して、死骸の後片附けをじたり、萬事を働いて来た。

かくて、その日から、私の家の人数は急にふえて四人となった。無人島は、今や完全に人間の住む島となつて、しかも全島の王は、依然として私であつた。

他の三人は、いづれも命の恩人として、私を尊敬し、主君としてあがめるのであつた。實際私は人の住む今も、依然として全島を所有し、全島を統治し、絶対的の帝王として君臨してゐたのである。私は、島の法律を布き、防備を整へ、軍事上の全權も握つてゐる。いな、三人の命を握つてゐる。なぜならば、三人とも、私のためならば何時でも命を投げ出して盡さうと期してゐるから。

唯一つ、私のまゝにならないことがある。それは、三人が三人、信じる宗教が違つてゐることだつた。フライデーは新教徒、フライデーの父は偶像崇拜者、そしてスペイン人は天主教徒であること、これであつた。

私は、勿論、國民の三人すべてに信仰の自由を許した。

暗い疑ひ……

日々の食卓は、ますます賑かに楽しくなつた。

都合のよいことには、三人皆なお互の言葉が通じることだつた。スペイン人もまた土語に通じて、私達の間を通譯してくれ、食卓の話題を賑はした。

「時に、あの獨木舟に乗つて逃げた蠻人はどうしたらう？」と私は問ひかける。「大舉して仕返しに来るやうなことはないだらうか？」

「その御心配はないだらうと思ひます」と、フライデーの父が、フライデーの通譯で答へる。

「と言ふのは、あの晩のあの嵐ですもの、奴等は海で死んだか、事によると、どこかの岸に流れ着いて、その蠻人に捕つて食はれてしまつたでせう」

「奴等もひどくびつくりした様子だね？」と私。

「いや、あの時は、奴等のびつくりした様子と言つたら！ 何しろ、あの鐵砲の音と火ですもの！

きつと彼等は、あなたとフライデーと鐵砲を、みんな悪魔と思つたでせう！ いや、たしかに人間のすることとは思はなかつたらしい。と言ふのは、奴等が、あの戦の最中、雷だの、稲妻だのと叫んであましたから、たとひ國へ歸つたところが、悪魔の雷に撃れたと言ひふらすでせう。まつたく、あんな遠いところから、火だの音だの烟だの飛ばして人を殺すなどとは、思ひもつかないことなのですから。」

フライデーの父がさう言ふと、今度はスペイン人も、別な話題を持ち出して、

「いや、時にロビンソン様、向う岸には、まだ私の仲間が多勢居りますが、どうにかならないものでせうか？」

「多勢と言ふと、何人ぐらゐ？」

「それが私と同國のスペイン人とポルトガル人、合せて十六名なのですが、食物や着るものは實に困り切つてゐるのです。土地のものには、よくしてもらふけれど、その生活の惨めなこと、お話しになりません！」

「氣の毒なことですなあ！ 救つてやる手段がないこともないでせうが……」と言ひかけて私は、話頭を轉じた。

「時に私はあなたに訊かう、訊かうと思つてゐたが、一體、あなた方が難破した時は、どこへ行く途中だつたのです？」

「はい、あの時は、リオ・ド・ラ・ブラダからハヴァナへ行かうとする途中なものでした。船は勿論スペイン船で、御承知のあの嵐に會ひ、食人國の岸へたどり着いてからといふものは、何時喰はれてしまふか、判らないといふので、未だに氣が氣ではないのです」

「ところが、情けないことに、舟を作る道具がありません。逃げ出しても肝心の食料がありません」と言つて、スペイン人は私に向つて、哀願するやうに、

「いかゞでせう？ あなたの力で、私の仲間を救ひ出すことが出来ないものでせうか？」

「さあ……」、私は考へて「ですが、假にこゝで私が冒險して、あなた方を救つたところが、感謝といふものは、もとく人間誰にも共通の本性ではないですからね。せつかく私が骨を折つたところで必要がなくなつた後、酷い眼にあつてもつまりませんからな。世間によくある例ぢやありませんか。人は彼が受取つた恩を返すに、仇を以てすると、かう言ふぢやありませんか」

すると、スペイン人は、はらくと涙をこぼして、

「ロビンソン様、それが人間社會の常だとすれば、何といふ悲しい人間社會の約束でせう、心の清いものに對しても、さう御解釋なさらねばならぬものとすれば、私は、心が痛みます……」

スペイン人の婉曲な言葉には、たしかに動かすことの出来ない眞理があつた。たま／＼人間の交りに戻りかけるとすぐ、さういふことを考へた私は、私自身の心の持ちやうが、哀しく不快にもなつた。スペイン人は、熱心に、

「では、かういふことにいたしましたませうか、多少でも、あなた様に疑ひをかけると申すことならば、私さまがまづ責任を以て、彼等十六人の誠實を保證いたしますせう。彼等はすべて教育もありますし、第一今は、生きるか死ぬるか、困窮の惨めなドン底生活に喘いでゐるものでございます。願はくば、あなた様さまが、たゞ一片の恵みを垂れてくださつたなら、實に十六人といふ多數の人命が救はれるのでござい

ます。もし、それでもお疑ひになるといふのでしたら、私がこのフライデーの父を連れて向うへ渡り、彼等の誓を取つてまゐりませう。神と良心にかけて誓を結び、彼等は絶対にあなたの前に命をささげ、服従し、あなたを奉じて、基督教國に安全に渡ることを誓せてまゐりませう」
熱い涙と、真心をこめたスペイン人の言葉は、深く私の心をうごかした。私は、私の疑ひの氣持が氣恥かしくなつた。

で、こゝに、いよくスペイン人とフライデーの父とを彼岸の陸地へ送ることに決心した。そこで、十六名を一まづこの島へ招いで、それから基督教國に渡ることに、手筈をきめた。

使者の出發

だが、いよく遠洋渡航の志を樹て、も、まだ私には、なさねばならぬ仕事が多かつた。

「もしも、彼等の仲間十六人が來るとすれば、第一に必要なを感じるのは、食料である。十六人の客の來る前、私はまづ、彼等のため私達のため、食料を豊富にせねばならない」

そこで、私達四人の勞働が始まつた。私達は、例の木の鋤を以て、こつくと地を耕し始めた。種を蒔いて、植ゑつけて、收穫を待つた。食料を得るだけで、實にその後半ケ年の必死の勞働を要した

のであつた。

語にも、

「人一たびバンに事缺けば、彼を救つた神にすら叛く」とある。

私達は、たとひ四人の小人數とはいへ、あきらかに社會的の集團をなしてゐるのであつた。野の勞働にも、米、麥の收穫にも、バンを作るにも、山羊の乳をしぼるにも、葡萄の實を乾すにも、また龜の卵を取り、鳥を撃つものにも、私達の仕事は共同であり、分業でもあつた。

彼岸の陸地へ渡るためには、私達はまた、相當の船の準備をせねばならなかつた。それもやはり分業にして共同の勞作であつた。

船の材料の木を伐出すためには、フライデーの父子があつた。
スペイン人がこれを監督した。

私は、私で、材木を板に削つた。板の長さ三十五フィート、幅二フィート、厚さ二インチから四インチ。それを十二枚も削り出した、私の血の汗の努力は、異常なものだつた。

半ケ年を経て十月の十五日となれば、いよく、スペイン人とフライデーの父とは、島の使者として、彼岸の大陸へ出發することゝなつた。私は、特に二挺の鐵砲と、彈藥とを二人に授けた。食料としてはバンと乾葡萄とを、あり餘るほど船に積ませた。